357
201

57-7

帝國圖書館藏

トルストイ著

全譯

戰爭と平和

島村抱月
鈴木悅
共譯

大正
5.12.25
内交

序

人間の一生に於て最も幸福な時代は、恐らく異性に對してロマンティックなホーリイな戀を感じ得るの時代、ひいて其の戀を成就し得た時代であらうと想ふ。言ふまでもなく、此の如き戀は純眞無垢な若き心にのみ培はれ得るところのものである。若き心は、光であり熱である。自らなる伸展と精進とを、其の特質とする、從つて其所には死の豫想されるやうな黑い影はない。何人と云へども一度は必らず、かうした時代を經驗するやうに、我がトルストイにもまた、さう云ふ時代があつた。かの賢夫人ソフイ・アンドレー井ツチ・ベルスを妻とした前後の十余年間が正しく夫れである。初めて彼女に愛戀の情を捧げたのは、彼が三十才を越してからのことであるが、自分の穢れた消耗した生命は、この若い無邪氣な娘(その時分彼女は十七才であつた)の生命と相交るべき權利を持つてゐないと

彼は考へた。それほどに彼の心は純眞であり、其の戀は敬虔の念にみちたものであつたのである。それから三ヶ年の間、彼は此の樣な苦しい、けれど美しく貴い戀をつゞけた後で、彼女と結婚した。そして、それ以來幾年間と云ふもの、暖い彼女の愛の翼のもとに、夫れ以前にも、その以後にも經驗しなかつたところの幸福な、平和な日を過したのであつた。かうした境遇にあつて書きあげられたものが、彼の數多い作中で、量に於ても、質に於ても、最も秀れたもの、ロマン・ローランの所謂「有らゆる十九世紀の大作を眼下に見下ろす巨大なる記念像」即ち「戰爭と平和」である。年代から言へば、西曆千八百六十四年から六十九年、年齡から言へば、彼が三十七才から四十二才にかけての六年間を費して完成せられたもので、夫人ソフイは其の間に七度も淸書したと傳へられる。

單に以上の事實から推して見ただけでも、此の偉大なる一篇を創作中のトルストイが、如何に精力旺盛であり、且つ其精力を如何に存分に驅使

し得たかは容易に察せられることである。

まことに此の一篇こそは、我がトルストイの青年期の結論を示すものであり、また其の八十年の長き一生を最も高く、最も力强く盛りあげて見せるもので、例へば、眞晝の野に立つて、晩春初夏の吐しきばかりに鮮やかな新綠を望むの觀がある。

此所には、あますなき人生の諸相がある。生がある、死がある、暴虐と危計と、愛と熱と、情と歡樂と、惑溺と悲哀と苦悶と、光と闇と、凡そ人間として經驗し得られる限りの總てがある。そして、其の總ては、「創世紀の神」の如き崇高なる天才によつて支配せられてゐるのである。實に「戰爭と平和」は、成りたるトルストイと、成るべきトルストイと、即ちトルストイの全部を含むと共に、我等を自由に呼吸させるところの、一個の大なる自然であり、宇宙である。

ナポーレオンのロシア侵入時代に材を取りたるものなるが故に、之れ

を單に一大歴史小説として見るとする。其所には、メレジユコースキイか誰れかの言つたやうに、其の時代に特殊な色澤がなく、描かれた戰爭は、或る一定の時に、或る一定の場所で起つた過去の事實としての戰爭ではなく、一般に「戰爭と云ふもの」であるかも知れない。併し私は、同じ人が以て批難の理由とした「人物の數々が悉く歴史上の人物ではなく、我等と同じ空氣を吸つてゐる近代人である」ことと、その事に主要なる價値を置くと同時に、限りなき感謝をさへ捧ぐるものである。

この飜譯は、大體 Constance garnett の英譯を基礎としたものであるが、傍ら Nathan Haskell Dole の英譯を參照し、更らに友人山内封介氏の力をかりてロシア文の原書と對照し、出來る限り誤謬を訂正した。而も尙ほ私の不敏と無智とが此の名篇を傷けたことの多かるべきを思ふて恐懼に耐えない。下卷の卷末に附した後語一篇は、以上の英譯にはないので、全部山内氏の手によつて原文から譯出して頂いたものである。

この譯書の世に出るに就ては、恩師島村抱月先生の多大なる援助による以外に、親切な先輩や友人の助力を仰いだことも甚だ多い。心よりの感謝を表する次第である。

飜譯を終へるまでの前後二ヶ年の間には、自分の身邊には誠に種々なことが起つた。最初この飜譯事業の爲めに物質上の助力を與へられたのは植竹喜四郎氏であつた。まだ全部の完了を見ないうちに、其所から出版すべき筈であつた同氏經營の植竹書院が開散した。之れは自分一個にとつても遺憾この上ないことである。去年八月には愛兒を失ひ、間もなく其の年十二月には莫逆の友桂井當之助が世を去つた。(彼が、私の仕事の爲めには、如何に忙しい中にあつても助力を惜しまなかつたこと

は言ふまでもない。）小さな私にとつて、之等の事件は、實際大き過ぎる打撃である。滅茶々々に傷き破れた心を抱いて、私は今年七月故郷の山寺に去つた。骨の髓にまで喰ひ入つた悲哀と懊惱との中から、私は新な私自身を見出さなくてはならない。

今、この譯書の出版さるゝに際して、原著者の偉大なる靈に對しては言ふまでもなく、逝ける親しきものたちに對しても、お佗びをしなくてはならぬやうな氣がする。所詮この譯書一篇は、自分にとつては、完了の喜びよりも、寧ろ痛苦の記念となるべきものである。

大正五年十二月一日

嵩山正宗寺の寓居にて

鈴木悦

戰爭と平和

上卷

第一編

一

「ねえ、公爵、ヂェノアとルッカとは今ぢやボナパルト家の屬領同樣ですわね。お氣をつけなさいよ、愈々戰爭を始めると有仰らなければ、このキリストの敵——私は確に彼はキリストの敵だと信じてゐます——の總ゆる惡評や、總ゆる兇暴をまだ大目に見て被居るのなら、私共のお付き合ひは之れ限りですよ。あなたは、もう私のお友達ぢやありません。あなたは、もう御自分で有仰るやうな、私の忠實な奴隷ぢやありません。それはさうと、御氣嫌よう、御氣嫌よう、吃驚させましたわね。さ、お掛けなすつて、何も彼もきかせて下さいましな。」

有名な宮女で、皇后マリヤ・ヒヨードロウナの腹心の侍女アンナ・パアウロウナ・シエーレルがかう言つたのは千八百五年七月の或る晩であつた。夫れは、彼女の夜會へ一番初めにやつてきた有力な政治家ヲシーリイ公爵への挨拶

であつた。

アンナ・パアウロウナは、この數日間咳をしてゐた。彼女は、彼女の所謂グリップに襲はれてゐたのだ――グリップは、其時分は滅多に人の使はない新しい言葉であつた。

その朝、彼女が赤い仕着をきた從僕に配布させた幾枚もの小さな口上書には、悉く同じ文句が書いてあつた。

「伯爵《又は公爵》、別にお差し支へがございませんでしたら、そして、哀れな病人と一緒に一晩過ごすことが餘りお辛くございませんでしたら、七時から十時の間に宅でお目にかゝるのを樂しみにして居ります。

アンネット・シエーレル

「おや〳〵何と云ふ手酷しい攻撃だらう！」公爵は、此樣な挨拶には少しも面喰はないで、近よりながら應答した。彼は刺繍のある參内服を着けて、長い靴下に、上靴を穿き、胸には勳章をかけて、ウマミのない顏に晴々した微笑を浮べてゐた。

彼は素敵に立派なフランス語を使つた。吾々の祖先は、夫れで話をする許りでなく、考へることをもしたものだ。彼の聲は、長い間交際社會や宮中で暮した身分ある人にふさはしい低い、そして恩人ぶつたやうな聲であつた。

彼はアンナ・パアウロウナの傍へ行つて、香水臭いテカ〳〵した頭を下げて、彼女の手に接吻した。それから樂々と長椅子に腰を下ろした。

「ねえ、先づ、あなたの容態をきかせて、あなたの友達を安心させて下さい。」と彼はロシヤ語で言つたが、聲の調子は前と變らなかつた。彼の言葉は慇懃で親切なのだけれど、その語調には冷淡な、嘲笑するやうなところがあつた。

「みんなが道德上の苦痛を感じてゐる時節ですもの、誰れだつて快い筈がないぢやありませんか？　幾分でも感情を

もつてゐるものなら、こんな時代に惱まされずにゐる筈はないぢやありませんか？」とアンナ・パアウロウナは言つた。「あなた、今晩はズッとゐて下さるでせうねえ？」

「だが、英國大使の祝宴は？　今日は木曜日ですね。私は彼所へ顏を出さなくちやならんのです、」と公爵は言つた。

「今に娘が迎へにきて、私を連れて行くでせう。」

「今日の祝宴は延期されたと思つてましたわ。實を言へば、祝宴とか花火とか云ふものは、みんな、だん〳〵憑らなくなりますわね。」

「あなたのお望みだと知つてたら、祝宴は延期されたのでせうにね。」と公爵は言つた。信じて貰はふとは思ひもしないことを、螺線を卷かれた時計のやうに言ふ何時もの癖が出たのである。

「からかはないで下さい。ねえ、ノウオシルトソフの急報の一件は何う型がつきましたの？　あなたは何も彼も御存じでせう。」

「お話するほどのこともありませんね。」と公爵は彈まない、面倒臭さうな調子で言つた、「何う型がついたつて？　ボナパルトは自分の船を燒いた、夫れから吾々は吾々の船を燒かうとしてゐるらしい、と云ふまでですよ。」

ワシーリイ公爵は、仕馴れた芝居の役を繰り返す俳優のやうに、何時も懶げな物言ひをした。ところが、アンナ・パアウロウナ・シエーレルは四十歳にもなるのに非常に感激し易く、興奮し易かつた。物に熱注すると云ふことが、交際社會に於ける彼女の位置を特殊なものにしてゐたので、何うかすると氣の進まない時でも、强ひて例の通り熱注して、自分の懇意な人達を失望させないやうにした。

彼女の顏に絶えず漾うてゐる氣取つた微笑を見ると、衰へたその容色とは釣合はなかつたが、丁度駒々子同樣自分

の缺點が愛嬌になるやうに常々思つてゐることが知られた。彼女は自分で夫れを矯正しやうとも思はなかつたし、矯正する力もなかつたが、又實際矯正すべき必要をも感じなかつた。

政治問題に就て話してゐるうちに、アンナ・パアウロウナは非常に興奮して了つた。

「あ、アウストリアのことは言はないで下さい！　私はアウストリアのことは何にも知らないかも知れませんよ、ですけど、アウストリアは斷じて戰爭をする氣はありませんでした、今だつてありません。あの國は私共を裏切つて居るのです、歐羅巴の救主にならなくちやならんのはロシアだけです。私共の聖上は御自分の高い運命を御存じです、そして忠實に夫れに從はれるでせう。之れは私が固く信じてゐることの一つです。私共の崇高仁慈な皇帝は此世の中での一番大きな役目を持て居られます。そして陛下は、あのやうに御高德で氣尙くて被居るんですもの、神樣は決して見放しはなさいません。この人殺しの、狼藉者となるに及んで、之れ迄にない怖ろしいものとなつた革命のハイッラ（譯者註、ギリシア神話に於て、ヘルキュルスに退治された多頭の蛇）を絞め殺して……陛下は御自分の天職を果されるでせう。私共ばかりが正義の血を償ふべき使命を帶びてゐるのです。……私共の頼りになるものがありますか？……あの商人根性の英國はアレキサンダア皇帝の高き御心を理解しません、又理解しやうたつて出來はしません。あの國は、マアルタを明け渡すことを拒みました。あの國は、私共の行動の中から何か秘密の動機を見付けやうとして、探してゐるのです。彼等はノウオシルトソフに何んと言ひました？　何にも言ひません。御自身の爲めには何物をも顧はず、偏へに人道の爲めに盡される私共の皇帝の獻身の御心を彼等は了解しませんでした、了解する力はありません。夫れから彼等は何を約束しました？　何にも約束しません。之れまでに約束したことでさへ何にもなりますまい！　ブルシヤは、ボナパルトは打ち勝ち難きものだ、歐羅巴全體が彼に對しては手も足も出ない、と公言

しました、……で、私はハルデンベルグやハウグウイッツの言つたことは一言だつて信じません。あの有名なプルシアの中立は罠に過ぎません。私が信用するのは神樣と、私共の崇拜する皇帝の高い運命だけです。陛下は歐羅巴を救はれるでせう！」彼女は自分の興奮したのを喜ぶやうに微笑して、不意に言葉を切つた。

「私はかう想ひますよ、」と公爵はニコ〳〵しながら、「吾々の愛するウインツェンゲロデの代りに、若し、あなたが遣られたら、ブルシアの皇帝を一擧に說き伏せて了つたことでせうにね――あなたは實に雄辯だ。お茶を一杯頂けませんか？」

「只今直ぐに、夫れはさうと、」彼女はまた落着いて、言ひ添へた、「今晩は面白い方が二人まゐる筈になつてゐますよ。モルトマアル子爵、この人はフランス中での一番立派な名門の一つのローアン家を通して、モンモランシエ家の緣類になつてゐる、本當の、立派な亡命者の一人です。夫れから長老のモリオ、あなたは、あの人の大善智識を御存じですか？　あの人は陛下に謁見を許されましたよ。あの人を御存しですか？」

「あゝ、さうですか！　お目にかゝれゝば非常に仕合せです、」と公爵は言つて、「ところで、」と、急に何か思ひ出した、と云ふ風に、殊更ら無頓着に言ひ足したが實は其爲めに訪問したのであつた、「皇太后陛下はフンケ男爵をウキンナ公使館の一等書記官に仕命する思召しだと云ふことだが、事實ですか？　私には、あの男は適らない人間のやうに思へますがね。」

ワシーリイ公爵は、或る一派のものが皇后マリア・フョードロウナの力を頼つて、男爵を据ゑやうとしてゐる其地位に、自分の悴を、就任させ度いと思つてゐたのだ。

アンナ・パアウロウナは殆んど目を閉ぢて、自分であらうと、誰れであらうと、皇后陛下の思召しは解るものでない

と云ふことを示した。

「フンケ男爵は皇太后陛下に、陛下の御妹子から推薦されたのです。」と彼女はフランス語で、手短に素氣なく、沈鬱な調子で言つた。アンナ・パアウロウナが皇后のことを話す時には何時でも、其顏には不意に、沈鬱な蔭を帶びた敬愛の深い純な表情が現はれた。之れは、自分の貴い保護者のことを思ひ出す時に生ずる彼女の特徵であつた。彼女は、皇后陛下はフンケ男爵を懇篤にもてなされたと言つた。すると又しても沈鬱な蔭が、その顏をかすめた。

公爵はヨッ〳〵しく口を噤んでゐた。アンナ・パアウロウナは、女の、取別け宮中で育つたものゝ特色として機敏に如才なく、公爵が皇后に推薦された人に思ひ切つたケチをつけるのを懲らしたのであつたが、夫れと共に彼を慰めた

「夫れは兎に角、お宅の話をしませうよ、」と彼女は言つた、「お嬢さんは交際社會へ出られてからと云ふもの、誰れをも彼れをも惹きつけてゐますよ。お日樣のやうに美しいと云ふ評判ですわ。」

公爵は頭をさげて、尊敬と感謝の意を表した。

「私はよく思ふんですよ、」アンナ・パアウロウナは公爵の傍へ寄つて、政治談や世間話はなくなつたから、之れからは親身な話をしませう、とでも言ふやうに、媚びるやうな微笑を見せながら、言ひ續けた。「人生の幸福と云ふものは、時として下公平に割當てられてゐるものだ、とよく思ふんですよ。あんな立派なお子さんが二人何うして、あなたにお授りになつたのでせうね――一番若いアナトールは別ですよ――私はあの方を好きません」(彼女は眉をあげて、キッパリと揮しはさんだ)――「あんな可愛い子供達をね？　それでゐて、あなたは實際誰れよりも、あの方達のことが解らないやうですわね、だから、あなたは、あの方達を子に持つ資格はありませんよ。」

かう言つて、彼女は例の熱注したやうな微笑を浮べた。

「何うしろと有仰るんですか。ラバアテル（スウキツルの牧師にして人相及び宗教の學者）に尋ねたら、私には愛兒心の腫瘤がないと言ふでせう。」と公爵は言つた。

「冗談言ふのは止して下さい、私は眞面目にお話がしたいのです。私が、あなたの末の息子さんを好かないのは御存じでせう。此所だけのお話ですがね、（此所で彼女の顏は例の沈鬱な色を帶びた）みなさんが皇后陛下の御前で、あの方の話をして、あなたのことを氣の毒がつてゐましたよ。」

公爵は何とも答へなかつた。けれど彼女は意味ありげに微笑しながら、默つて彼の答を待つてゐた。ワシーリイ公爵は顏を顰めた。「何うしろと有仰るのですか？」と到頭彼は言つた。「御存じの通り、私は彼等の教育の爲めには親として出來るだけのことは何も彼もしたのです、ですが二人とも案外馬鹿になつて了つたのです。イッポーリイトは少くとも穩かな馬鹿ですが、アナトールは亂暴な馬鹿です。二人の相異と言へば夫れだけですよ。」彼は何時もよりは餘程不自然に、活々と微笑して言つた。そして夫れと同時に口の周圍の皺の中にマザ〳〵と、思ひがけない野鄙な、不快な表情を浮べた。

「何うして、あなたのやうな人に子供が出來たのでせうね！　お父さんでさへなかつたら、あなたには缺點はないでせうにね。」アンナ・パアウロウナは物思はしげな目をあげて言つた。

「私は、あなたの忠實な奴隷です、だから、あなたにだけは白狀することが出來ますがね、私の子供達は私の生存の邪魔物です。私の十字架です。私は自分で、かう說明をつけてゐますよ。何うしろと有仰るんですか、」……彼は手振りで、自分は殘酷な運命を諦めてゐると云ふことを示しながら言葉を切つた。アンナ・パアウロウナは少しの間考へに沈んだ。

「あなたは、あなたの道樂息子さんのアナトールを結婚させやうと思つたことはありませんか？　世間では、」と彼女は言つた、「老嬢と云ふものは無暗に媒酌をしたがると言ひます。私は之れまで、まだ自分に其樣な弱點があると思つたことはありませんが、心當りの可愛い娘さんがあるんです、其娘さんは私の親戚のもので、バルコンスキイと云ふ公爵の令嬢ですがね、お父さんと一緒では幸福に暮らせないのです。」

ワシーリイ公爵は返辭をしなかつた。けれども其頭の動き方で見ると、世間的な人間獨特の敏速な記憶力と考察力とを以て彼女の言つたことを呑み込んで、考へてゐるのは明らかであつた。

「彼奴には年に四萬ルーブルかゝるんですからねえ。」と彼は言つた。苦しい思ひを抑へることの出來ない容子がアリ〳〵と見えた。彼は一寸言葉を切つた、「この割合でいつたら五年後には何うなるでせう？　父親たるの利益と言へば此樣なものです……金持ちなんですかね、あなたの有仰る若い公爵令嬢は？」

「その娘の父は非常に金持ちですが嗇いんです。田舍で暮してゐます。あなたは、先帝の御生前に退隱した、あの有名なバルコンスキイ公爵を御存じでせう。プロシヤ王と云ふ綽名がありました。大變賢いんですけど、偏屈で六ケ敷い人なんですの。可哀さうに、あの娘は此上なしの不仕合せなのです。兄が一人ありますが、つい此頃リイザ・マイネンと結婚しました。クツウゾフの副官です。今晩此所へまゐるでせう。」

「ねえ、アンネット」、公爵は不意に友達の手を取つて、何う云ふ譯けか、夫れを下の方へ曲げながら言つた。「此話を纏めて呉れませんか。すれば私は何時までも、何時までも、あなたの忠實な奴隷です。其娘は名家で金持ちの娘でせう――私の望み通りです。」

夫れから彼は至極目に立つスラ〳〵とした自然な上品な身振りで、彼女の手を持ちあげて接吻した。そして、熊鞠

してからも尙ほ其手を放さずに、自分の安樂椅子へ戻つて、片脇へ目をやつた。

「待つてらつしやいよ！」とアンナ・パアウロウナは一寸考へてから言つた。「今晩直ぐにリイザ（若バルコンスキイの夫人）に其話をしませう。それで、大方纏るかと思ひますわ。お宅のことから、老嬢の年季を入れ始めませうよ。」

二

アンナ・パアウロウナの客間はだん〳〵こみ出した。ペテルスブルグの最上流の人々が其所へ集つた。年齡や性格は、みんな銘々大變に異つてゐたけれど、屬してゐる社會は誰れも彼れも同じであつた。ワシーリイ公爵令嬢の美しいエレンは、一緒に大使の祝宴へ行く爲めに父を連れに來た。彼女は舞踏服を着て、帝室の徽章をつけてゐた。ペテルスブルグぢうで一番人を惹きつける女として有名な小柄なバルコンスキイ若公爵夫人も來た。彼女は此前の冬結婚したのであつた。そして今は妊娠中なので、大きな饗應に顏を出すことは止めたけれど、小さいのへは矢張り出るのであつた。ワシーリイ公爵の息子のイツポーリイト公爵もモルトマアルと一緒にやつて來て、彼を紹介した。長老モリオや其他多くの人々も來た。

「まだ私の伯母を御存じぢやありませんか、夫れともお近付きぢやありませんか？」とアンナ・パアウロウナは來る客毎に言つた。そして長い襟飾りを着けてゐる小さな老婦人の傍へ、大眞面目で彼等を案内した。その婦人は客が來始めると直ぐに隣室から乘り出して來てゐたのである。アンナ・パアウロウナは一人々々の名前を言つて、客から「私の

伯母」へと除ろに目を移して、夫れから自分の席へ戻るのであつた。

客はみんな、誰れ一人知つてもゐなければ、知らうと思つたこともない此伯母に挨拶の禮式を履まなくてはならなかつた。アンナ・パアウロウナは悲しげな、眞面目くさつた顏付きをして、頷きながら默つて、彼等が挨拶を取り交すのを聞いてゐた。

（私の伯母）は新しく來る人の一人々々に、キチンと同じ言葉で、彼等の健康をたづねたり、自分の健康を話したりして、夫れから、「お蔭で、今日は大變お宜しい」皇后陛下の健康の話をした。みんな急いで禮儀を缺くやうなことはしなかつたが、不愉快な義務を果して了ふと、救はれるやうな思ひをして老婦人の傍を去つた。そして其晩ぢう二度と彼女に近寄らうとはしなかつた。

バルコンスキイ若公爵夫人は、金刺繍のしてある天鵞絨の袋へ何か編物を入れてもつてきた。柔毛で微に動んでゐる彼女の美しい小さい唇は少し短くて齒が現はれてゐた、が其唇が上へあげられると一層可愛らしく、時々、下へさげられて下唇と合はさると夫れよりも、もつと可愛らしかつた。申分のない可愛らしい女の常として、その缺點——唇が短く、口が半ば開いてゐると云ふ——は彼女の特種な、獨特の美しさのやうに思はれた。間もなく母になると言ふ希望の爲めに大變しとやかになつてゐる、非常に健康で、活々した此美しい若い婦人を見るのは誰れにとつても愉快であつた。老人や、退屈して憂鬱になつた若い男達は、彼女の傍にゐて、少しの間彼女と話をしながら彼女の顏を見てゐると、自分がだん〳〵彼女に似てくるやうな氣がした。彼女と話をして、その晴れやかな微笑と、一言毎に現はれる艶々した白い齒とを見る者は、誰れでも定つて、其日は何時になく愉快であつたと言ふ印象を得て去るのであつた。實際みんな同じ思ひがした。

若公爵夫人は編物袋を手にもつた儘、少し體を搖るやうにして小刻みに急いで歩きながら、テーブルを廻つて行つて、樂しげに着物の褶を整へながら、銀の湯沸の傍の長椅子に腰を下ろした。彼女のしたことは何も彼も、彼女自身と其周圍の人々とのための慰みでどもあつたかのやうに思はれた。

「私は編物を持つてまゐりましたの。」と彼女は、網袋を見せながら、一座全體に向つて、フランス語で言つた、「ねえ、アンネット、惡い惡戯はしないで頂戴よ、」と女主人の方へ振り向いた。「お手紙には、全くちよいとした夜會だと書いてありましたわね、御覽なさいよ、私、こんな服裝をして。」

かう言つて彼女は、レースで縁を取つて、胸の少し下のところに廣いリボンの帶を付けた立派な、灰色の着物を見せびらかすやうに兩手を擴げた。

「御安心なさい、リイゼ」、とアンナ・パアウロウナは答へた、「あなたは何時だつて一番美しいんですよ。」

「良人は私を捨てゝ行かうとしてゐますわね」、彼女は同じ調子で、或る將軍に向つて言ひ續けたが、「あの人は死に行くのですわ、——ねえ、何の爲めに、こんな厭やな戰爭なんかゞあるんでせう？」と今度はワシーリイ公爵に言つた。そして其返辭を待たないで、ワシーリイ公爵令孃の美しいエレンの方へ振り向いた。

「Quelle délicieuse personne que cette petite Princesse!」（この可愛い公爵夫人は何と云ふ愉快な人でせう）とワシーリイ公爵はアンナ・パアウロウナに囁いた。

若公爵夫人が來てから間もなく、大きな强さうな青年が這入つて來た。髮を短く刈つて、眼鏡をかけて、當時流行の薄色のズボンに、大振りな縁飾のある肉桂色の上衣を着てゐた。この强さうな青年は、カザリン時代の有名な貴族で、今はモスクワで瀕死の床にあるベズウホフ伯爵の庶子であつた。彼は外國で教育を受けてゐて、歸朝した許りな

ので、まだ何所へも奉職してはゐなかつた。それで、交際社會へ顔を出すのは之れが初めてゞあつた。

アンナ・パアウロウナは點頭いて彼を迎へた。夫れは彼女の客間の内の階級から言つて、一番つまらない人にする會釋なのである。こんな風に會釋をしたにも拘らず、ピエールが近づくと、アンナ・パアウロウナの顔には、法外に大きい、突評子もないものを見た時に現はれるやうな、不安な仰天したやうな色が現はれた。いかにもピエールは、この室にゐる人の誰れよりも多少大きかつたが、彼女の仰天したのは單に彼の目付きが客間ぢうの何の人よりも際立つて賢げで、恥しさうではあるが、注意深く、素直であつたからなのかも知れない。

「御親切にねえ、ピエールさん、よくこそ哀れな病人をお訪ね下さいました。」とアンナ・パアウロウナは彼を伯母の方へと案内しながら、彼女と不安らしく目を見交して言つた。

ピエールは何やら譯の分らないことを私語いて、探るやうな目で室内を見廻してゐた。彼は心地よげに、嬉しさうに微笑して、親友でゞもあるかのやうに若公爵夫人にお辭儀をした。そして、伯母の傍へ行つた。

アンナ・パアウロウナが心配してゐた通りであつた。ピエールは、皇后陛下の健康に關する伯母さんの話の了るのを待たないで其傍を離れた。アンナ・パアウロウナは仰天して、かう言つて彼を引き留めやうとした、——

「あなたはモリオ長老を御存じですか？」と彼女は尋ねた、「大變面白い方なんですよ。……」

「えゝ、あの人の永久平和策と云ふものを人から聞いたことがあります、至極面白いものですが、實行は出來さうもありませんね。……」

「さうお思ひですか？」とアンナ・パアウロウナはお義理にかう言つて、夫れから又元の女主人としての役目に就からとした。ところがピエールは前とは反對の不作法を演じた。彼は自分に話しかけてゐる婦人の話をば聞かうともしない

で、其傍を去つた許りなのに、今度は自分の傍を離れ度がつてゐる婦人を引き留めて、話しかけたのである。頭を屈めて、兩足を廣く踏ん張つて彼は、自分が長老の平和策を空想であると考へる所以を說明し始めた。

「そのお話は後程致しませう。」とアンナ・パアウロウナは微笑しながら言つた。

この不躾な青年の傍を脱れて、彼女は自分の役目に身を委ねた。そして、談話が弛み出した所があつたら何所へでも直ぐに助勢に出やうとして、聞耳を立てゝ見張つてゐた。恰度紡績所の職工長が、職工達を銘々の位置に就かせて、工場を彼方此方と歩きながら、紡錘が止るとか、キイ〳〵と異常な音を立てるとか、餘り早やく廻り過ぎるとかするのを見れば、急いでやつて行つて、夫れを止めたり、平調に返へしたりするやうな具合にアンナ・パアウロウナは客間を歩き廻りながら、默り込んだり、あまり夢中になつて話し合つたりしてゐる組があると、其所へ行つて、ホンノ一言口を入れるか、一寸話の向きを變へるかして、談話機關の運轉を普通の、禮儀正しいものにするのであつた。

けれど、かうした事に掛り切つてゐる間も彼女が始終、特にピエールを氣にしてゐるのは他目にも明らかであつた。ピエールがモントマアルを中にした一組のところへ行つて、その話を聞いて、夫れから長老が話をしてゐる、も一つの組の方へ行くまでの間彼女は氣遣はしげに彼れを見守つてゐた。

ピエールは外國で教育を受けてゐたので、ロシアの交際社會へ顔を出すのは、アンナ・パアウロウナの、この夜會が初めてゞあつた。彼は、ペテルブルグの學問ある人々は、みんな此所に集つてゐると云ふことを知つてゐた。で、彼の目は、玩具屋へ這入つた子供のやうに、ウロ〳〵と彼方此方を眺め廻してゐた。聞かうとさへすれば聞かれる氣のきいた談話を聞き漏らしはしないか、と絶えず注意してゐた。此所に集つてゐる人々の、自信のある上品な顔容を眺めてゐると始終、何か特に氣のきいたことがありさうに思はれた。とう〳〵彼は長老モリオの傍へ行つた。其所の

談話が面白うさうだつたので、ヂツと立つて、若い人達が誰れでも好んでするやうに、自分自身の考へを述べる機會のくるのを待つてゐた。

三

アンナ・パアウロウナの夜會は酣であつた。彼方でも此方でも、紡錘は絶え間なく滑かにブン〳〵廻つてゐた。私の伯母——彼女の傍には、この華々しい會合には寧ろ不釣合ひに見える、痩せた、窶れた顏の老婦人が、たつた一人坐つてゐるだけであつた——を別にして、來客は三組に別れた。男の多い、その一組では長老が中心になつて居り、第二の組では、ヲシーリイ公爵令嬢の美しいエレンと、年の割に太り過ぎてゐる、可愛らしい薔薇色の顏をしたバルコンスキイ若公爵夫人との周圍に、若い人々が集つてゐた。第三の組には、モルトマアル子爵とアンナ・パアウロウナとがゐた。

子爵は目鼻立ちの優しい、動作の上品な、美しい青年紳士であつた。打ち見たところ彼は自分自身を名士であると思つてゐるらしかつたが、育ちの宜い人であるから、溫順しく、自分の交つてゐる連中の利用するのに委せてゐた。アンナ・パアウロウナは、明らかに彼を客へ奏する第一の御馳走にしてゐた。丁度賢い料理頭が、汚い臺所にあるのを見ると喰べる氣にもならないやうな牛肉の一片を、何か素敵に美味なものにして客の前へ出すやうに、アンナ・パアウロウナは、其晩先づ子爵を、夫れから長老を、素敵な珍味にして客人達に進めた。モルトマアルの組では、偖ち、ダ

ンヂヤン公の虐殺事件が話題となつた。ダンヂヤン公が殺されたのは、彼が寛大であつたからであり、又ボナパルトが彼に對して峻酷であつたのには、特種な理由がある、と子爵は言つた。

「Ah! voyons. Contez nous cela, vicomte.」(あゝ、もし、夫れを話して下さいました子爵)とアンナ・パアウロウナは有頂天になつて言つた。この話句——Contez nous cela, vicomte.——には何となくルイ十五世式の響きがあるやうに思つたからである。

子爵は、御意に應じますとも、と云ふ微に慇懃に頭を下げて微笑した。アンナ・パアウロウナは子爵の周圍に一つの組を作つた上に、その話を聞きにくるやうにと皆を招いた。

「子爵は公とお昵近だつたのですよ、」とアンナ・パウロウナは、客の一人にフランス語で囁いて、「子爵は大變お話上手で被居るの、」と、も一人の人に言ひ、「上流社會の交際になれて被居る方は直ぐに分りますわね、」と第三の人に聲をあげて言つた。かうして子爵は、綠色のオランダ芹で、あしらはれた熱い皿の上の炙肉のやうに、後光をつけられて、みんなの前へ持ち出されたのであつた。

子爵は自分の話を始めやうとして、微かな微笑を浮べた。

「此所へ被居いな、エレーヌさん、」とアンナ・パアウロウナは、他の組の中心になつて少し離れた所に坐つてゐた、若い美人に向つて言つた。(註、エレーヌはエレンをフランス風に呼んだのである)公爵令嬢エレンは微笑した。彼女は初め此室へ這入つて來た時浮べてゐたのと同じやうな、言分のない美人に相應しい微笑を顏に浮べて立ちあがつた。當春藤や苔の飾りのある彼女の舞踏服はサラ〳〵と輕い音を立てた。白い兩肩と艶々した髮と、キラ〳〵と光るダイアモンドとを見せて彼女は男達の間を通つた。男達は脇へ身をよけて彼女の通る道をあけた。誰れを眞向に見ると云ふ

のではないが、誰れにでも微笑しながら、その美しい姿を、肉付きの宜い肩や、當時の流行で甚く露出しになつてゐる胸や脊やを、讃美する權利を愛嬌よく、みんなに與へてやるかのやうに彼女はアンナ・パアウロウナの傍へ歩んで行つた。さながら舞踏室の光彩を體現してゐるものゝやうであつた。

彼女には人に媚びるやうなところは露ほどもなかつた。それどころか、實際自分の、申し分のない、誰れよりも秀れた處女らしい美しさを恥しく思つてゐた位ゐである。そんなに彼女は美しかつた。彼女は自分の愛らしさの效驗を軟げやうとは思ひながらも、さうする力がないやうであつた。「Quelle belle personne!」(何と云ふ美しい女だらう!)

彼女を見れば、誰れでもかう言つた。

子爵は、彼女が自分の前へ坐つて、例の何時でもおじやうに浮べてゐる眩いやうな微笑を向けると、何か全く異常なものに氣壓されでもしたやうに肩を縮めて、目を俯せた。

「奥さん、此樣な聽手の前ではお話が出來さうもありません。」子爵は微笑して頭をさげながら言つた。

公爵令孃は、ムツクリとした露出しの腕をテーブルの上にのせたが、是非とも何か言ふべきものだ、とも思はなかつた。彼女はニコ〳〵しながら待つてゐた。子爵が話をしてゐるうち、彼女は眞直ぐに坐つて、折々テーブルの上に壓しつけられて形の變つた、美しいムツクリとした自分の腕を眺めたり、夫れよりも、もつと可愛らしい胸を眺めて、ダイアモンドの頸飾りの位置を直したりしてゐた。彼女は幾度も上衣の襞をとゝのへた。話が聽衆を感動させるやうなとこへくると、彼女はアンナ・パアウロウナを見て、直ぐさま其顏に現れてゐるのと同じ表情をしたが、軈てまた例の靜かな、花やかな笑顏に戻るのであつた。

小さいバルコンスキイ公爵夫人もエレンに續いて茶のテーブルを去つた。

「一寸待つてゝ下さいよ、私編物を持つていくわ。」と彼女は言つて、「ねえ、何を考へて被居るの?」とイツポーリイト公爵の方へ振り向いて言ひ添へた。「私の網袋を持つてきて下さいな。」

若い公爵夫人は、ニコ〳〵として誰れにでも言葉をかけながら、手早やく引移つて了つて、樂しげに下袴の襞を伸ばして席についた。

「さあ、樂々しましたわ。」と彼女は言つた。そして子爵に話を始めるやうに頼んで置いて、また自分の仕事に取り掛つた。イツポーリイト公爵は彼女の袋を持つてきて、夫れから椅子を彼女の傍へ据ゑて坐つた。

みんな、愉快なイツポーリイトが、妹の美人エレンに酷似してゐるのに驚かされたが、夫れよりも、其樣に似てゐながら、非常に醜いのには更らに驚かされた。彼の目鼻立ちは妹のと同じやうであつたが、妹の方は、晴々として樂しげな、煩ひのない、若い生の不斷の微笑と、古風な姿の美しさとで何も彼もが輝いてゐた。夫れに引きかへて兄の顏は、暗愚な色に曇らされ、常に挑みかゝるやうな氣六ケ敷い容子をしてゐた。それでゐて體のつくりは細くて弱々しかつた。彼の目、彼の鼻、彼の口——總てのものが實際一つ所に縮み込んで、顰面をしてゐるし、夫れから手や足は何時でも不自然な姿勢をとつてゐた。

「妖怪談ぢやありませんね?」彼は公爵夫人の傍へ坐ると、此道具がなくては話が始められないとでも言ふやうに急いで眼鏡を掛けながら言つた。

「何、いゝえ、君」子爵は吃驚して、肩を縮めて言つた。

「私は妖怪談は嫌ひですからね。」とイツポーリイト公爵は言つた。その調子で見ると、彼は自分の言葉の意味には氣がつかずに物を言つてゐたことが明らかであつた。

その言ひ振りが平然としてゐるので、彼の言つたことは非常に氣が利いてゐるのか、夫れとも非常に馬鹿々々しいのか、何方とも分らなかつた。彼は暗綠色のフロックコートに、彼の所謂 Cuisse de nymphe effrayé（慴えた女神の腿）色のズボンを着け、靴下に上靴をはいてゐた。

子爵は其時分世間に流布されてゐた逸話を大變面白く話した。ダンジアン公が女優ジョルズ孃に會ふ爲めにお忍びで巴里へやつて行つたとか、其所で彼は、之れも矢張この有名な女優と關係してゐたボナパルトに出會したとか、公に出會するとナポーレオンは持病の癲癇を起したので、全く公の手中に落ちて了つた、けれど公は夫れに乘ずることはしなかつた、然るにボナパルトは結局公の此寛大に報ゆるに公の死を以てした、とか言ふやうな。

この話は大變面白い、興味のあるものであつたが、取り別け戀敵同士がお互ひに夫れと悟つたところが然うであつた。婦人連は夫れには非常に興奮させられたやうであつた。

「面白いことね！」アンナ・パアウロウナは、問ひかけるやうに若公爵夫人を眺めながら言つた。

「面白うございますわねえ！」若公爵夫人は、話が餘り面白いので、もう仕事をしてはゐられない、と云ふやうに編物に針を挿しながら言つた。

子爵は、この無言の敬意を呑みこんで、感謝するやうに微笑しながら、再び話を續けた。けれど、矢張り怖い青年を見張つてゐたアンナ・パアウロウナは、彼が餘り辟高に、餘り熱注して長老と話をしてゐるのに氣がついた。すると急いで危險な場所へやつて行つた。

實際ピエールは、とう〳〵長老をつかまへて、權力の平衡に關する政治上の談話を取 交してゐた。長老は青年の無邪氣な熱心に興味を覺えたと見えて、彼の持論を披瀝してゐた。二人とも非常に熱心に、卒直に話したり聞いたり

してゐたが、夫れがアンナ・パアウロウナには氣に入らなかつた。

「何う云ふ手段で、と有仰るか？——歐羅巴に於ける權力の平衡と國際法ですね、」と長老は言つた。「夫れには野蠻だと言ふ評判のあるロシヤのやうな一强國が私心なく、歐羅巴に於ける權力の平衡を期する同盟の主位に就きさへすれば宜しいのです——それで其國は世界を救ふに相違ありません！」

「さう言ふ權力の平衡を、あなたは何うして實現させるのですか？」とピエールが言ひかけてゐた。恰度其時アンナ・パアウロウナが來て、嶮しい目でピエールを眺めながら、イタリア人の長老に、ペテルブルグの氣候を、何うして凌いでゐるか、と尋ねた。イタリア人の顏は忽ち變つて、厭味つぽい、蕪とらしい柔和な顏付きになつた。夫れは女と話をする時には何時でもする表情らしかつた。

「私は、お招きに預る交際社會の方々——殊に御婦人の——機智と教養とに、すつかり魅せられて了ひましてね、まだ氣候のことを考へる餘裕がありませんでした。」と彼は言つた。

アンナ・パアウロウナは、長老とピエールとを逃さないやうに見張りをするのに、ズッと都合が宜くて、

を、もつと大きな組に入れた。

丁度その時新しい客が客間へ這入つてきた。それは小さい公爵夫人の良人、若公爵アンドレ！

つた。バルコンスキイ公爵は目鼻立ちの鮮やかな、キリッとした、中肉の秀麗な青年であつた。

情と云ひ、ゆつくりとした重々しい歩調と云ひ、その樣子は何から何まで、活々とした小

對照をなしてゐた。勿論この客間にゐる人はみんな彼には知り合ひである許りでなく、

るのさへ退屈な位ゐ疎んじ切つてゐる連中であるらしかつた。總ての退屈な顏の中でも、

脈々してゐるやうであつた。秀麗な顔を歪むやうに顰めて、彼は彼女に眷を向けた。彼は、ア
に接吻して、夫れから半眠で一座を見廻した。

「愈々御出征ですか、公爵？」とアンナ・パアウロウナは言つた。

「クツウゾフ將軍が私を副官にし度いと有仰つて下さいました。」と彼はフランス語で言つて、フラ
ツウゾフの終りの緩音に調子をつけた。

「Et Lise, votre femme ?」（で、リイズは、奥さんは？）

「彼女は田舍へ行く筈です。」

「あの可愛らしい奥さんを私共から取りあげるのは罪ぢやありませんか？」

「アンドレー、」と小さい公爵夫人は、他人に言ふ時と同じやうな媚びた調子で、良人に向つて言つた、「只今子爵が
ヨルズ嬢とボナパルトのことに就いてこんなお話しをして下さいましたの！」

パルコンスキイ公爵は顔を顰めて脇を向いた。彼が這入つてくるとから嬉しさうな、親しげな目をして眺めてゐた
ピエールは彼の傍へ行つて、その手をとつた。アンドレー公爵は見向きもしないで、誰れに觸られるのも煩さいと言
ふやうに顔を顰めたが、ピエールのニコ〳〵した顔を見ると、意外にも愉快さうな樂しげな、微笑をかへした。

「おや、君が……矢張りこんな交際社會へ這入つたんだね。」と彼はピエールに言つた。

「僕は、あなたがきつと來てゐると思つてたんです。」とピエールは答へて、「御一緒にいつて晩飯を食べますよ、」とま
だ話をしてゐる子爵の邪魔をしないやうに低い聲で言ひ添へた、「宜いですか？」

「いや、駄目だ、」アンドレーは笑ひながら言つて、ピエールの手を握り締めて、此樣なことを尋ねる必要は少しもな

い、と言ふことを了解させやうとした。彼は何かもつと言はうとしたが、丁度其時ワシーリイ公爵と令嬢とが立ちあ
がつたので、二人は脇へのいて道をあけた。

「御免下さい、子爵、」とワシーリイ公爵はフランス語で言つて、子爵が席を立たうとするのを、靜に袖をひいて坐ら
せて、「大使館の生憎な祝宴のお蔭で折角の愉快を臺なしにしますが、お邪魔して退席致します。——この面白い夜會
をおいとまするのは非常に殘念です。」とアンナ・パアウロウナに向つて言つた。

令嬢のエレンは輕らかに着物の褶をかゝげて、椅子の間を通つた。彼女の顔の微笑みは何時もよりも晴れやかに輝
いてゐた。この美しい人が傍を通るとき、ピエールは恍惚とした、殆んど吃驚したやうな目を注いだ。

「素敵に佳い！」とアンドレー公爵は言つた。

「素敵に、」とピエールも言つた。

二人の傍へくるとワシーリイ公爵は、ピエールの手をとつて、アンナ・パアウロウナの方へ振り向いた。

「私の爲めに此熊を馴らして下さい、」と彼は言つた。「この男は、もう一ケ月も私の家にゐるのですが、交際社會へ顔
を出したのを見るのは之れが初めてです。何が必要だと言つて、若い男には賢い婦人方と交際する位ゐ必要なことは
ありませんよ。」

四

アンナ・パアウロウナはニツコリとして、ピエールの世話をしてやることを受合つた。彼女は、ピエールがワシーリイ公爵とは父方の緣續きになつてゐるのを知つてゐた。

その時迄「マダム伯母」の傍に坐つてゐた老婦人は急いで立ちあがつて、廊下でワシーリイ公爵に追ひ付いた。今迄面白さうにしてゐた樣子はスツカリ消え失せた。優しさうな、窶れた顏には不安と恐怖とが現はれてゐる許りであつた。

「パリースのことは何うなんでございませうね、公爵？」と彼女は彼の後を追ひながら言つた（彼女はパリースと言ふ名を初めの綴字に音調（アクセント）をつけて發音した）「私は、もう此上ペテルブルグに滯留しては居られません。あの可哀さうな子にあつて何と言つたら宜しいでせう？」

ワシーリイ公爵は不承々々に、殆ど無禮な樣子をして、老婦人の言ふことを聞きながら、煩くて耐らないやうな振りをさへ見せたけれど、彼女は取り入るやうに、訴へるやうに笑ひかけた、そして行つて了はれないやうに彼の手をつかまへた。

「陛下に一言申上げる位ゐなことは、あなたにとつては何でもありませんわね、したら、彼れは直ぐに近衛に廻はされるでせう。」

「大丈夫、私に出來るだけのことはしますとも、公爵夫人（プリンセス）、」とワシーリイ公爵は答へた。「ですがね、陛下にお願ひするのは、私には容易ぢやありませんね、ガリーツイン公爵を通してルミヤーンツオフに頼んでは何うです、夫れが一番かしこい遣方ですよ。」

老婦人はドルベツカーヤ公爵夫人と言つて、ロシアに於ける最もよい家柄の一人であつたが、貧しかつたので、久しく交際社會を遠ざかつてゐて、昔の緣故を失つて了つた。彼女は今、自分の一人息子を近衛に入れて貰はうと思つ

てペテルブルグへやつて來てゐるのであつた。彼女はワシーリイ公爵に會ひ度ひ許りに、吾れからアンナ・パアウロウナの夜會へ押しかけてきたのである、たゞ其爲めに子爵の話を聞いてゐたのであつた。彼女はワシーリイ公爵の言葉をきいて、ギクリとした。昔では美しかつた、その顏には激昂の色が現はれたけれど直ぐに消えた。彼女はも一度微笑して、前よりも緊（しつか）とワシーリイ公爵の手を握つた。

「ねえ、公爵、」と彼女は言つた、「私は之れまで何一つ、あなたにお願ひしたことはありません、之れきりで、もう二度と決して何にもお願ひを致しません、夫れから私は、父があなたとお心安くしてゐたからなどゝ申したこともありません。ですが此度ばかりは、悴の爲めに是非之れだけはしてやつて下さいまし、何んなことがあつても御恩は忘れません。」急き込んで、かう言ひ足して、「否え、腹を立てないで、お約束して下さい、私、ガリーツインに頼みましたけれど、斷はられました。Voyez le bon enfent que vous avez été」（昔のやうな、いゝお子さんになつて下さい）と彼女は言つて、目には涙を湛へながらも强ひて微笑しやうとした。

「父さま、後くれるわ。」扉口（とぐち）で待つてゐたエレンは、彫像のやうな肩の上で、愛らしい顏を振り向けながら言つた。

ところで、社會上の勢力と云ふものは一種の資本である、夫れを消滅させ度くないならば、注意して保護しなくてはならない。ワシーリイ公爵は此事を心得てゐた、そして、人から乞はれるが儘に、一々頼んで居たら、直きに自分自身の爲めの頼みが利（きか）なくなる、と云ふことを一度考へてからは、彼は減多に自分の勢力を用ゐなかつた。けれどドルベツカーヤ公爵夫人の場合には、彼女の哀願をきくと、良心の刺戟と云つたやうなものを感じた。彼は、自分の出世の第一歩は彼女の父のお蔭であると云ふことを憶ひ起させられた。のみならず、其樣子から見ると、彼女は、一度かうと思ひ込めば、願望が成就するまでは後へひかないで、泣く笑ふの屬ぎをやつてまでも間斷（しきり）なしに拗（しつこ）く纏はりつ

いてくる類の女——殊に母親——の一人であるらしい。この考へが彼の心をぐらつかせた。

「ねえ、アンナ・ミハイロウナ、」彼は何時もの、心安さうでありながら、煩るさゝうな聲で言つた、「あなたのお望みを叶へることは私には殆んど不可能です、ですがあなたに對する愛情と、あなたの親しいお父さんの靈に對する敬意とをお目にかける爲めに、その不可能なことをやりませう——御令息を近衛に入れてやりませう、確かに受合ひました、之れで宜しいですか？」

「ほんとに、公爵、あなたは私共の恩人でございます。きつと、あなたは之れだけのことはして下さると思つてました、あなたが何んなに宜い方か存じてゐますもの——」公爵は立ち去らうとした。「ちよつと待つて下さい、もう一言。近衛へ這入れましたら……」彼女は言ひ淀んだ。「ミハイル・イラリオーノキッチ・クツウゾフと御懇意で被居いますわね、パリースを、あの方の副官に推薦して下さいましよ、さうなれば私すつかり安心致します、さうなれば、ねえ……」

ワシーリイ公爵は微笑した。「それはお約束は出來ませんな、あなたは、クツウゾフが總司令官に任命されてからと云ふもの、何んなに攻圍されてゐるか御存じありませんね。モスクワぢうの夫人が申し合はせて、自分の子供をみんな俺れの副官にしやうとする、つてあの男が自分で言つてましたよ。」

「否え、約束して下さい、私放しませんよ、親切な、よいお友達、恩人……」

「父さま、」美しいエレンは前と同じ調子でまた言つた、「後くれるわ。」

「では、そのうちまた、さよなら、ねえ？」

「では、明日陛下に申しあげて下さいますわね？」

Lui mi la dona, guai a chi la tocca

「確に、ですがクツウゾフのことはお約束出來ませんよ。」

「いゝえ、約束して下さい、約束して下さい、パシイル、」アンナ・ミハイロウナは、艶つぽい小娘のやうな微笑を浮べて言ひ張つた。それは骨つては彼女の特色であつたかも知れないが、今の寵れ果てた顏には全然釣合はないものであつた。彼女は自分の年齢を忘れて了つてゐて、以前の色々な女らしい手管が自然に出てくるのらしかつた。けれど彼が行つて了ふと直ぐに、再び以前のやうな上べばかりの平靜な滿足らしい容をした。彼女は子爵がまだ話をしてゐる集團のところへ歸つてきた。そして、もう目的が達せられたので、暇乞ひをするに宜い潮時を待ちながら、矢張り聞き入つてゐるやうな振りをしてゐた。

「で、あなたは、ミランに於ける戴冠式の、此最近の喜劇を何うお思ひですか？」とアンナ・パアウロウナは尋ねた、「新しい喜劇と云ふのは、かうなんです、ヂェノアとルッカの人々がボナパルトさんのところへ請願を呈する。ボナパルトさんは玉座に坐つてゐて、國民の請願を允許する、と云ふのです。恭しいことですね！　いゝえ、氣が變になる位ゐですね、世界ぢうが氣違ひになつて了つたやうですね。」

アンドレー公爵は彼女の顏を見詰めて、冷やかに微笑した。

「神がこの王冠を予に與へた、これに觸れぬやう注意せよ、」と彼は言つた、（之れは戴冠式の時のボナパルトの言葉であつた、Dieu me la donne, gare à qui la touche.）「かう言つた時の彼は實に立派であつたと言ふことです、」さう言ひ添へてから、も一度同じ言葉をイタリア語で繰り返した、——Dio mi la dona, guai a chi la tocca.（神ガ余ニ與ヘタリ、之ニ觸ルモノハ災ナル哉）

「これぢや、」とアンナ・パアウロウナは追ひかけて言つた、「どうせ、ぶち壞してせうよ、こんな亂暴な男には、もう帝王たちが我慢が出來る筈がありません。」

「帝王たちがですか？――ロシアは別ですよ、」と子爵は丁寧に、けれど絶望した調子で言つた、――「帝王たちがですか、奥さん？　彼等は、ルイ十六世の爲めに、皇后の爲めに、エリザベット夫人の爲めに、何をしたでせう？　何にもしません！」彼はだん〳〵勢づいて言ひ足した。「で、御覽なさい、彼等はブウルボン家に裏切つた罰を今受けてゐるのです。帝王たちがですか？　彼等は、この簒奪者に祝辭を述べる爲めに使節を送つてゐます！」

かう言つて、彼は嘲けるやうな吐息をもらして、また姿勢を變へた。

長いこと眼鏡越しに子爵を見詰めてゐたイツポーリイト公爵は之等の言葉をきくと、俄にクルリと向き返つて、小さい公爵夫人を上から覗き込むやうにして、針を貸してくれと言つた。そして、その針でテーブルの上にコンデエ家の紋を書いて、彼女に見せはじめた。夫人から頼まれでもしたかのやうな澄し切つた顏容をして、彼はその紋の說明をした。

「Bâton de gueules, engrêlé de gueules d'azur――maison condé.」（空色がゝつた赤で緣をとつた、赤い節杖……コンデエ家）と彼は言つた。公爵夫人は微笑しながら聞いてゐた。

「もしボナパルトがもう一年フランスの王位にゐたら、」と子爵はまた言ひだした。他の誰れよりも此問題には明るいので、他人の言ふことには耳も貸さずに、自分の考への續きを追うていく人のやうな風であつた。「全く取り返しのつかない始末となつて了ひませう。奸計と横暴とによつて、追放と死刑とによつて、フランスの社會は――勿論上流社會のことです――永遠に破壞されて了ふでせう、すると……」

彼は肩を縮めて、絶望したやうな手眞似をした。ビエールは何か言はうとした――彼はこの話に興味を覺えたので――が、彼を見張つてゐたアンナ・パアウロウナが口をいれた。

「アレクサンダア皇帝陛下は、」皇帝のことゝ言へば何によらず着いてまわる例の陰欝な調子で彼女は言つた、「フランス國民が何う云ふ政體を選ばうと、夫れは彼等の勝手である、と明言なさいました、夫れから一度簒奪者の手から自由になれば、國民はこぞつて正當な國王の御手に投ずることは受合ひであると私は想ひます。」と彼女は、この亡命の勤王家に調子を合はせやうとして言つた。

「覺束ないですね、」アンドレー公爵は言つた。「もう取り返しのつかない始末になつてゐる、と子爵が考へられるのは全く御尤もです、舊制度に返へすのは容易なことではないでせう。」

「僕の聞くところでは、」ピエールは顏を赤くして、また、口を入れた、「貴族の殆んど全部がボナパルトに內通してゐると言ふことです。」

「それはボナパルト派の言つてゐるところです、」と子爵はピエールの方を見ないで言つた、「今日では、フランスの實際の輿論を突きとめるのは困難なことです。」

「ボナパルトがさう言ひましたね。」アンドレー公爵は冷笑を浮べて言つた。彼が、子爵を好いてゐないこと、子爵の方を見てはゐないが子爵に向つて言つてゐるのだと言ふこと、は明らかであつた。

「予は彼等に榮譽の道を示めした、彼等はその道をとらうとはしなかつた。」彼は少時默つてゐたあとで、再びナポレオンの言葉をひいて言つた、「予は彼等に對して予の前室を開いた、彼等は群をなして這入つてきた……私は、彼がさう言ひ得る權利を何の程度まで持つてゐるか知りませんがね。」

「少しも持つてゐない！」子爵は鋭く言ひ返へした。「公の虐殺以來彼の熱心な味方でさへ彼を英雄とは仰がなくなりました。もつとも、或る人々は彼を持て囃したかも知れませんが、」とアンナ・パアウロウナの方へ振り向いて言ひ續け

た、「公の虐殺以來天上では一人の殉難者が增え、地上では一人の英雄が減りました。」

アンナ・パアウロウナや其他の人達が、その言葉に感心したやうな微笑を子爵に報いるか、報いないうちに、ピエールがまた口を入れた。アンナ・パアウロウナは、彼が何か不禮なことを言ひさうな氣がしたけれど、止めることは出來なかつた。

「ダンジヤン公の死刑は、」とピエールは言つた、「政治上已むを得ざることでした、で、僕はナポーレオンが躊躇することなく其全責任を脊負つたのは、彼の大量の證據であると考へます。」

「まあ！　まあ飛んでもない！」アンナ・パアウロウナは仰天して嘶くやうに唸つた。

「何ですつて、ピエールさん！　暗殺をやるのが大量なのですか？」小さい公爵夫人はニコ〳〵と笑つて、編物を手許へよせながら言つた。

「あゝ！　おゝ！」といろ〳〵な聲が叫んだ。

「豪い！」イッポーリイト公爵は英語で言つて、膝を叩きだした。子爵は肩を縮めたゞけであつた。

ピエールは眼鏡越しに、得意らしく聽手を見渡した。

「と云ふのは、かう云ふ譯けです、」ピエールは一生懸命になつて續けた。「ブウルボン家の人々は革命を恐れて、國民を亂世の餌食として置いて逃げて了つた。然るにナポーレオンだけは唯一人革命の意義を理解して、夫れを取り鎭めることが出來たのです。だから一般の幸福の爲めには一人の生命の前に躊躇するとは出來なかつたのです。」

「あなた、こちらのテーブルへいらつしやいませんか？」とアンナ・パアウロウナは言つた。けれどピエールは夫れには答へずに語をつゞけた。

「さうです、」彼は益々熱心になつて言つた、「ナポーレオンは偉大です、何故と云ふに彼は革命に超越して、その種々な惡傾向を根絶して、市民の同權や、言論、出版の自由など、善いところだけは悉く保存しました。そして偏へに其爲めにのみ彼は最高の權力を掌握したのです。」

「さやう、若し權力を得たときに、それを虐殺をする爲めに用ゐないで、正當の王に引き渡したのなら、」と子爵は言つた、「夫れなら私は彼を偉人と呼んだでせうよ。」

「彼はさうすることが出來なかつたのです。人民はブウルボン家から放たれ度いばつかりに、彼に權力を與へたのですものね、で、夫れは正しく人民が彼を偉人であると信じてゐるからです。革命は偉大なる事實でした。」とピエールは言ひ續けた。彼はこの必死な、そして見當違いな喧嘩腰な論述によつて、自分の非常に若いことゝ、何でも有りつけ言ひ度がることゝを、我れ知らず露したのであつた。

「革命や弑逆が偉大なる事實ですつて？……それから？……ですが此方のテーブルへいらつしやいませんか？」とアンナ・パアウロウナは重ねて言つた。

「民約」と子爵は、しとやかな微笑を浮べて言つた。

「僕は弑逆のことを言つてるんぢやありません、思想に就て言つてゐるのです。」

「掠奪、虐殺、及び弑逆の思想！」と、横合ひから皮肉な聲がかゝつた。

「それ等は、勿論、極端な場合です、革命の全意義はそのうちにあるのではありません、人間の權利、偏見からの解放、市民權の平等などにあるのです。それで、ナポーレオンは此れ等のものを悉く完全無缺に保持しました。」

「自由と平等とは、」子爵は、とう〳〵此青年にその斷定の馬鹿々々しさ加減を說明してやらうと決心したかのやうに、

蔑すむやうに言つた。「みんな誓きばかりは高いが、ずつと前から下落してゐる言葉ですよ。自由と平等とを愛さないものがあるもんですか。救世主御自身が自由と平等とを説かれた。一體革命後、人々は前よりか少しは幸福になりましたかね？　まるで反對ですよ。吾々は自由を欲した、然るにボナパルトは夫れを壓し潰して了ひました。」

アンドレー公爵はニコ〳〵として先づピエールを見、夫れから子爵を、夫れから女主人を見た。

初め一寸の間アンナ・パアウロウナは、交際馴れてゐるにも拘らず、ピエールの亂暴な調子に膽を冷した、が、子爵がピエールの冒瀆的な言葉に大して腹を立てゝゐないのを見、且つ夫れを制止することの出來ないのを悟ると元氣を恢複して、子爵の味方となつて、この若い辯士の攻撃に取りかゝつた。

「mais, mon cher Monsieur Pierre,（けれどもね、私の親愛なピエールさん）とアンナ・パアウロウナは言つた。「あなたはあの無辜の公爵を――と云ふよりは單に何んな人をでも――裁判しないで處刑することの出來る人間を偉人だなどゝ何うして言へるのです？」

「伺ひ度いものですね、」と子爵は言つた、「君は革命曆第二月の十八日を何う説明なさるか？　あれは騙打ちではありませんか？　あれはペテンです、偉人の遣口らしい所は少しもありません。」

「それからアフリカで彼に殺された俘虜は？」と小さい公爵夫人は言つて、「怖いことですわ！」と肩を縮めた。

「C'est un roturier, vous aurez beau dire.（あなたが何んと有仰つたつて、あれは平民さ。）」とイツポーリイト公爵は言つた。

ピエールは何れに答へて宜いのか分らなかつた。彼は、みんなを眺めて微笑した。彼の微笑は他の人達の、微笑しかけて止めたやうな微笑とは全く異つたものであつた。微笑すると同時に、眞面目呆つた、何方かと云へば多少氣六

ケ敷しい表情は俄に消え失せて、子供らしい、人の好さゝうな、幾らか愚かしくさへ見える、許しをでも乞ふやうな、まる切り別な顏付きとなつた。

初めて彼に會つた子爵は、この過激黨は決して口程に怖ろしい男でない、と云ふことを明瞭と見てとつた。

みんな默つてゐた。

「何うして、この男が、みなさんに一度に御返事が出來ませう？」とアンドレー公爵は言つた。「それに、政治家の行爲を見る場合には、私人としての其人の行爲と、將軍若しくは皇帝としての其人の行爲とを區別しなくてはならない、私にはさう思はれます。」

「さうです、さうです、勿論さうです。」ピエールは自分に味方をしてくれる援助の現はれた嬉れしさに口を入れた。

「誰れでも認めなくてはならんのは、」とアンドレー公爵は追ひかけるやうに言つた、「アルコラの橋上に於けるナポレオン、及びヤッフアの病院でペスト患者と握手した時のナポーレオンの偉大であると云ふことです、ですが――ですが其他に辨護することの出來ない行爲もあります。」

アンドレー公爵は、ピエールの苦しい立場を救つてやらうとしたのであつたらしいが、歸へるつもりで立ちあがると夫人に目くばせをした。

不意にイツポーリイト公爵が立ちあがつた。そして手を振つて皆を押しとゞめ、席につくやうにと、頼みながら、から言ひ出した、――

「Ah! mijourd'hui on m'a raconté une anecdote moscovite charmante; il faut que je vous en régale. Vous m'-

excuserez, vicomte, il faut que je raconte en Russe, Autrement, on ne sentera pas le sel de l'histoire.」（えゝ、今日私は、モスクワであつたと云ふ面白い話を聞きました。みなさんのお慰みに是非この話をし度いのです。御免下さい子爵、私はロシア語で話さなくてはなりません、それでないと此話の面白味がなくなりますから。」

かう言つてイツポーリイト公爵は、一ケ年間ロシアに逗留したフランス人の話すやうな拙いロシア語で話しだした。

みんな足を止めて耳を傾けた。イツポーリイト公爵は非常に熱心に、非常に手強く、その話に對して、みんなの注意をよんだのである。

「モスクワに一人の貴婦人、une dame（夫人）があります、そして其人は非常に吝嗇なんです。彼女は自分の馬車の後方へ二人の馬丁を置き度いと思ひました、而も春の非常に高いのを。それが彼女の道樂なのでした。夫れから彼女には一人の小間使がありました、それが矢張り春が高いのです。彼女は言ひました……」

かう話して來てイツポーリイト公爵は言葉を切つて、考へ込んだ。苦心して考へを纒めてゐるやうであつた。

『彼女は言ひました……さうです、彼女は言ひました、『お前』とその小間使ひに向つてゞすね、『訪問に出掛けるから、仕着をきて、馬車の後方へ立つてお呉れ。』

こゝでイツポーリイト公爵は、聽手よりも先きに甚く噴き出して、永いこと笑つてゐた。それは彼にとつては甚だ面白くない印象をつくりだした。それでも老婦人やアンナ・パアウロウナを初め、幾人かの人々は微笑した。

「彼女は出かけました。俄に疾風が吹いてきました。娘は帽子を落しました、すると彼女の長い髪が解けました……」

こゝまで來ると彼はもう堪へ切れなくなつた。そして甚く噴きだしながら、かう言つて、烈しく笑ひ出した。

「それで、世間の人がみんな知りました……」

そこで話は終つた。何の爲めに彼が此樣な話をしたのか、何の爲めに夫れをロシヤ語で話さなくてはならなかつたのか誰れにも解らなかつたが、それでもアンナ・パアウロナや其他三四の人々は、ピエールの不快な、不作法な激語を大變氣持よく片付けて了つたイツポーリイト公爵の世馴れた交際振りに感服した。この挿話の後で談話は割れて、この前や今度目の舞踏會のことや、芝居のことや、夫れから何所で何時誰れそれが會ふであらうとか云ふやうな、纏らない、こま〳〵した雜談になつて了つた。

五

この面白かつた夜會のお禮をアンナ・パアウロウナに言つて、客はおひ〳〵立ち去り始めた。

ピエールは大きな赤い手を持つた、不格好な、ガツシリした、途方もなく身長の高い男であつた。廊通り、彼は客間へ這入つて行く時の作法は勿論、出て來る時の作法をも知らなかつたのである。それに彼はボーッとしてゐた。彼は起ち上つて、自特に人を喜ばせるやうな事を云ふ作法を知らなかつたのである。言ひ換へれば、暇乞ひをする時に當つて、分の帽子を取る代りに、羽飾りの附いてゐる或る將軍の三角帽を取りあげて、それを手に持つたまゝ、將軍から返して呉れと云はれるまで、その羽を引張つてゐた。併し此樣にボウーとしてゐることも、客間へ這入つて行く時の作法を知らないことも、或はまた客間でうまく話の出來ないことも、それ等は凡て、彼の好人物な、率直な、遠慮勝な表

情に依つて償はれた。アンナ・パアウロウナは彼の方へ振り向いて、彼の失態を見遁さうとするやうな基督教徒的な優しさをもつて、彼に向つて頷きながらかう云つた。

「また何れお目にかゝりませう。でもやはりお説だけは變へて貰ひたいものですね、ピエールさん。」

ピエールはそれには答へずに、たゞ頭を下げて、みんなに、も一度笑顔を見せた。その笑顔は明かにかう言つてゐた。

「意見が有る無しに拘らず、僕といふ人間が如何に温順で善良だかと云ふことはお分りでせう。」で、アンナ・パアウロウナもその他の人々も、凡てこの事は本能的に感じてゐた。アンドレー公爵はもう廣間に出て、外套を着せやうとしてゐる從僕の方に肩を向けながら、やはり其所に立てゐたイツポーリイト公爵と自分の妻とのお喋りに、何と云ふこともなく耳を傾けてゐた。イツポーリイト公爵は、もうやがて母親にならうとしてゐる美しい公爵夫人の傍に立つて、眼鏡越しにしげ〳〵と彼女を凝視めてゐた。

「お這入り下さいな、アンネット、風邪を引きますわ。」と小さい公爵夫人は、アンナ・パアウロウナに暇を告げながら言つた。「あの事は承知しました。」と彼女は低い聲で言ひ添へた。

アンナ・パウロウナは何うにか斯うにかして、自分の計畫したアナトールと小さい公爵夫人の義妹との間の縁談に就いて、リザと二言三言話しを交へたのであつた。

「あなたを頼りにしてゐますよ。」とアンナ・パアウロウナもやはり低い調子で言つて、「あの娘に手紙をやつて、お父さんの心持を私に聞かせて下さいまし。では左樣なら！」そこでアンナ・パウロウナは大廣間から引込んで行つた。

イツポーリイト公爵は、小さい公爵夫人の傍へ來て、顏を近々と寄せながら、半ば囁くやうに何か話し出した。

公爵夫人の從僕と、イツポーリイト公爵自身の從僕の二人は、話の終るのを待ちながら、肩掛と外套とを持つて立

つてゐた。そして一向解らないフランス語の饒舌を、言つてる事は解るのだが、解るやうな振りはし度くないと云ふ樣な顏付きをして聞いてゐた。公爵夫人は例の如く、微笑しながら話しかけたり、笑ひながら聞いたりした。

「大使の夜會へ行かないで、非常に好いことをしました、あんなくだらない……。」とイツポーリイト公爵は言つてゐた。「全く愉快な晩でしたねえ、えゝ？　全く愉快な。」

「でも、大使の舞踏會は非常に立派なものだといふぢやありませんか。」と小さい公爵夫人は、和毛の生えてゐる小さい唇をぴく〳〵させながら答へた。「社交會の綺麗な御婦人方が、みんな被居るんですつてね。」

「いや、みんなぢやありません。何故なら、あなたが被居いませんもの、みんなぢやありません。」と、イツポーリイト公爵は、面白さうに笑ひながら言つた。そして從僕から肩掛を引奪くると同時に、從僕を脇へ押しのけて置いて、それを小さい公爵夫人に着せ始めた。不器用な爲めか、それとも故意なのか――それは誰にも分らなかつた――公爵は、さながらこの若い女を抱擁でもしてゐるかのやうに、肩掛を着せて仕舞つてからも、長いこと手を離さなかつた。

しとやかに、けれど、やはり微笑しながら、彼女は身を退いて、くるりと振り向いて夫を見た。アンドレー公爵は眼を閉ぢてゐた。彼はどうやら疲れて眠さうであつた。

「仕度は出來たかい？」と、彼はチラリと夫人を眺めながら尋ねた。

イツポーリイト公爵は、踵までとゞく樣な、最新流行の外套を慌しく引掛けて、それに顎きながら、公爵夫人の後を追ひかけて階下の方へ走り出した。夫人は從僕に助けられて馬車に乘る所であつた。

「公爵夫人、左樣なら。」と彼は叫んだが、舌は丁度脚のやうに縺れてゐた。

公爵夫人は着物をつまみ上げて、暗い馬車の中に席を取つた。夫はサアベルの位置を直してゐた。イツポーリイト

公爵は、手傳ひをするのだと言つて、みんなの邪魔をしてゐた。

「御免なさい、君。」と、アンドレー公爵は、通り道の邪魔をしてゐるイツポーリート公爵に向つて、ロシア語で素氣なく不愉快さうに言つた。

「待つてゐるよ、ピエール君。」と、同じ聲が、温かい、親しげな調子で叫んだ。

馭者が一鞭くれると、馬車は轟轟と軋つて行つた。イツポーリイト公爵は、階段の上に立つて、自分の家へ連れて行かうと約束をした子爵を待ち受けながら、短かい痙攣けるやうな笑ひを上げた。

「Eh bien, mon cher, votre petite princesse est très bien, très bien,（ねえ君、君の小さい公爵夫人は素的な別嬪ですね、素敵な別嬪ですね）」と、子爵はイツポーリイトと共に馬車の中に腰を下しながら言つた。「Mais très bien,（實際素敵な別嬪だ。）」彼は自分の指端に接吻した。「Et tout-à-fait française.（そして全然佛蘭西人ですね）」

イツポーリイトは烈しく鼻を鳴らして笑つた。

「それに君は、あゝ云ふ可愛らしい無邪氣な遣り方で行くから恐ろしいですね。」と子爵は續けた。「僕はあの野呂間な御亭主が可哀相でならない、王樣のやうに氣取つてゐる、あの小僧ッ子の將校がね。」

イツポリイトはまた噴きだした。そして笑ひながらかう言つた。

「でも、あなたはロシアの婦人は、何うしたつて、フランスの婦人とは異ふと言つてしまつたね、彼奴等を手に入れるには方法を知らなくちやね。」

眞先きに行き着いたピエールは、家族の一人みたいに、アンドレー公爵の書齋へ這入つて行つた。そして何時ものやうに直ぐ安樂椅子の上に長くなつて、書棚の中から手當りまかせに本を取し出し、（それはシイザアの記事であつた）肘突きをして、眞中頃から讀み出した。

「君はシェールレ嬢に對して何と言ふことをしたのだ？　今頃は大病になつてゐるだらう。」とアンドレー公爵は小さい白い手をこすりながら部屋へ這入つてくると、かう言つた。

ピエールは安樂椅子をきし〳〵いはせて、全身をひつくり返へして、アンドレー公爵の方へ熱心な顏を向け、微笑しながら手を振つた。

「いや、あの長老は非常に面白い奴でしたね、たゞ彼奴は間違つた解釋をしてゐるだけなんですよ……僕の考へでは、永遠の平和は有り得る、但し何うしたら夫れが得られるかと云ふ事は僕には分らない……決して權力の平衡によつてゞはありませんね……。」

アンドレー公爵は、かうした抽象的な議論には興味を持つてゐないやうであつた。

「時も處も關はずに自分の考へたことを、あけすけに言ふのは宜くないね、君。それはさうと、君は結局何かやることに決めたかね？　近衛騎兵か、それとも外交官か？」とアンドレー公爵は暫らく間を措いてから訊ねた。

ピエールは安樂椅子の上に、脚を組んで坐つてゐた。

「まつたくのところ、僕には未だ分らないんです。僕はどつちも嫌ひなんだ。」

「併し、何にか決めなくちや不可んね。君のお父さんは夫れを待つてるぢやないか。」

十歲の時、ピエールは附添の教師の或る僧侶と一緒に外國へ送られて、二十歲になるまで向うにゐた。モスクワへ歸つて來ると、父は附添教師を解雇して、この青年に向つてかう言つた。「さア、これからペテルブルグへ行つて世間を見て、身の振り方を附けるがいゝ。私は何にでも賛成する。さア此處にワシーリイ公爵へ宛てた手紙がある、そし

て此處に金がある。一切手紙で言つてよこしなさい、私は何事によらずお前を助けてやる。」ピエールはもう三ケ月間といふもの、出世の道を擇んでゐるのだけれど、まだ極まらないのであつた。今、アンドレー公爵が彼に言つたのはこの選擇の事なのだ。ピエールは額を撫でた。

「だが彼奴は共濟組合員に相違ない。」と彼は言つた。その夜會つた長老のことなのである。

「そんな事はみんな下らないことだ。」とアンドレー公爵は再びピエールを制して、「もつと眞面目な話をした方が宜いよ。君は近衞騎兵隊へ行つて來たかい？」

「いや、まだです。だが僕に或る考へが浮んだんです、で、それをあなたに話したかつたんだ。今度の戰爭はナポーレオンとの戰爭でせう。若し夫れが自由の爲めの戰爭だつたら、僕にも呑み込めるし、眞先きに軍務に就事したでせうよ。併し、イギリスやアウストリアを助ける爲めに、世界最大の偉人に敵對するなんて——夫れはよくないことです。」

アンドレー公爵は、ピエールの子供らしい言葉を聞いて、たゞ肩を縮めたゞけであつた。彼はこんな馬鹿〳〵しい事には返答が出來ないと云ふやうな容子をして見せた。けれど、かうした無邪氣な質問に對しては、實際アンドレー公爵がしたやうな返答より外に何う返答のしやうもなかつた。「若し誰れも彼れも、ひたすら自分自身の信念によつて戰ふのであつたら、戰爭と云ふものは無からうよ。」と彼は言つた。

「夫れなら、また非常に結構な事ですね。」とピエールは言つた。

アンドレー公爵は皮肉に微笑した。「それや大に結構だらうさ。だが、何うしたつて然うはなるまいよ。」

「ぢや、あなたは何の爲めに戰爭に出るんです？」とピエールは訊いた。

「何の爲めに？　知らないねえ、僕は。出なければならないからさ。それ許りでなく僕が出るのは……」と彼は言葉を切つて、「僕が出るのは、此處で送つてゐる生活が、僕の生活が、氣に入らないからだ。」

六

矢ぎの室で女の衣擦れの音がした。アンドレー公爵は、微睡でもしたやうに身をふるはせた。その顏はアンナ・パアウロウナの客間で見せたと同じ表情をした。ピエールは長椅子から脚を下ろした。公爵夫人が這入つてきた。彼女はもう着物を平常着と着更へてゐたが、矢張り同じやうに、さつぱりとして立派であつた。アンドレー公爵は起ち上つて、慇懃に安樂椅子を妻にすゝめた。

「何う云ふんでせう、私よく不思議な氣がしますの。」と夫人は急がしく、そゝくさと、安樂椅子に腰を掛けながら、例の如にフランス語で話しだした。「何故アンネットは結婚しないんでせう？　あの方と結婚しないなんて、ほんとに殿方はみんな馬鹿ですわ。どうぞ腹を立てないで下さい。でもあなた方はちつとも婦人と云ふものを了解してゐらつしやいませんのね、ピエールさん、あなたは何て議論好きな方なんでせう！」

「今もあなたの旦郡と議論をやつてゐるところです。僕には、この人が、どうして戰爭に出たがるのか、譯が分らないんです。」と、ピエールは公爵夫人に向つて言つた。若い男が若い女に對すると定りきつてやるやうな、モヂ〳〵した樣子は少しもなかつた。

公爵夫人はビクリとした。明かにピエールの言葉は、彼女の急所に觸れたやうであつた。

「えゝ、夫れを私も申すのですわ。」と彼女は言つた。「私には、何故殿方が戰爭なしには生きて行かれないのか、譯が解りません、ほんとに解りません。私共婦人がそんなものは何にも欲しくないのは何故でせう？　全く私達はそんなものを欲しがりませんの。さあ、あなた、裁判官になつて下さい。妾は何時も良人に對つて申すんです、此處では叔父樣の副官で、ほんとに立派な位置に被居るつて。みなさんに知られてゐて、尊敬を受けてゐるんですものね、何日かもアブラークシンの家で、ある婦人が、『では、あれが有名なアンドレー公爵なの？　まア！』と訊ねてゐるのを聞いたことがありますわ。」と夫人は笑つた。「良人は何處へ行つてもさう云ふ扱ひを受けるんですよ。副官長になるんなんか、譯けはありませんわ。御存じの通り、陛下から大變厚いお言葉を頂戴したこともございますの。アンネットともよく話すことですが、その選びをつけるのは何でもありません、あなたはどうお考へになつて？」

ピエールはアンドレー公爵を見た。そして此會話が友達の氣に入らないのを見てとつたので、何とも答へなかつた。

「あなたは何時出發するんです？」と彼は尋ねた。

「あゝ、どうぞ出發の事なんか言はないで下さい。言はないで下さい。私、そんな話は聞くのも厭なんです。」と、公爵夫人は、恰度夜會の席上で、イッポーリイトに物を言つた時のやうな氣まぐれな、ふざけた調子で言つた。それはピエールがその一人のやうになつてゐる、この家の關係には全く適合はない調子であつた。「今日もね、こんな樂しい關係をみんな斷つて了はなくつちやならないのだ思ふと……そうなつたら、ねえ、アンドレー？」と彼女は良人を見て意味有りげに瞬きして、「私怖しいわ！　怖しいわ！」と肩をびく〳〵させながら囁いた。

彼女の良人は彼女を見詰めたが、自分とピエールとの外に、も一人この部屋に人がゐたのに初めて氣が付いたかのやうに喫驚した顏容をした。そしてよそ〳〵しく叮嚀に、妻に向つて問ひかけた。

「何が、怖ろしいんだ、リイザ？　私には解らないね。」と彼は言つた。

「まア、男つてみんな何と云ふ自我主義者でせう。みんな、みんな何と云ふ自我主義者でせう！　自分一人の氣紛れから、何の爲めだか譯も分らないのに私を棄てゝ、たつた一人田舍に閉ぢ籠めて置かうとなさるんですもの。」

「忘れちや不可い、お父さんと妹と一緒だよ。」とアンドレー公爵は靜かに言つた。

「友達がなけれや、一人ぼつちと同じ事ですわ、……それだのに妾が怖がることなんかは、少しも察しては下さらない。」公爵夫人の調子は、もう愚痴つぽくなつた。上唇が釣り上がつて彼女の顏に、嬉しさうな色でない野獸のやうな――栗鼠のやうな表情を與へた。彼女はピエールのゐる前で、自分の體の事を云ふのは失禮だと思つたかのやうに言葉を切つた。その辯之れが彼女の怖がつてゐることの本當の要點なのであつた。

「何を怖がつてゐるのか、私にはやつぱり解らない。」とアンドレー公爵は、妻から眼を離さずに、ゆる〳〵と思案するやうに言つた。公爵夫人は眞紅になつて、絶望的に兩手を振つた。

「Non, Andiré, je dis que vous avez tellement, tellement changé.（いゝえ、アンドレー、私の言ふのはあなたがそんなにまでそんなにまで變つたと云ふことなんですの。）

「早く就床まなければ不可いと醫者から言はれてゐるぢやないか。」とアンドレー公爵は言つた。「寢る方が宜いだらうよ。」

公爵夫人は何とも答へなかつたが、和毛の生えてゐる短い上唇が不意に顫ひ出した。アンドレー公爵は起ち上つて、肩を縮めながら部屋を行つたり來たりした。

ピエールは眼鏡越しに、無邪氣な驚いやうな顏をして、公爵から公爵夫人へと眼を移し、自分も起ちあがらうとで

もするやうに身動ぎをしたが、やがて思ひ返した。

「ピエールさんが被居つたつて、かまはないわ。」と、小さい公爵夫人は唐突に言つた。彼女の美しい顔は泣き出しさうな顰面に變つた。「私はもう前から訝かうと思つてゐたんですの、アンドレー。何うして、あなたは私に對してそんなに變つてお仕舞ひなすつたんです？　私があなたに何んな事をしたのでせう？　あなたは戰爭に行つてお仕舞ひなさるのに、私の事なんか少しも可哀さうだと思つて下さいません。何う云ふ譯なんですの？」

「リイザ！」と、アンドレー公爵はかう言つただけであつた、がその一言には、懇願と威嚇と、取り分け、そんな事を言つて、後で後悔するぞ、といふ確信があつた。けれど彼女はセカ〳〵と言ひ續けた。

「あなたは、まるで、私を病人か子供のやうに取扱つて被居います。私にはすつかり分つてますわ。あなたは六ケ月前までは、こんなぢやありませんでした。」

「リイザ、お願ひだから止めて呉れ。」とアンドレー公爵は、前よりはもつとハツキリと言つた。

ピエールは、かうした會話を聞いてゐるうちに、だん〳〵いら〳〵して來たので、起ち上つて公爵夫人の方へ行つた。彼はどうやら公爵夫人の涙を見てゐるのに堪へられなくて、自分でも泣き出しさうになつたやうであつた。

「落着いて下さい、公爵夫人。それは單にあなたに然う想はれるだけなんです、何故と言ふのにですね、確に僕自身にも經驗があります、……ですから……何故と言ふのにですね、……いや、御免なさい、局外者のかゝわつたことではありません、……いや、落着いて下さい、……さやうなら。」

アンドレー公爵は、彼の手を取つて引き止めた。

「いや、も少し居て呉れ給へ、ピエール。彼女は大變親切だから、僕が君と一緒に、愉快に一晩過すのを邪魔しやう

などゝは思つてゐないよ。」

「えゝ、良人は自分のことよりほか何にも考へてゐません。」と、公爵夫人は、口惜し涙を止めやうともせずに、かう言つた。

「リイザ、」と、アンドレー公爵は、もう勘忍袋の緒が切れたぞ、といふやうな、高い聲をあげて、鋭く言つた。

公爵夫人の可愛いらしい小さい顔の腹立たしげな栗鼠のやうな表情は忽ち、同情を呼び醒すやうな、恐怖に滿ちた惹き付けるやうな顔付に變つた。彼女は、眉の下から、愛らしい眼で良人を見た。そして、その顔に、後悔して力なげに、けれどセカ〳〵と尾を振る時の犬のやうな臆病らしい詫びるやうな樣子があつた。

「mon Dieu! mon Dieu! (まア！　まア！)」と公爵夫人は呟いて、片手で着物の裾をつまみあげながら、良人のところへ行つて、額に接吻した。

「おやすみ、リイザ。」と、アンドレー公爵は起ち上つて、まるで彼女が他人でゞもあるかのやうに叮嚀にその手に接吻しながら言つた。

友達同士は默つてゐた。何方も話を始めやうもしなかつた。ピエールはアンドレー公爵を見てゐた。アンドレー公爵は小さい手で額を擦つてゐた。

「晩餐をやりに行かう。」と彼は立ち上つて、戸口の方へ行きながら、吐息をして言つた。

彼等は、備付けの新しく贅澤な、優美な食堂へ這入つて行つた。ナプキンから銀器、陶器、硝子器に至るまで、一

切のものが新婚の夫婦の家財道具に見られる、一種特別な新しさの極印を帶びてゐた。晩餐の最中に、アンドレー公爵は頻肱をついて、さながら長いこと何か心の中に抱いてゐたことを、突然口に出さうと決心した人のやうに、神經質的な焦立たしい表情をして話し出した。ピエールは、これまでこの友達の顏にさうした表情を見たことはなかつた。

「君、決して、決して結婚はするものぢやない。これが君に對する僕の忠告だ。自分で出來る丈けの事は悉く爲て仕舞つたといふ事が分るまでは、夫れから自分の選擇した女を愛さなくなるまでは、女をすつかり了解するまでは、決して結婚し給ふな。さもないと、到底取返しの付かない樣な殘酷な失策をやるよ。結婚するなら、年を取つて、何の役にも立たなくなつた時分にし給へ。……でないと、君の中にあるあらゆる貴いもの、善良なものは一切駄目になる。下らない事の爲めに何時となし使ひ減らされて仕舞ふ。さうだよ、さうだよ、さうなんだよ！　そんなに喫驚した顏をして僕を見給ふな。君が若し前途に何か望みを持つて居るならば、君は一歩毎に、君にとつてはもう萬事が終つたといふ感じを抱くだらう。宮庭附きの從僕や馬鹿者と一緒に並ぶ客間以外には、凡てが閉ざされて仕舞つてることに氣が付くだらう……それは事實だ！」彼は力をこめて手を振つた。

ピエールは眼鏡を外づした。すると顏が變つて、而かも前よりは一層人が好さうに見えた。彼は喫驚したやうに友達を見詰めた。

「僕の妻は、」とアンドレー公爵は語を次いだ。「優れた女だ。かうした女となら、誰しも安全に自分の名譽を保つて行かれると思はれるやうな、世にも稀な女の一人なんだ。併し、あゝ！　若し結婚しない昔にかへれるなら、僕は今どんな物でも惜みはしない！　僕は初めて、君一人だけに此樣なことを言ふのだ。僕は君が好きだから。」

かう言つた時のアンドレー公爵は、アンナ・パアウロウナの安樂椅子にグタリと凭りかゝつて、眼瞼を半ば閉ぢながら、齒の間から濾し出すやうに佛蘭西語を使つてゐたバルコンスキイとは前よりも、もつと似てゐなかつた。潤びたその顏は神經的に興奮して、筋の肉一つ〳〵がピリ〳〵と顫へ、前には光澤もなく、生命もないやうに見えてゐた眼は今や活々した光りに充ちて輝いてゐた。平常は元氣のない人だけに、かうして病的に興奮した瞬間には、一層キビ〳〵してくるやうに思はれた。

「君には、何故僕が此樣な事を云ふのか分らないだらう。」と彼は續けた。「ところが、これが人生全體の歷史なのだ。君はボナパルト及びその經歷の話をするが、」と彼は言つた。その癖、ピエールはボナパルトの事など一口も言ひはしなかつたのだ。「君はボナパルトの話をするが、併しボナパルトも一生懸命に骨を折りながら、一歩一歩眞直ぐに自分の目的に向つて進んでゐる時分には、自由だつた。彼は自分の目的以外には何物をも持つてゐなかつた。だから、その目的を達したのだ。併し女に縛られて見給へ、まるで鎖で緊がれた囚人のやうに、君は總ゆる自由を失つて了ふ。そして君の中にある凡ての希望、凡ての力は、たゞ君の邪魔物となり、悔恨を以て君を責め苛むものとなるだけだ。客間や、無駄話や、舞踏、虚榮、輕佻――それが、僕の逃げ出す事の出來ない魔法の圓だ。僕は今戰爭に出かけようとしてゐる。未曾有の大戰爭だ。ところが、僕は何にも知らない、何の役にも立たない。僕は非常に可愛い男なんだが又非常に皮肉屋なんだ。」と、アンドレー公爵は語り續けた。「で、アンナ・パアウロウナの家では、誰も彼も僕の言ふ事に耳を傾けるのさ。ところで、この馬鹿〳〵しい交際社會、之れがなくちゃあ僕の妻などは生きて居られないんだ。それに之れ等の女どもだがね……若し君が、それ等凡ての上流社會の女達や一般の女どもが何う云ふものであるかと云ふ事さへ分つたらねえ！　僕の父の言ふことは本當なんだ。自我主義、虚飾、愚鈍、何う見てもやくざなこと――これが正體を見せた時の女なんだ。交際場裡に於ける彼等を見れば、彼等の中に何物かがあるやうな氣がするが、

然し何にも、何にも、何にも無いのだ。さうだ、結婚し給ふな君、結婚し給ふな。」アンドレー公爵は言葉を結んだ。

「あなたが、自分自身は無能であり、自分の生涯は傷けられたと考へるのは、」とピエールは言つた。「僕には馬鹿らしく思はれますね。あなたの前には總ゆるものがあります、――總ゆるものが。そして、あなたは……」

ピエールは「何故あなたは」とは言はなかつた。併し、如何に彼がこの友達を尊重してゐるか、如何にこの友達の將來に多くの期待を持つてゐるかは、その調子に現はれてゐた。

「どうして此の男はあんな事が言へるのだらう？」とピエールは思つた。

ピエールは、アンドレー公爵をあらゆる完全なるものゝ模範であると考へてゐた。と云ふのはアンドレー公爵が、ピエールに缺けてゐる一切の資質を至極秀れた度合に於て兼ね備へてゐたからである。それを表すには意力と云ふ概念が一番近かつた。ピエールは何時でも、アンドレー公爵の、如何なる種類の人間とも落つき拂つて相手になる能力と、その異常なる記憶力と、博大な智識と、(彼は何でも讀んでゐた、何でも知つてゐた、何事に對してもある意見を持つてゐた)それから取り分け、仕事や、學問に對する公爵の力量に驚嘆させられてゐた。從つてピエールは、アンドレーの空想的哲學的能力の缺亡に屢々驚かされることがあつても、(ピエールはかうした方面の能力は多分に與へられてゐた)彼はそれを缺點とはしないで、力の徴であるとしてゐた。最も温かな、最も親しい、最も率直な間柄に於いてもお世辭や賞讃は、恰度車を廻はすのに油が必要であるやうに、必要なものである。

「僕はもう盛りを過ぎた人間だ。」とアンドレー公爵は言つた。「何故僕の事ばかり言つてたんだらう？　少し君の事を話さうぢやないか。」と、公爵は一寸間を置いて、氣を取り直さうとするやうな自分の考へを微笑みながら言つた。その微笑は直ぐにピエールの顏に反射した。

「だつて、僕のことで話すことなんかないぢやありませんか？」と、ピエールは口をあけて、呑氣さうに愉快さうに微笑した。「一體僕は何でせう？　一個の私生兒です。」かう言つて、彼は青味がゝるほど顏を赤くした。この事を口にするのは、彼にとつては非常な努力であつたらしい。「名もなければ、財産もない……で結局、實際は……」彼は何が實際なのか言はなかつた。「だが僕は今のところ自由だ、それで滿足してゐます。たゞ、どんな事に手を着けたらいゝのか、それが僕には少しも分りません。僕はこの事を眞面目に、あなたと御相談し度いと思つてゐたんです。」

アンドレー公爵は、親切さうな目でピエールを眺めた。けれど實際親しげで親切なその目のうちにも、矢張り自分の方が優れてゐると云ふ意識があつた。

「君は僕等の社會の中で、たつた一人の生きた人間だから、それで僕は君が好きなんだ。君は仕合せ者だ。何でも好きな道を擇び給へ、何うだつて同じ事だ。君は何所にゐたつて幸福だが、併し一ツ言ふことがある。あのクラアギンの連中のところへ行つて、あんな風な生活をすることは止め給へ。あゝした事は君には似合はないよ、放埒な生活や、道樂や、そんなやうなものはみんなね……」

「何うしろと言ふんです？」とピエールは肩を縮めながら言つた。「女、ねえ、女なんです。」

「僕には分らないね。」とアンドレーは答へた。「淑女らしい女達は、それや別問題さ。だがクラアギンの女達は女と酒だ、僕には分らないね！」

ピエールは、ワシーリイ・クラアギン公爵の家に住まつてゐた。そして、身持を直させる爲めに、アンドレー公爵の妹を結婚やうとしてゐる例の息子アナトールの放埒な生活の仲間になつてゐた。

「まあ、聞いて下さい、」とピエールは、突然幸福な考へが浮かんでゝも來たかのやうに言つた。僕は眞面目に、もう

長いことさう考へてゐたんですが、かうした生活を送つてゐては、何にも決める事も出來なければ、きちんと考へる事も出來ません。頭は痛むし、金はすつかりなくなるしね。今夜もアナトールが來いと言つたんだけど僕は行きません。」

「ぢや、以後は行かないと云ふ誓ひを立て給へ。」

「誓ひますとも！」

七

ピエールが友達の家を出たのは一時過ぎであつた。それはペテルブルグ特有の、カラッと晴れた六月の夏の夜であつた。ピエールは家へ歸へるつもりで辻馬車へ乘つた。けれど家へ近くなればなるほど、寧ろ夕方か朝とでも云ひ度いやうな、こんな夜、眠りに就くことは、とても出來ないやうに思はれた。ガランとした往來は、ズッと向ふの方まで見透された。ピエールは途々、今夜もアナトールのところでは、いつもの事爭の連中が集る筈になつてゐたことを思ひ出した。賭事がすむと例によつて酒の飲みくらがはじまり、ピエールの好きな滑稽の一つで終りになるのである。

「クラアギンのところへ行つたら面白いだらうな、」と彼は考へた。が、以後は其所へ行かないと云ふ、アンドレー公爵に立てた誓ひを思ひ浮べた。

併し、所謂弱い性格の人はよくある慣れつこになつた、かうした放埒を、も一度だけ味はひたいといふ熾烈な慾望に忽ち壓倒されて、遂ひに行くことに決めた。すると立所にかう云ふ考へが浮かんできた。アンドレーと約束する前に、既にアナトール公爵に行かうと約束してゐたのだから、アンドレーとの約束は何にもならない。結局彼は考へたかうした約束は凡て單に條件的なものであつて、決して明確な意味のあるものでない。明日死ぬかも知れないとか、乃至は名譽不名譽の差別などは全然なくなるやうな非常な事件が起るかも知れない、と云ふやうなことを考へれば殊にさうである。かうした考へは屢々ピエールに起つて來て、彼の決心や意志を悉く滅茶々々にして了ふのであつた。

彼はクラアギンの所へ行つた。

アナトールの住んでゐる近衛騎兵隊の兵營の中の、或る大きな建物の階段の所へ馬車を乘り着けると、彼は明るい階段や暗子段を駆け登つて、明け放たれた戸口を這入つた。控室には誰もゐなかつた。空瓶や、外套や、外靴（オヴァーシューズ）が、亂雜に、散らばつてゐた。强烈なウキスキーの香がしてゐた。話し聲や叫び聲が遠くから聞えてきた。

カルタも晩餐も終つてゐたが、連中はまだ解散しないのであつた。ピエールは外套を脱ぎ棄てゝ、第一の部屋へ這入つて行つた。其處には晩餐の餘り物があつて、一人の從僕が、誰れにも見られはしないと思つて、呑みさしの盃をこつそりと飲み干してゐた。第三番目の部屋では、ドタバタする音や、笑聲や、聞き覺えのある叫び聲や、熊の唸り聲やがしてゐた。明け開いた窓のあたりには、八人の青年が熱心に集まつてゐた。他の三人は熊の子に夢中になつてゐた。その中の一人が鎖をもつて引張り廻しながら、他の者をおどかしてゐるのであつた。

「俺はスチーヴンスに百賭ける！」と一人が叫んだ。

「大丈夫捕まりやしないよ。」と、も一人が叫んだ。

「俺はダラホフに賭ける！」と三番目のが叫んだ。「クラアギン、賭をやれよ。」

「おい、ミイシュカ（熊の名）は放つて置け、賭が始つたんだ。」

「一息に飲つちまへよ、でないと賭は負けだぞ！」と四番目のが叫んだ。

「ヤコブ、一本持つて來い、ヤコブ！」と、アナトール自身が叫んだ。彼は脊の高い美男子であつた、薄いシャツを一枚きり着て、胸のところを開いたまゝ多勢の眞中に立つてゐた。「待ち給へ、諸君。彼がやつて來た。吾々の親友ベトルーシャがやつてきた。」と彼はピエールの方へ振り向いた。

凡てのかうした醉拂ひ聲に交つて、一人明るい青い色の目をした中脊の男が、著しく耳に立つ素面のやうな調子で窓のところから叫んだ。「こゝへ來給へ、僕が賭の説明をしてやる！」

これはダラホフと云つて、セミヨウノフスキー聯隊の將校で、アナトールと一緒に住んでゐる、有名な博徒の暴漢であつた。ピエールは面白さうに邊りを見廻して微笑した。

「僕には分らんね。一體どうしたんだい？」

「一寸待て、此奴は未だ醉拂つてゐないんだ。壜を此處へ。」とアナトールは言つて、テーブルからコップを取つて、ピエールの傍へ行つた。

「第一に先づ飲まなくちや不可ん。」

ピエールは、再び窓のあたりに集まつて來た醉拂ひの連中を眉の下から眺めたり、その連中の喋るのを聞いたりしながら、一杯一杯と干し始めた。アナトールは絶えず、その盃に酒を滿した。そしてダラホフが、たま〳〵此所に居合はせた英國水兵のスチーブンスと賭をした次第を話した。それはダラホフが三階の窓に腰をかけて、外へ足をブラ

下げたまゝラム酒を一壜平らげると云ふのである。

「さあ、すつかり飲んぢ了へ。」アナトールはピエールにお終ひの一杯を與へながら言つた。「飲まなきや、放さないぞ。」

「いや、もう飲み度くない、」とピエールはアナトールを押しのけながら言つて、窓の傍へ行つた。

ダラホフはイギリス人の手をつかまへて、直にアナトールとピエールとに向つて言ふやうに、賭の條件をハツキリと説明してゐた。

ダラホフは縮毛の、明るい青い眼を持つた中脊の男であつた。彼は二十五歳であつた。多くの歩兵士官同樣に、彼も口鬚を生してゐなかつたので、顏ぢうで一番目に立つ口が、あからさまに見えてゐた。その口の線は非常に華奢に刻まれてゐた。上唇は、シツカリした下唇の上に、鋭い楔形に、きりつと閉ぢてゐて、兩側の口端には何時でも一ツ宛、微笑のやうなものが搖めいてゐた。そして、總てが一緒になつて、殊に凛とした、傲慢な、はしこい眼付きと結合して、その顏をしげ〳〵と見ないではゐられないやうな印象を與へるのであつた。ダラホフは金もなければ、羽振りの宜い親戚もなかつた。それでもアナトールが年に一萬ルーブルも費つてゐるのに、ダラホフはアナトールと一緒に住んでゐて、アナトールや其他の知人がみんなアナトールよりも彼を餘計に尊敬するほどの地位を巧みに作つて了つたのであつた。ダラホフはあらゆる種類の勝負事をやつて、大抵何時でも勝ちを占めた。何んなに飲んでも頭が明晰でなくなると云ふことは決してなかつた。クラアギンも、ダラホフも、二人ながら、その當時ペテルブルグに於ける放蕩社會の評判者であつた。

ラムの壜が運ばれた。窓の外の臺に座はるのに邪魔になる窓框は、二人の從僕が毀してゐた。二人は周圍の紳士連が怒鳴つたり、指圖したりするので、狼狽へて、ビク〳〵してゐるやうであつた。

アナトールは、例の得々たる樣子をして窓の傍へ來た。彼は何かしら驚してみたかつた。で、從僕を脇へ押しのけて、窓框を引張つたが、窓框は外れなかつた。そこで彼は窓硝子を叩き破つた。

「おい、君やつてみろよ、強力男、」と彼はピエールの方へ振り向いて言つた。ピエールは十字に組んである横木を掴んで、グツト引いた、するとメリ〳〵と音を立てゝ樫の窓框は捻ぢ取られて了つた。

「すつかり引っ外して呉れ、さもないと俺が掴まるやうに思はれるから。」とダラホフは言つた。

「イギリス人の奴威張つてやがる……面白い藝當ぢやないか……えゝ？」とアナトールは言つた。

「面白い。」と、ピエールは、片手に壜を持つて、窓の方へ行つたダラホフを眺めながら言つた。窓からは空の明るみが見られた。朝燒けと夕燒けとがその中に溶け込んでゐた。ダラホフは、手にラムの壜を持つたまゝ、窓の上に飛び上つた。「聽き給へ！」と、彼は窓臺の上に立つて部屋の方を向いて叫んだ。みんな默つてゐた。

「俺は賭ける。」と、（彼はイギリス人に解るやうにフランス語で言つたが、あまり巧くなかつた）……「俺は五十インペリアルの賭をする――それとも百インペリアルにしますか？」と彼はイギリス人に向つて言ひ添へた。

「いや、五十です。」とイギリス人は答へた。

「宜しい、五十インペリアル。それで、俺はこのラムの壜を一口ですつかり空けてみせる。この窓の外に、ぼうら此處に座つたまゝ俺はこれを飲むんだ。」（と、彼は體を屈めて、窓の外の壁の傾斜に突き出した所を指した）……「そして何にもつかまらないでだ……宜いかね？」

「宜しい。」とイギリス人が言つた。

アナトールはイギリス人の方へ振り向いて、彼の上衣のボタンをつかまへて、見下しながら、（イギリス人は身長の

低い男であつた）英語で、賭の條件を繰り返し始めた。

「一寸待て！」とダラホフは、注意を惹く爲めに壜で窓を叩きながら叫んだ。「一寸待て、クラアギン。いゝか、若しこれと同じ事をやる者があつたら、俺は其奴に百帝國貨やる。分つたか？」

英吉利人は、此の新しい賭に應ずるつもりなのか、應じないつもりなのか、どつちとも分らないやうに頷いた。

アナトールは、執拗くイギリス人をつかまへてゐた。そしてイギリス人が頷いて、すつかり了解めたと云ふ事を知らせてゐるのに、彼はダラホフの言葉を英語に譯してきかせるのであつた。この晩骨牌に負けた、痩せた若い一人の騎兵は、窓の上に這ひ上つて、體をかゞめて下を見下した。

「おゝ！　……おゝ！　……おゝ！」と、彼は窓から、下の石疊を見下しながら叫んだ。

「默れ！」と、ダラホフは叫んで、その士官を窓から引き下ろした。士官は足を拍車にからませて、不應な恰好をして部屋の中へ跳び込んだ。

手がとゞく樣に窓臺の上に壜を置いて、ダラホフはそろ〳〵と注意しながら窓に攀ぢ登つた。兩脚を垂れ、兩手を擴げて窓の幅を計り、體を据ゑて、手を離し、右へ少し動き、それから左へ動いて、やがて壜を取つた。もう、すつかり明るくなつてゐるのにアナトールは蠟燭を二本持つて來て、窓の出張りの上に立てた。白い襯衣を着たダラホフの背中と、縮毛の頭とが兩側から照らされた。みんな窓の傍に群がつた。イギリス人は前の方に立つてゐた。ピエールは蒼白してゐて、何にも言はなかつた。連中の中では年かさの一人の男が、突然驚いたやうな腹立ち顏をして進み出て、ダラホフのシャツをつかまへやうとした。

「諸君、馬鹿げた事ぢやないか。この男は死んで仕舞ふぜ。」と、他の連中よりは幾分無鐵砲でないその男が言つた。

アナトールはその男を止めた。

「觸つちゃ不可い。吃驚させたら、それこそ死んで仕舞ふぢやないか、えゝ？　……さうしたら何うするんだ、え？」

ダラホフは、また兩手を擴げて、體の平均を取りながら振り向いた。

「若し二度と俺をつかまへる奴があつたら、」と、彼は、しつかり結んだ薄い唇から、一言一言、言葉を落すやうにして言つた。「俺は此處から其奴を突き落してやる。さア……。」

「さア。」と言ひながら、彼は再び向き返つて、兩手を下ろした。そして壜を取つて、唇に當て、頭を後ろへ反らせて、體の平均を取る爲めに空いてゐる方の手を擧げた。毀れた硝子を片附け始めてゐた從僕の一人は、屈んだまゝの姿勢で立ち止まつて、窓とダラホフの背中とを凝と見詰めてゐた。アナトールは眼を見張つて、棒立ちに立つてゐた。イギリス人は口を窄めて横合ひから眺めてゐた。ダラホフを止めやうとした例の男は、部屋の片隅へ退いて、壁の方に顏を向けたまゝ安樂椅子の上に横たはつた。ピエールは顏を隱した、弱々しい微笑がまだ唇の上に漂うてゐたが、それも今は恐怖を表してゐた。みんな默つてゐた。ピエールは兩手を眼から離した。ダラホフはまだ元の位置に坐つてゐたが、たゞ頭だけは大變後方へ反つて、縮毛が襯衣の襟に觸れる位ゐになつてゐた。そして壜を持つてゐる手は次第に高くあがつて、如何にも骨が折れるやうにぶる〳〵と震へてゐた。壜はもう直き空になるらしかつた。で、頭を後へ反らして、益々高く壜を傾けたのである。

「何んだつて、こんなに長いんだらう？」とピエールは思つた。彼にはもう半時間以上も經つたやうに思はれた。と、不意にダラホフは、は脊骨を後へ反らした。腕は神經的に震へた。之れだけでも、傾斜になつて出張つた所に坐つてゐるのだから、全身をずらすのに十分であつた。彼の體全體が動いた。そして均衡を取り返へさうとあせるので、頭と腕とは益々烈しく震へた。片々の手はあげられて窓の出張りを攫まうとしたが、また下げられた。ピエールは一度眼を閉ぢて、もう決して二度と開けまいと思つた。不意に彼は周圍の騷がしさに氣が付いた。見上げると、ダラホフは窓の出張りの上に立つてゐた。その顏は蒼かつたけれど、如何にも愉快さうであつた。

「空だよ！」

彼は壜をイギリス人の方へ投げた。イギリス人は巧みにそれを捕へた。ダラホフは窓から飛び下りた。彼はラムの香をぷん〳〵させてゐた。

「素敵々々！」「豪いぞ！」「立派な賭だ。」「こん畜生！」なぞ云ふ叫び聲が四方八方から起つた。

イギリス人は財布を出して、金を數へ始めた。ダラホフは顏を顰めて、默つてゐた。ピエールはツカ〳〵と窓の傍へ行つた。

「諸君！　誰か僕と賭けるものはないか？　僕も同じ事をやるぞ！」と、彼は不意に叫んだ。「いや、僕は賭なんかどうでもいゝんだ。おい、酒を持つて來るやうに言つて呉れ。僕もやるんだ……此處へ持つて來るやうに言つて呉れ。」

「やらせろ、やらせろ！」とダラホフは微笑しながら言つた。

「何うしたんだ、氣でも狂つたのか？　誰が君にやらせるものか。君は梯子段の上でも眩暈がするぢやないか。」などと彼方からも此方からも叫んだ。

「僕は飲む。ラムを一壜よこせ。」とピエールは斷乎とした醉拂つた手付でテーブルを叩きながら怒號して窓に攀ぢ登つた。彼は腕を摑まれたが、非常に力が強いので、自分の傍へ近付く者をみんな遠くの方へ突き飛ばした。

「駄目だ。そんな風ぢや彼奴を何うすることも出來やしない。」とアナトールが言つた。「一寸待ち給へ、俺がうまく欺すから……おい、僕が賭の相手にならう、だが明日だ。これからみんなで……へ行くんだからな。」

「よし、行かう。」とピエールは叫んだ。「行かう……ミシユカも連れて行かう。……」かう言つて彼は熊をつかまへて、それを抱いたり、提げたりしながら、室の中を踊り廻り始めた。

八

ワシーリイ公爵は、アンナ・パアウロウナの夜會で爲たドルベツカーヤ公爵夫人との約束を守つた。夫人はその際自分の一息子のバリースの爲めに彼に哀願したのであつた。その願ひは皇帝に上奏せられ、バリースは多〳〵の前例を破つて、セミヨウノフスキー聯隊附近衛少尉に仕命せられた、けれどアンナ・ミハイロウナがいろ〳〵骨を折つたり工夫をめぐらしたりした甲斐もなく、クツウゾフの副官若しくは隨員といふ位置は得られなかつた。

アンナ・パアウロウナの夜會があつてから間もなく、公爵夫人はモスクワへ、富裕な親戚のラストフ家へ、歸つて行つた。モスクワでは、彼女は此家に滯在してゐたのである。それに、彼女の崇拜してゐる息子のボレンカ（バリースの愛稱）が幼年時代から教育されて、幾年間か暮してゐたといふ關係もあつた。彼は普通聯隊へ這入つた許りなのに、もう直ぐに近衛へ轉任させられたのである。近衛師團は既にペテルブルグを出發してゐたので、仕度する爲めにモスクワに居殘つてゐたこの青年少尉は、師團がラドジヴイロフへ到着する迄に追ひ付かなくてはならなかつた。

ラストフ家では、母と妹娘との名附日の祝ひしをてゐた。二人ながら名をナタリアと云つた。モスクワで誰れ知らぬ者もない、ポワルスカヤにあるラストフ伯爵夫人の大きな館には、朝からひつきりなしに祝ひ客の馬車が出たり入つたりしてゐた。伯爵夫人自身と美しい長女とは客の間に坐つてゐて、後から後からと入れ代り立ち代りやつて來る客の接待をしてゐた。

伯爵夫人は四十五歳で、痩せた東洋型の顏をしてゐる女であつたが、子供を產んだ爲めに窶れて了つたと云ふやうな風であつた。彼女は十二人の子供をもつてゐた。その起居振舞ひや會話の悠長なのは、體の弱い故なのであるが、その爲めに何となく物々しい樣子が加つて、人に尊敬の念を起させた。

アンナ・ミハイロウナ・ドルベツカーヤ公爵夫人は、この一家の親友と云つた格で、やつぱり客間に坐つて客をもてなしたり、話相手になつたりする事を手傳つてゐた。若い連中はお客の接待には適かないといふので、奥の部屋にゐた。伯爵はお客を出迎へたり、扉口に送り出したりして、晩餐に來られるやうにと、みんなを招待するのであつた。

「私自らにとりましても、祝ひの當人達二人にとりましても、實に、實に感謝に堪へない次第であります、モン シエーヤ。オアヽ マ シエール Oh ma chère（貴下又は貴女）」自分より位置の高い人であらうが、低い人であらうが、少しも區別しないで、誰れにでも漏れなく彼はかう言つた。「晩餐には必ずお出で下さい。若しお出でがなくば、立腹致しますぞ、モンシエーヤ。これは家族一同が眞心籠めてお願ひ致す處でございます、あなた、」太つた、機嫌の好い、きれいに剃つた顏には同じ表情を浮べ、同じ温い握手をして、輕い叩頭を繰返しては、總ての人達に洩れなく、變化なく、かうした言葉をかけるのであつた。一人の客を玄關に送り出すと、伯爵は客間に未だ坐つてゐる人達のところへ歸つた。一脚の椅子を引き

寄せて、交際社會が好きでもあるし又馴れてもゐると云つた人の風付で、足を榮々と開き、兩手を膝の上に置いて腰を下した。そして威嚴を作つて身體を、あちこちと搖り動かしながら、時にはロシア語で、時には又甚だ下手い癖にお得意のフランス語で、天氣の豫想をしたり、健康に就て忠告をしたりした。やがて又立上つて、自分の役目を果すのに飽き〳〵したが、それでも何處までもやらうといつたやうな樣子をして、頭の禿げた部分に白髮を撫で寄せながら、客人達を送り出して行つて晩餐にくるやうにと、又もや勸めるのであつた。

時には玄關からの歸へりに、溫室と料理人の室とを通りぬけて、八十人前のテーブルを据ゑてゐる、大理石床の大廣間へ立ち寄ることがある。そして銀皿や瀨戸物皿を持つて來たり、テーブルを据ゑたり、花模樣のついたテーブル掛けを擴げたりしてゐる給仕達をながめながら、此の家の執事のドミートリ・ワシーリエウイッチといふ生れの好い若い男を呼びつけて、「いゝかい、ミーチエンカ、萬事氣をつけて、うまくやつて呉れよ。さうだ、さうだ、」かう言つて、夫れから一ぱいに擴げられた大テーブルをさも嬉しさうに見まはしながら、「大切なのは獻立だからな。さう、さう……」と滿足の溜息をもらして、再び客間に歸つて行くのであつた。

「マリア・ルヴオウナ・カラーギン樣とお樣とが被居いました。」伯爵夫人の從僕の大男が、客間の戸口に立つて、太い濁聲で取り次いだ。伯爵夫人は一寸考へて、良人の肖像のついてゐる嗅煙函からひと摘みつまみあげた。

「お客樣にはもう飽々した、」と言つた。「でも、もう此の方が最後のお客樣だらう。それや氣取りやさんよ。兎に角お通し、」と沈んだ聲で從僕に言つた。その調子はまるで、「いゝとも、さつぱりと殺してお呉れ」とでも言つてゐるやうであつた。

身長の高い、がつしりした、高慢らしい、顏付きの婦人と、圓い顏の、ニコ〳〵した娘とが、スカートをさら〳〵

と鳴らしながら客間に這入つて來た。

「伯爵夫人、ほんとにお久しぶりでございました——あの子が病氣で臥せつてしまひましてね、la pauvre enfant(可哀さうな子が)——au bal des Razoumowsky(ラズーモウスキイ家の舞踏會で)——et la comtesse Apraksine (そしてアプラークシン伯爵夫人)——j'ai été si heureuse(わたくし、ほんとに仕合せでゐます)」——などと快活な女の聲が互ひに相手を遮りながらペチヤ〳〵と喋るのが、スカートのさら〳〵いふ音や椅子の軋る音と入り混じつてゐた。

一寸話が途切れると、直ぐもうお客さんは立上つて、スカートをさら〳〵云はせながら、「je suis bien charmé—la santé de maman—et la Comtesse Apraksine (私ほんとうに面白うございました——お母樣の御健康は——そしてアプラークシン伯爵夫人は)」と云つたやうな事を呟いたかと思ふと、又もや同じやうにスカートの音をさせて、玄關へ出て、毛皮外套かオバーコートを着て、馬車に乘つて歸つてしまう——之れだけの事をするに恰度都合が宜いやうな類の會話が始つた。

會話は、當時市中の主な噂の種となつてゐた、大金持ちの一人で、カザリン時代に美貌を以て鳴つてゐたペズウホフ老伯爵の病氣や、アンナ・パアウロウナの夜會で大變不作法な振舞ひをした其庶子ピエールのことなどに移つてゐた。

「老伯はほんとにお氣の毒でございますわ、」と客の一人が言つた。「大變お惡い御容態なんですつて。それに今度はお子さんの爲めに、この氣苦勞でございませう。これぢや、あの方も、やがてお亡なり遊ばすでせうよ。」

「まあ、何うしてなんでございますの？」伯爵夫人は、客の言ふことが呑み込めないやうな顏をして尋ねた。その癖彼女はペズウホフ伯爵の惱みに就ては、既に十五度も聞いてゐたのである。

「つまり現今の教育の弊害でございますね！　外國に留學して被居る時分に、」と客は言葉を遮めて、「あの若い方は相談相手がなかつたんですの。それで瞭によりますと、この頃ペテルブルグで、ひどい亂暴なことをして警察の手で放逐されたのですつて。」

「まあ、何うなすつたんでございますの？」と伯爵夫人は言つた。

「お友達の選び方が惡かつたのでございますよ、」と公爵夫人アンナ・ミハイロウナが口をいれた。「ヲシーリイ公爵の息子さんと、そのピエールさんと、それからダラホフと云ふ青年とが、お話にならないことをしたのださうでございますよ。それで二人はその報いを受けました。ダラホフは位階を剝奪されて普通の兵卒に落されますし、ペズウホフの子息さんはモスクワへ追放されました。アナトール・クラアギンの方は……お父さんが何うにか揉み消しはしましたが、矢張りペテルブルグをお拂ひになつたと言ふことでございます。」

「まあ、何んなことをしたんでせうね？」と伯爵夫人は訊いた。

「みんな全くの惡人なんです、殊にダラホフは。」と客は言つた。「あの男はマリア・イワノウナ・ダラホーワ――あんな立派な婦人の子息なんですよ、ねえ！　まあ何うでございませう？　その方達が何處からか熊を一匹手に入れてきて、一緒に馬車へ乘せて或る女優のところへ連れて行つたんですつて。それを巡査が止めやうとして駈けつけると、その人達は巡査を捉へて、熊と背中合せに縛りあげてモイカ河の中に投げ込んだのでございます、すると熊は巡査を背中にのせたまゝ泳ぎだしたんですつて！」

「巡査の格好がよかつたでせうな、あなた。」と伯爵は噴き出しながら叫んだ。

「まあ、何と云ふ怖ろしいことでせう！　笑ひごとぢやないぢやありませんか、伯爵？」

けれど婦人達自身も夫れを笑はずにはゐられなかつた。

「あの方達はやつとの事で其氣の毒な人を助けたのださうでございます、」と客は言葉を續けた。「これがキリール・ウラヂーミロウイツチ・ペズウホフ伯爵の息子さんのなさる賢い慰み事なんですよ！」と彼女は言ひ添へた。「でも世間では、あの方は大變教育のある、才人だと言つてゐるさうでございます。外國の教育つて、こんなものなんですよ。いくら金持ちだつて、當地では、あんな人を相手になさらない方が宜いと思ひますわ、私、紹介されるところでしたが、斷然おことわりしました。私には娘達もございますから。」

「何うして其方を、そんなにお金持ちのやうに有仰るのですの？」と伯爵夫人は、令嬢たちから目をそらして尋ねた。令嬢たちは直ぐと、彼女の言ふことを聞てはゐないやうな振りをした。「あの方の御子息はみんな庶子ですわ。たしかに……ピエールさんも庶子ですわ。」

客は手を振つた。「庶子ばかり二十人もございませうよ。」

公爵夫人アンナ・ミハイロウナは、交際社會に於ける、總ての細々した事に對する自分の關係や、詳しい知識やを見せ度かつたとみえて、口を差しはさんだ。

「かう云ふ譯けなんでございますよ、」と彼女は意味ありげに、半ば囁くやうに、「キリール・ウラヂーミロウイツチ伯爵の評判を知らないものはありません……ほんとに、あの方は御自分のお子さんの數を忘れてお了ひなすつたのです、が、あのピエールさんは、あの方の秘藏子なんですつて。」

「どんなに美しい御老人でしたでせう、」と伯爵夫人は言つた、「つい昨年のことでございますがねえ！　あんな奇麗な方を私見たことがありません。」

「今は大層お變りになりました、」とアンナ・ミハイロウナが言つた。「私が申さうとしてゐたことは、かうなんでございます。奥様の方から言へば、財產全部の直接の相續人はワシーリイ公爵なんです、けれど御老人はピエールさんが大變にお好きで、教育に大層骨を折つたり、皇帝にお手紙を差しあげたりなさいました……ですから、お亡なりになつた曉には、(すつかりお弱りになつて、何時そんなことになるか分らないのです、それでペテルブルグから、ドクトル・ロルランがまゐりました)あの大きな財產はピエールのものになるか、それともワシーリイ公爵のものになるか分りませんよ。四萬の農奴と幾百萬のお金。私は能く存じてゐます、ワシーリイ公爵が御自分で私に有仰つたのですから。それから、キリール、ウラヂーミロウイッチは、私には母方の大伯父に當つて居りますし、それにまた、パリースの教父でもございますの。」と彼女は、別段こんな事情に重きを置いてゐないと云つた風に言ひ足した。

「ワシーリイ公爵は昨日モスクワへ來られましたよ。何か檢分に被居るのださうでございます。」と客が言つた。

「さうでございます、併し、之れは此所だけのお話でございますが、」と公爵夫人は言つた、「それは口實なのです、あの方が被居したのは、キリール・ウラヂーミロウイッチ伯爵が御重態ときいて、お目にかゝりに來られたゞけなのですよ。」

「兎に角、あなた、それは素敵ないたづらでしたね、」と伯爵は言つた。が、年を取つた方の客が自分の言葉に耳を貸さないのを見ると、今度は若い婦人たちの方に振り向いて、「その巡査の格好は滑稽だつたでせうね。まるで眼に見えるやうだ。」

そして巡査が腕を振る樣子を眞似て見せて、再び賑かな低い聲でカラ〳〵と笑ひ出した。彼の兩腹は、常によく物を食ふ人、殊によく飲む人が笑ふ時のやうに、面白ろさうに搖れてゐた。「それぢや、どうぞ、晩餐にいらしつて下さい。」と彼は言つた。

九

沈默が續いた。伯爵夫人は愛想よく微笑してお客を眺めたが、それでも、此のお客が立ち上つて歸つて行つたところで、一向差支へないと思つてゐる腹を、隱さうとはしなかつた。娘は既に衣服の褶をつまぐりながら、もう行きませうよと云はぬばかりに母を見てゐた。と、その時不意に、四五人の女の子や男の子が戸口の方へ駈けて來たのが隣りの部屋から聞えた。つゞいて椅子に打衝つたり、ひつくり返したりする騷々しい音がしたかと思ふと十三歲ばかりの女の子が、モスリンの下袴に何やら包みながら、駈け込んできて、部屋の眞中に立ち止つた。餘り早く駈け出したものだから、つい止まれなくて、思ひがけなく此所まで來て了つたものらしかつた。それと同時に、襟に眞紅な紐をつけた大學生と、若い近衛の士官と十五歲ばかりの娘と、子供のシャツを着た肥つた紅顏の少年とが戸口に現はれた。

伯爵は飛びあがつて、體をユラ〳〵させながら兩手を差し出して、駈け込んで來た女の子を擁き抱いた。

「いよう、來たな！」と彼は笑ひながら叫んだ。「この子の名附け日です、あなた、この子の名附け日ですー」

「Ma chère, il y a un temps pour tout,(お前、時と場合といふ事がありますよ)」と伯爵夫人は憲と嚴格な顏をして言つた、「あなたはいつでも甘やかしてばかりゐらつしやるのね、エリー。「さう良人に向つて言ひ足した。

「Bonjour, ma chère, je vous félicite,(今日は、お孃さん、お目出度う)」と客は言つて、「Quelle délicieuse enfant!

（まア好いお子さんですこと）」と母親の方へ向いて言ひ添へた。

黒い眼と大きな口とを持つてゐる此の小さな娘は、美しくはなかつたが、生々としてゐた。餘り目茶目茶に駈けたので、未だ息もきれ〴〵に喘いでゐるその子供らしい肩は、裸であつた。眞黒な髪は亂れて後に散つてゐた。細い腕を露き出しにして、レースの緣飾りのついた長ズボンを着け、上品な足には、質素なスリッパーを穿いてゐた。もう子供ではないが、と云つて、まだ妙齡の女にもなり切らないと云ふ、丁度可愛らしい年頃であつた。

父の手を振りもぎつて、彼女は母の傍へ駈け寄つた。そして、その厳しいお叱言など氣にも止めないで、母のレースの肩布に赤くなつた顏をかくして、わあッと笑ひ出した。笑ひながら彼女は、下袴の中から取り出した人形に就て何か辻褄の合はないことを言つた。

「ね？……私の人形よ……ミミイよ、……ね……」

そしてナターシャはもうそれ以上言へなかつた、彼女には何も彼も可笑しく思はれた。母の膝にもたれて、キャッキャッと大聲に笑ふので、誰も彼もみんな、固つ苦しいお客樣までが、思はず釣り込まれて笑ひ出さずにはゐられなかつた。

「さア、あつちへお出で、あつちへお出で、そのお化けをもつて」から言つて母は慧と怒つたやうな振りをして娘を押しやつた、「これは末の娘でございますの。」と客の方へ向いて言ひ添へた。

ナターシャは母のレースの肩布から一寸顏を上げて、笑ひ泣きの涙の中からチラリと母を眺めたが、また顏を隱してしまつた。

客は、この家庭の場面を賞めざるを得なくなつたので、一寸お仲間に這入らねばなるまいと思つた。

「ねえ、お嬢さん、」とナターシャに向つて言つた。「此のミミイはあなたの何アに？　あなたのお嬢さんなんでせう？」

ナターシャは、自分に話しかけたお客さんの、小供らしいことに身をへり下したやうな調子が氣に入らなかつたので、眞面目くさつて彼女を見詰めた。

するうち、若い連中――アンナ・ミハイロウナの息子の將校バリース、伯爵の總領息子の大學生ニコライ、十五になる伯爵の姪ソーニャ、それから伯爵の末子の小さいペトルーシャ――は、みんなドヤ〳〵と客間に這入つてきたが、禮儀を亂さないやうに、顏ぢうに漲つてゐる昂奮と歡びとを押しかくさうとしてゐる樣子がアリ〳〵と見えた。言ふまでもなく、驚地に駈け出してきた奥の方の部屋で、彼等が取り交してゐた會話は、客間の中の、町の噂や、天氣や、アブラークシン伯爵夫人のことなどのヒソ〳〵話よりも、ずつと面白いものであつたらしい。彼等は折々目を見交しては、やつとのことで笑ひを押へてゐた。

學生と將校と、この二人の青年は幼な友達で、同じ年で、共に美男子であつた。けれど似た所と云つては少しもなかつた。バリースは丈の高い、金髪の、目鼻立ちの上品に整つた若者で、その美しい顏には沈着な色があつた。ニコライは丈の高くない、頭髪の縮れた青年で、氣さくな、快活な表情をしてゐた。上唇には、もう黑い髪が生えかゝり、顏全體が血氣と熱情とを表はしてゐた。ニコライは客間に這入ると、ポッと顏を赤くした。確に何か言ふことを目付けやうとしたのだが、目付からなかつたらしかつた。それに引き代へ、バリースは直ぐと寛いで、靜かに戯談交りに人形のミミイのことを話して、自分はこの人形の娘の時分から知つてゐる、其頃は鼻も缺けてゐなかつたが、それ以來五ケ年の間に、お婆さんになつて、頭蓋骨一面に龜裂が入つて了つた、などと語つた。

こんな事を云ひ終ると彼はナターシャを見た。ナターシャは彼に眷を向けて弟を見た。弟は眉をしわめて、身體を

ゆすりながら忍び笑ひをしてゐた。するとナターシャは耐へ切れなくなつて、跳ね上り、その早い小さな足の續く限り、急いで部屋の外に駈け出して行つた。バリースは笑はなかつた。

「お母様、お出かけなさる筈ぢやありませんでしたか？　馬車が要るでせう？」と彼は母に向つて、笑顔をつくつて言つた。

「あゝ、行つて、支度をするやうに言つておくれ、」と彼女はニコ〳〵しながら言つた。

バリースは靜かに室を出て、ナターシャの後を追つて行つた、よく肥えた男の子は、自分の計畫の邪魔をされたのを怒りでもしたかのやうに、腹立たしげに彼等を追うて駈け出した。

十

若い連中の中で、伯爵の長女(彼女は妹よりは四歳年上であるが、まるで大人のやうに振舞つてゐた)と客の若い婦人は別として、客間に居殘つたのはニコライと姪のソーニャとであつた。

ソーニャは、ほつそりとした小柄な黑髪の女で、軟かな眼は長い睫毛に蔽はれ、編まれた濃い黑髪は頭を二卷まいてゐた。いくらか薄黃色い皮膚は、痩せてはゐるが優美で逞しい露出しの腕と頸のところとが取り別け目に立つた。もの、どしの優にやさしいのや、小さな四肢の軟かで撓やかなのや、立居振舞ひの何所か狡猾らしくて內氣なのやは、他日可愛らしい猫となるべき、美しい子猫を想はせた。彼女は一座の會話に自分も興味をもつてゐるやうな顏をして、

微笑するのが禮儀に叶つたことであると思つてゐるらしかつた。けれど眼は、その意志に逆つて、濃く長い睫毛の下から、如何にも乙女らしい熱烈な愛敬の色を浮べて、もう直き軍隊に這入る從兄を眺めてゐた。で、彼女の微笑は、ホンの一寸の間も何人をも欺くことは出來なかつた。この子猫が蹲つたのは、たゞ前よりも元氣よく跳びはねんが爲めであり、客間を出たが最後、バリースとナターシャとのやうに、自分の從兄と戲れやうが爲めであることは見え透いてゐた。

「さやう、マ・シエール、あなた、」と老伯爵はニコライを指しながら、客に向つて言つた。「これの友達のバリースが今度近衞の士官に任命されたのです、ところが二人は非常な仲好しなので、別れるのは厭やだと言つて、大學も年を取つた父をも捨て軍隊へ這入らうとしてゐるんですよ、マ・シエール、あなた。官文書保管所に口があるのに、それも無駄です。これが友情と云ふものでせうか？」と伯爵は問ひかけるやうに言つた。

「でも、宣戰を布告したと云ふぢやありませんか。」と客は言つた。

「その噂も隨分久しいものですな。」と伯爵は言つた、「幾度も持ちあがつて、結局それ切りになるでせうよ。これが友情と云ふものでせうか、マ・シエール、あなた？」彼は繰り返へした。「これは驃騎兵へ這入らうとしてゐるのです。」

客は、何と言つたものか解らなかつたので、頭を振つた。

「それは決して友情からではありません、」とニコライは、赫つと上氣せ上つて、何か恥づべき非難でゞもあるかのやうに父の言葉を打ち消した。「決して友情からではありません、唯僕は軍務につきたくて堪らなくなつたからです。」

彼は從妹と客の令嬢とを見廻した。二人ながら贊成するやうな微笑を浮べて彼を眺めた。

「パヴラグラード驃騎兵聯隊のシューベルト大佐が、今晩晩餐に見える筈になつて居ります。今丁度休暇でこちらに

來て居られるのですが、ニコライを連れて行かうといふのです。何う仕様もありません。」伯爵は肩をゆすつて、自分に取つては非常な悲しみの源であるらしいことを冗談のやうに言つた。

「僕はもう申し上げたぢやありませんか、お父様、」と彼の息子は言つた。「若しお父様がお厭なら僕は行きやしませんつて。併し僕は、自分が軍人以外には何事にも適さないといふ事を知つてゐるのです。僕は外交官でもなければ、お役人でもありません。僕は自分の感じた事を包み隠すことが出來ないんです。」彼は、美しい青年らしい媚を作つて、頬りにソーニヤと令嬢とをチラリ〳〵と眺めながら、言つた。

ニコライにジツと眼を据ゑてゐる子猫は、今にもじやれ出して、猫らしい本性を發揮しさうに見えた。

「よし、よし、それで宜しい！」と老伯爵は言つた、「何かといふと直ぐムキになる。ボナパルトが、みんなの頭を狂はしてしまつたのだ。みんな彼が中尉から皇帝に出世したことばかり考へてゐる。どうか然うなつてもらひ度いものだて。」と、客が皮肉な微笑を浮べてゐるのには氣がつかずに附け足した。

大人たちはナポーレオンの事を話し出した。カラーギン夫人の令嬢ジュリイは、若いラストフの方へ振り向いた。

「此の前の木曜日にあなたがアルハーロフ家にお出でにならなかつたものですから、わたし悲しかつたわ。あなたがゐらつしやらないと、ほんとに淋しいのよ。」やさしい微笑を浮べながら、彼女は言つた。

素敵な嬉しがらせを云はれたので、青年は、媚びるやうな微笑を浮べながら、彼女の傍近く席を移して、ニコ〳〵してゐるジュリイと水入らずの話を始めた。彼の、我れともなしに浮べた微笑がソーニヤの胸に嫉妬の刄を加へたことには全く氣がつかなかつた。ソーニヤは眞赤になつて、強ひて態とらしく微笑してゐた。

ジュリイとの話の最中に、彼は不圖ソーニヤの方へ目をやつた。ソーニヤは、ひどく腹立しげな目付きで彼を眺めたが、涙を抑へることが出來なくなつて、唇に空々しい微笑を浮べたまゝ立ち上ると室を出て行つた。ニコライの活々した様子は、すつかり消えて了つた。會話の吐切れるのを待つて、彼は困つたやうな顔をしてソーニヤを探しに部屋を出た。

「どうでせう、若い連中と云ふものは、心の中を一寸も隠せないものですね！」アンナ・ミハイロウナは、ニコライの出て行く姿を指しながら言つた。「Cousinage, dangereux Voisinage.（從兄妹同士は危險な隣り同士ですね）。」と彼女は言ひ添へた。

「さうですよ、」と伯爵夫人は、言はゞ客間に射し込んでゐた日光が若い人達と共に消えたやうに思はれた時、かう言つた。それから誰にも訊ねられた譯ではないけれども、いつも自分の心の中から消えた事のない、一つの問題に解答するかのやうに、「子供をもつて仕合はせになるまでの苦勞心配と申しましたら、全く並大抵なものではございませんね！　今でさへ、ほんとに樂しみよりは心配の方が餘つ程多うございますよ。始終氣遣はしい事ばかりですわ！　殊にこの年頃は、女の子でも男の子でも非常に危險の多い時でございますからね。」

「全く教育次第でございますよ。」お客が言つた。

「えゝ、有仰る通りでございますわ、」と伯爵夫人は言葉を進めた、「これまでは、まアお蔭様で、わたくしは子供たちの友達で、何んでも隠さず打明けて貰つて居ります、」と言つて、多くの親達が、自分たちの知らない秘密などを子供は持つてゐないと思つてゐる誤りを、繰返した。「わたくしは、自分がいつも子供から一番信用されると云ふことを知つて居ります。あのニコライは隨分感情的な質ですから、惡戯をするやうなことがあるかも知れませんが、（男の子は男の子ですものね）それでも、さつきのお話のペテルブルグの若い人達のやうな眞似は致しつこありません。」

「さうだ、みんな立派な子供たちだ、立派な子供たちだ、」伯爵は相槌をうつた。此人はいつも、こんぐらかつた問題となると、何によらず立派だ、と極めて解決をつけてしまふのであつた。「まア何うだらう、騎兵になりたいなんて思ひ込むのだ！　だが、どんな事になるものやら、ねえ！」

「末のお嬢様は何てお可愛いらしいお子さんでせう！」と客は言つた。「火藥のやうですわねー」

「さうです、火藥のやうです、」と伯爵は言つた。「私にそつくりです！　それに何と云ふ聲でせう！　まア自分の娘ですが、あれは慥かに歌手に、第二のサロミニになれると思ひます。私共は、或るイタリー人を雇つて、あれを仕込んでゐます。」

「餘りお早過ぎはしますまいか？　あのお年頃にお稽古をなさると聲をこはすといふお話でございますよ。」

「いゝや、そんなことはありません、早やすぎるもんですか！」と伯爵は言つた。「我々の母親の時代には、みんな十二か十三で結婚したものですよ。」

「ねえ、あの娘はもうバリースに戀をしてゐるんですよ！　何と云ふ子でせう！」と伯爵夫人は優しく微笑みながら、バリースの母を見て言つた。そして、いつも自分の心の中を占めてゐる考へに答へるかのやうに言ひ續けた。「それでねえ、あなた、もし私が、あの子に厳しくしたら、何にも出來ないやうにしたら……二人は秘密で何んな事をしないとも限りませんよ。」（伯爵夫人の言ふ意味は、二人が互に接吻するかも知れないといふのであつた）「でも、私は今迄通り、あの子の言葉を一々知つてゐます。毎晩あの子は自分で私のところへきて、何も彼も打ち明けるのです。若しかすると甘やかしてゐるかも知れませんが、でも、私はこれが全く一番好い方法だと思つてゐます。上の娘はもつと厳しく育てました。」

「えゝ、私はまるで違つた育て方をされましたわ。」と姉娘の、美しいヴェーラは言つた、そして微笑した。けれど、その微笑は、よくあるやうにヴェーラの顏の美しさを增しはしないで、却つて不自然なものにした、從つて不快な感じがした。ヴェーラは容貌は好いし、頭も鈍くはなく、學課もよく出來れば、教育も行き屆いてゐた。聲も快く、言つた事も眞實で場所柄に適つてゐた。それだのに、不思議な事には、みんなが――客も伯爵夫人も――何んで彼女が、こんなことを言つたのだらうと怪しむやうな風にヴェーラを眺めた、そして一種氣まづい思ひをした。

「どなたでも、上のお子さんには、頭を使ひすぎるものでございますよ――何か非凡なものにしやうとしましてね。」と客が言つた。

「私共の失策を隱し立てもしませんがね、あなた。家内もヴェーラには頭を使ひすぎましたよ、」と子爵は言つた。「ですが夫れが何うなつたでせう？　矢張り立派な娘になりました。」と彼はヴェーラに向つて賞めるやうな瞬きをして、言ひ足した。

客人達は立上つて、晩餐に來る約束をしながら、辭し去つた。

「何といふ作法だらう！　何時までも居るつもりなのかと思つた。」客人達を送り出すと、伯爵夫人はかう言つた。

十一

客間から駈け出したナターシヤは、溫室の處までしか走らなかつた。そこで立止つて、客間のお喋りに耳を傾けな

がら、パリースの出て來るのを待つてゐた。彼が直ぐに出て來ないので、もう我慢が出來なくなつてきて、パタン〳〵と足を踏み鳴らしながら、今にも泣き出しさうになつた。と、その時青年の足音が、餘り遲くもなく、早くもなく、慣みぶかく近づいて來るのを聞いた。ナターシヤは素早く駈け出して、花の一杯咲いた植木桶の間に隱れた。

パリースはヂツと部屋の眞中に立つて、あたりを見まはし、軍服の袖の埃を拂つて、それから姿見の前へ行つて、自分の美しい顏を繁々とながめた。ナターシヤは息を凝らして、隱れ場所からソツと覗いて、何をするか見やうと思つてゐた。パリースは少時の間姿見の前に立つてゐたが、やがて滿足の微笑をもらして入口の方へ行つた。

ナターシヤは、も少しで呼びかけやうとするところであつたが、考へを變へた。「搜さしてやらう、」さう思つた。パリースが出て行くと直ぐソーニヤが一方の扉口から、顏を眞赤にして、涙の中に何やら腹立たしげに呟きながら這入つて來た。ナターシヤは、その傍へ駈けて行き度いと云ふ餓かの出來心をヂツと怺へて、恰度隱れ簑の中から世間の出來事を眺めると云つたやうに、自分の隱れ場所に留まつてゐた。彼女は、さうすることに一種特別な新しい喜びを感じてゐた。

ソーニヤはまだ何やら呟きながら、客間の扉口の方を眺めた。その扉口があいて、ニコライが出てきた。

「ソーニヤ！どうしたの？　そんなことをして宜いのかね？」とニコライは彼女の傍へ駈けよつて言つた。

「何でもないの、何でもないの、捨てといて頂戴！」さう言つてソーニヤは怒りあげてゐた。

「いや、僕は何うしてだかよく知つてるよ。」

「宜いわ、知つてらつしやるなら、尙ほ宜い事よ。さア、あの方のとこに行つてお上げなさい。」

「ソオーオーオニヤ！　一寸お聞き！　どうしてそんな宜い加減な想像をして僕を苦しめたり、自分を苦しめたりす

るんだい？」ニコライは彼女の手を取つて言つた。ソーニヤはその手を振り拂はうとはしなかつた。そして泣くことを止めた。

ナターシヤは身動ぎもせず、息を凝らして、目を輝かせながら隱れ場所から覗いてゐた。「こんどは何をするか知ら？」と彼女は思つた。

「ソーニヤ！　僕は世界をそつくり與れるつたつて欲しくはない、僕にはお前さへあれば何にも要らないのだ、」とニコライは言つた。「僕はそれを證明してみせる。」

「そんなこと有仰つちや厭やよ。」

「さう、ぢや言はない、ね、堪忍してお與れ、ソーニヤ！」彼は彼女を引き寄せて接吻した。

「まあ、いゝこと！」とナターシヤは思つた。そして、ソーニヤとニコライとが部屋を出て行くと、彼女も續いて其所を出て、パリースを呼んだ。

「パリース、此方へいらつしやいよ、」彼女は狡い、意味ありげな顏つきをして言つた。「あなたにお話しゝたい事があるの。此方へいらつしやい、此方へ！」と男を溫室の中の、植木桶の間の自分が隱れてゐた場所へ連れてきた。パリースは微笑しながら蹤いてきた。

「話したい事つて何なの？」と彼は尋ねた。

彼女は少しテレて周圍を見まはした。そして植木桶の上に投つて置いた人形が眼につくと、それを拾ひ上げた。

「人形にキスして頂戴。」と彼女は言つた。

パリースは探るやうな優しい眼付で、彼女の熱した顏を眺めたが、何とも答へなかつた。

「お厭や？　ぢや、此方へいらつしやい。」と彼女は言つて、もつと深く花の間へ這入つて行つた。そして人形を投り出した。「もつと傍へ、もつと傍へ、」かう囁いた。彼女は若い將校の袖口を握つた。その眞赤になつた顏には、熱情と危惧とが現はれてゐた。

「私をキッスして下さらない？」男の顏を窺ふやうに見あげながら、聞えるか聞えない位ゐに、かう囁いてニッコリしたが、興奮のあまり泣き出さないばかりになつてゐた。

バリースは赤くなつた。「何んて可笑しい人でせう！」と彼は言つて、一層赤くなりながら、彼女の方へ屈みかゝつた。けれど何にもしないで、何うなるか待つてゐた。

ナターシャは不意に植木桶の上に飛びあがつた。するとバリースよりも丈が高い位ゐになつたので、細そりした露出しの兩腕を彼の頸へ投げかけた。そして頭を一振りして、髪を後方へ振り拂ひながら、彼の唇の眞上をキッスした。

彼女は植木鉢の間を抜けて向う側へ出た、そして頭を垂れて立ち止つた。

「ナターシャ、」とバリースは言つた、「ねえ、僕はあなたを愛してゐる、けれど――、」

「あなた、私を戀してゐて？」とナターシャは遮つた。

「えゝ、戀してゐますとも、けど、今したやうなことは何うぞ爲ないで下さい。――あと四年の間ね――その時僕は、あなたに結婚を申し込みますから。」

ナターシャは一寸の間考へこんだ。

「十三、十四、十五、十六……」と彼女は細い小さな指でかぞへながら、言つた。「宜いわ！ぢや、それで決まるのね？」彼女の興奮した顏は喜びと安心の微笑で輝いた。

「えゝ、決りますとも。」と、バリースは言つた。

「いつまでも？」と小さな娘は言つた。「死ぬまでも？」それから幸福な顏をして彼の手をとりながら、彼と並んで靜かに休憩室へ這入つて行つた。

十二

伯爵夫人は、すつかり客の應待に疲れてしまつたので、もう此上誰れにも面會しないと言ひ渡した。夫れから玄關番は、お祝ひに來た人をばみんな、必らず晩餐にお招きするやうにと云ひつけられた。

伯爵夫人は、幼な友達の公爵夫人アンナ・ミハイロウナと差し向ひで話がしたかつた。彼女は公爵夫人がペテルブルグから歸つてから、まだ碌々顏も見なかつたのである。アンナ、ミハイロウナは、いくらか悲しさうではあるが、氣持の宜い顏をして、伯爵夫人の安樂椅子の傍近くに自分の椅子を引き寄せた。

「あなたには、私何も彼も打ち明けます、」とアンナ・ミハイロウナは言つた、「私共の古い友達で殘つてゐるものは幾干もありません、ですから私、尙ほ更らあなたの御友情を有難く思つて居ますの。」

彼女はヴェーラの顏を見ると、口を噤んだ。伯爵夫人は友達の手を握りしめた。

「ヴェーラ、」と伯爵夫人は、秘藏子でもないらしい長女に向つて言つた。「何うしてお前は何につけ考へがないんでせ

うね？　此所にゐては邪魔になると云ふことが分らないの？　妹のところへ行くか、それとも……」

美しいヴェーラは少しも腹を立てたらしい樣子はなく、嘲けるやうに微笑した。

「さう仰有つて下されば、お母ア樣、私ズッと前に行つてしまひましたのに。」かう言つて、自分の部屋の方へ出て行つた。が、休憩室を通りかゝると、そこの二つの窓に釣合よく二組の男女が坐つてゐるのを見た。彼女は立止つて、蔑すむやうに薄ら笑ひをした。ソーニヤはニコライの側近く坐つてゐた。ニコライは自分が初めて作つた詩を彼女に寫してやつてゐた。バリースとナターシャとは別の窓に坐つてゐたが、ヴェーラが這入つて行くと二人とも默つて了つた。ソーニヤと、ナターシャとは、惡い事でもしたやうな、けれど幸福さうな顏をして、ヴェーラを眺めた。

戀をしてゐる、かうした小さな娘達を見ると樂しい感激を覺えるものである。けれどヴェーラの心には彼等の樣子が少しも愉快な感じを起さないらしかつた。「あんなに幾度もお願ひしたぢやありませんか、」と彼女は言つた、「私のものを使はないやうにつて。あなたには、あなた自身の部屋があるわ。」彼女はニコライからインキ壺を奪ひとつた。

「ちよつと、ちよつと、」彼はペンを浸しながら言つた。

「あなた方は何時でも調子外れなことをするのが得意ね。」とヴェーラは言つた。「第一客間へ飛び込んで來たりなんかするもんだから、みんな間の惡い思ひをしましたわ。」

彼女の言ふ事は全くほんたうであつたけれども、と云ふよりは、ほんたうであつたがために、誰も何とも答へなかつた。四人ともたゞ互ひに眼を見交はしたゞけであつた。ヴェーラはインキ壺を手に持つたまゝ部屋の中に愚圖々々してゐた。

「それに、あなた方の年頃で、どんな秘密があるんでせう、ナターシャとバリースにしても、あなた方二人にしても！

——みんな馬鹿々々しいことだわ！」

「ねえ、それが、あなたと何の關係があるの、ヴェーラ？」ナターシャは自分を自分で辯護するやうに、靜かな聲で言つた。彼女は、この日は誰れに對しても平素より機嫌がよくて、優しいやうであつた。

「ほんとに馬鹿なことだわ、」とヴェーラは言つた。「私あなた方の爲めに恥しい思ひをするわ。一體どんな秘密なの？……」

「誰だつて自分々々の秘密を持つてゝよ。あたし達は、あなたとベルグのお邪魔はしませんわ。」とナターシャは、むつとして言つた。

「無論邪魔はしないでせうよ。」とヴェーラが言つた。「あたしの行ひには惡い事なんか一つだつてある筈がないんですからね。だけど、あなたがバリースに何んなに振舞つてゐるか、お母ア樣に言ひつけて上げるわ。」

「ナターリヤ・イリーニシナ（ナターシャの正式の呼名）は僕に大變よくして呉れます。」とバリースは言つた。「僕は別に不平をいふ事はありません。」

「お出しなさいよ、バリース、あなたは、さう云ふ外交家よ。（外交家といふ言葉は、一種特別な意味をつけられて、子供の間にはやつてゐた。）ほんとに厭やになつてしまふわ。」とナターシャは辱しめられたやうな震へ聲で言つた。「姉さんは、何だつてあたしを虐めるんでせう？」

「あなたにはどうせ解らなくつてよ、」とナターシャはヴェーラに向つて言つた。「だつて、あなたは誰をも愛したことはないんですもの。あなたには情愛と云ふものがないんだわ。ほんとに、あなたはマダム・ド・ジャンリーね、（この綽名はニコライによつてヴェーラに與へられたもので、非常に侮辱的なものとされてゐた。）他人を困らせるのがあな

たの一番の樂しみなんだわ。御勝手にベルグと巫山戯るが宜いわ。」と彼女は早口に言つた。

「でもね、わたしはお客樣の前で若い男を追つかけ廻しなんか、多分しないでせうよ……」

「到頭望みを達したね！」とニコライが口を入れた。「みんなに厭やな事を言つて、興を醒して了つた。子供部屋へ行かうぢやないか。」

四人は物に驚いた小鳥の群のやうに、立ち上つて、部屋を出て行つた。

「厭やな事を言つたのは、あなた方よ、わたしは誰にも何にも言ひやしないわ。」とヴェーラは言つた。

「マダム・ド・ジャンリー！　マダム・ド・ジャンリー！」隣りの部屋から幾つもの笑ひ聲が叫んだ。

みんなを、こんなに苛立たしい、不愉快な氣持ちにして了つた美しいヴェーラは、微笑して、打ち見たところ自分に言はれたことを氣にする風もなく、委見の傍へ行つて、襟卷と頭髪とを直した。自分の美しい顏を見てゐるうちに彼女は前よりも冷やかに、落着いてきたやうであつた。

客間では話が未だつゞいてゐた。

「ねえ、あなた、」と、伯爵夫人が言つた。「わたしの身の上も、餘り芳ばしい事ばかりぢやありませんよ。こんな風にして生活して行つたら、私達の財産が長くはもたないのは解り切つてゐますの。それがみんな倶樂部だの、良人のお人好しのためなんですよ。田舍で暮したつても、少しも骨休めにはなりはしません、やれ芝居だの、獵だの、何だ彼だと、そんな事ばかりですもの。でも、わたしの事なんか話したつて仕方がありませんわ。それより、あなたは何うしてスツカリ遺りをふせたんですの？。わたし貴女には、よく驚くのよ、アンネット。何うしてそのお年になつて、たつ

たお一人で、モスクワからペテルブルグと、大臣たちや豪い方々のところを飛び廻つて、みんなを說伏なさるのでせう。私まつたく驚いてますわ。ねえ、何うして片付けたんですの？　私なぞには、とても出來ませんね。」

「いゝえ、ねえ、あなた、」公爵夫人アンナ・ミハイロウナは答へた、「夢中になつて可愛がつてゐる一人子と、誰れ一人賴りのない寡婦暮しをするのが何んなものだか、あなたには知らせ度くないものですね。さうなれば、何でも自然に覺えるものです。」と多少得意の色を浮べて言ひ續けた。「例の訴訟のお陰で大きな經驗を致しました。誰か、さう云ふ豪い人に會ひたいと思ふと、私は、『何々と申す公爵夫人なにがし氏に御面會仕り度候』といふ手紙を出します。それから貸馬車に乘つて、二度でも三度でも――時によつては四度でも――望みの足りるまで押しかけて行きます。私は先方が何う思はうとかまやしませんよ。」

「なるほどね、それでは、バリンカ（バリースの愛稱）の事は誰にお願ひなすつたんですの？」と伯爵夫人は訊いた。

「あなたのお子さんは近衛將校になられたのに、私のニコリンカ（ニコライの愛稱）は唯の少尉で出てゆくのですよ。誰もあれのために取計つて呉れるものがないもんですからね。あなたは誰にお頼みになりましたの？」

「ワシーリー公爵ですよ。あの方が大層親切にして呉れました。直ぐに、すつかり承諾して、陛下に上奏して下すつたんですよ。」公爵夫人アンナ・ミハイロウナは、その目的を達する爲めに忍んだ屈辱はみんな忘れて了つて、熱心にかう言つた。

「何んなですの、ワシーリー公爵は？　お年を召しましたの？」と伯爵夫人は尋ねた。「私あの方にはルミヤンツオフ家の芝居の時以來お目にかゝりません、きつとお忘れになつたでせうよ。私を何とか思つたこともあつたんですが。」

伯爵夫人は昔を憶ひ出して微笑した。

「昔と少しもお變りはありませんよ。」とアンナ・ミハイロウナは答へた。「それは愛想の好い事と云つたら、まるで溢れるやうですわ。あんなに出世なすつても少しも威張らないでね。餘まりお役に立たないのが遺憾です、公爵夫人。併し何でも有仰つて下さい。』と、こんなに言はれるんですよ。えゝ、全く立派な方で、緣者にはそれは好くして呉れます。けれどもねえ、ナターリー、私はあの通り息子を愛してゐるでせう。あの子の幸福のためには、どんな事でもやります。ところが私の財産はほんとに乏しいんでしてね」と悲しげに聲を落して、アンナ・ミハイロウナは言ひつゞけた。

「今は全く恐しい破目に落ちてるんですよ。例の不幸な訴訟のために持つてゐるだけのものは、みんな失くして了ひました、それでも未だ片が付かないといふ始末なんでせう。本當にはなさらないでせうけど、實際一コペックもありませんの、何うしてバリースの仕度をしてやつたら宜いか解らないんですよ。」彼女はハンカチーフを取り出して、泣き始めた。「五百ルーブルなければならないのに、たつた二十五ルーブルの手形が一枚あるだけなの。こんな境遇なんですよ……今のところ當にしてるのはキリール・ウラデーミロウイッチ・ベズーホフだけですの、もしあの人が自分の名附兒を助けて――お承知の通り、あの人はバリースの名附父ですからね――あの子の身の立つやうに何とかして呉れなければ、私の骨折りもみんな無駄になつて了ひます。あの子の仕度をしてやるお金もないことになります。」

伯爵夫人は同情の涙を流しながら、默つて考へ込んでゐた。

「罪かも知れませんが、私はよくかう思ひます、」と公爵夫人は言つた、「キリール 伯爵はたつた一人で暮して被居るが……あの莫大な財産は……それで、あの方は何の爲めに生きて被居るんだらう？　生きてゐることは、あの方には重荷だのに、バリースは之れから生活を始めやうと云ふ許りだ、などゝですね！」

「あの方はきつと、バリースに何か殘すでせう。」と伯爵夫人は言つた。

「さあ、どんなものですかしら、ねえ、かうした金持や貴族と云ふものは大變利己主義なものですからね。ですが私今から直ぐとバリースを連れて會ひに行つて見やうと思ひますの。そして事情を明ら樣に打明けて見ませう。人が何と思つたつて、そんな事は構やしません、息子の運命の大事な場合なんですもの。」公爵夫人は立ち上つた。「今、二時ですね、お食事は四時でせうから、行つて來る時間はあります。」

かう言つて、如何にも事務に馴れた、時間を利用する事を知つてゐるペテルブルグの貴婦人と云つた樣子で、アンナ・ミハイロウナは息子を呼びにやつて、一緒に玄關へ出て行つた。

「ぢやあなた、行つてまゐります。」彼女は戸口まで送つて來た伯爵夫人に向つて言つた。「私のために幸運を祈つて下さい。」自分の息子に聞かれないやうに囁くやうな低い聲で言ひ添へた。

「キリール・ウラデーミロウイッチ伯爵の處へ行くんですね、あなた？」と食堂から玄關へ出ながら伯爵が言つた。

「若し伯爵の容態が好かつたら、ピエールに晩餐に來るやうに言つて下さい。以前よくやつて來て、子供達とダンスをやつたもんです。是非呼んで下さい。さあタラスが何んな腕前を振ふか見に行かう。オルローフ伯爵だつて、吾々が今日やるやうな晩餐會をしたことはないつて、奴は言つてるよ。」

十三

「ねえ、バリースや、」二人をのせたロストフ夫人の馬車が、藁を撒き散らした街を通つて、キリール・ウラデーミロ

ウイツチ・ベズーホフ伯爵家の廣庭に這入つた時、アンナ・ミハイロウナは息子にかう言つた。「ねえ、バリースや」と母は言つて、古ぼけた外套の下から手を出し、怯づ〳〵と、あやすやうな風に息子の手の上に置いた、「愛想よく、注意深くするんだよ。キリール・ウラデーミロウイツチ伯爵は、何と言つても、お前の名附親なんだからね、お前の將來はあの方次第で何うともなるんだよ。それをよく覺えてゐてね、愛想よくするんだよ、出來るだけね……」

「屈辱以外に何か報いられるものがありましたらばね……」と息子は冷やかに答へた。「けれども僕はお約束しましたから、お母さんのために、さうしませう。」

馬車は入口に立つてゐたけれども、玄關番の男は、此の母と子とを、ジロ〳〵と見て、(二人は名前も通ぜずに、兩側の壁龕に据ゑてある塑像の間の硝子張りの扉口を通つて、中に入つて行つたのであつた。)それから古い外套を意味ありげに眺めながら、公爵令嬢たちか、それとも伯爵か、何方に會ひ度いのかと訊ねた。そして、伯爵に會ひたいのだと聞くと、伯爵閣下は今日は、いつもよりもお惡くて、誰にも御面會は出來ないと言つた。

「それぢや歸りませうよ。」と、息子はフランス語で言つた。

「まあ、お前、」と母は、懇願するやうに言つて、息子の手に觸れた。かうすれば、それで彼をなだめるか、留めますかすることが出來るとでも云ふやうであつた。バリースはもう何とも言はなかつたが、外套を脱ぎもしないで、訝しげに母の顏を眺めた。

「ねえ、お前さん、」とアンナ・ミハイロウナは氣嫁を取るやうに、玄關番に向つて言つた。「キリール・ウラデーミロウイツチ伯爵が大層お惡いといふ事は私も知つてゐます、……その爲めに參つたの、……私は親戚のものです……決して伯爵の御迷惑はかけませんよ、お前さん……唯ワシーリイ・セルギエーウイツチ公爵にお目にかゝり

さへすれば、宜しいのです。あの方は當家に御滯在の筈ですね。どうぞ、取次いで下さい。」

玄關番は澁々と、二階で鳴るやうになつてゐるベルの綱を引いて、振りかへつた。

「ドルベツカーヤ公爵夫人がワシーリイ・セルギエーウイツチ公爵に御面會、」と二階から駈け下りてきて、梯子段の曲り角から下を見下した從僕に向つて、彼は言つた。從僕はフロックコートを着て、長い靴下に、スリツパを穿いてゐた。

母は色絹のガウンの褶を直し、壁一ぱいにかゝつてゐる姿見鏡に自分の姿をうつして見て、そして見る影もない、不態な靴を穿いたまゝ大廣に、絨壇を敷いた梯子段を昇つて行つた。

「ねえ、お前、お前は私に約束しましたね。」と彼女は、又も息子の方へ振り向いて、勵ますやうに手を觸れながら、言つた。息子は床に目を落して、素直に母の後に隨つた。

二人は、とある廣間に這入つて行つた。そこから一つの扉口がワシーリイ公爵に當がはれた部屋々々へと通じてゐた。

母子がその大きな部屋の眞中まできて、二人が這入つてきたのを見て飛び出して來た老僕に道を訊かうとしてゐる途端、一つの扉の青銅の把手がクルリと廻つて、勳章を一つ附けた天鵞絨の平常着をきた、ワシーリイ公爵が、立派な、頭髪の黑い男を送つて出てきた。此男は有名なペテルブルグの醫者のロルレエンであつた。

「それでは大丈夫ですな?」と公爵が言つた。

「公爵、errare est humanum (人間には仕損じといふ事もありますからね)併し……」と醫者は舌を縺らせて、ラテイン語をフランス風に發音しながら答へた。

「御尤もで、御尤もで……」

アンナ・ミハイロウナとその息子とが目につくと、ワシーリイ公爵は叩頭をして醫者を送り出して、默つて、訝かしげに二人の方に近づいた。息子は、不意に母の眼に深い悲しみの色の現れたのに氣がついて、かすかに微笑した。

「ほんとに、何といふ悲しい時に又お眼にかゝるやうな仕宜になつたのでせうね、公爵……あの、御病人の御容態は如何でございますか？」と彼女は言つた。自分をじつと見据ゑてゐる冷かな、侮辱するやうな眼をば氣にも留めないやうであつた。ワシーリイ公爵は、當惑したやうな不審さうな樣子をしてヂッと彼女を眺め、それからバリースを見詰めた。

バリースは丁寧に叩頭した。ワシーリイ公爵はそれにはまるきり氣がつかないで、アンナ・ミハイロウナの方に振向いた。そして彼女の問ひに對して頭と唇とを動かして、病人が重態である旨を答へた。

「まあ、さうでございますの？」とアンナ・ミハイロウナは叫んだ。「ほんとに飛んだ事でございますね！　考へても恐ろしうございます……これが私の息子でございますが、」バリースを指しながら言ひ添へた。「この子が親しくお眼にかゝつてお禮を申上げたいと申しますので。」

バリースは、も一度慇懃に叩頭をした。

「まつたくでございますよ、公爵、あなたが私共にして下さいましたことは子を持つ母の心には決して忘れる事が出來ません。」

「多少でもお役に立つことが出來ましたのは喜ばしい事です、アンナ・ミハイロウナ、」とワシーリイ公爵は、レースの襞を引つぱり直しながら言つた。自分に恩を受けてゐるアンナ・ミハイロウナに對して、ペテルブルグに於けるアンナ・パアウロナの夜會の時よりも、此處モスクワでは、その聲にも身振りにも、もつと勿體ぶつた風を見せてゐた。

「よく軍務を盡して、職責を辱しめないやうにし給へ。」と彼は厳かにバリースの方へ振り向いて言ひ足した。「私も喜ばしい……君は休暇をもらつて此方にお出でかね？」と例の氣のない聲で訊れた。

「新しい聯隊に加はる命令を待つてゐるのです、閣下、」公爵の不作法な調子に腹を立てる樣子もなく、話をしたいといふ風をするでもなく、大變つゝましやかに落ち着いてバリースが答へたので、公爵はジイッと彼を見た。

「君はお母さんと一緒にお暮しかね？」

「ラストフ伯爵夫人のところに居ります、」バリースはかう答へて、「閣下」とまた附加へた。

「ナタリー・シンシナと結婚致しましたあのイリヤ・ラストフでございますよ。」とアンナ・ミハイロウナが言つた。

「知つてます、知つてます、」とワシーリイ公爵は例の單調な聲で言つた。「私にはどうもナタリー・シンシナが何うして山出し者みたいな男と結婚する氣になつたのか分らんですな。申し分のない馬鹿な、滑稽な男ですよ。それに賭博うちだと云ふ話ですね。」

「でも、大變いゝ人でございますよ、公爵、」と、悲しげな微笑を浮べてアンナ・ミハイロウナは言つた。ラストフ伯爵がその位ゐの批評を受けるのは當然であるとは自分も思つてはゐるけれど、あの哀れな老人に餘り酷く當つて下さらないやうにと希つてゐるかのやうであつた。「お醫者さま方は何と有仰いますの？」一寸間を置いてから訊ねた。すると又しても深い悲しみの色が涙にやつれた顏に浮んだ。

「殆ど望みはありませんね。」と公爵は言つた。

「私は今一度伯父さまに、お禮を申し度いのでございます、私にもバリースにもゝ變親切にして下さいましたから。

この子は伯父さまの名附子なのでございます。」と彼女は、此の事實を聞いたらワシーリイ公爵が非常に喜ぶに相違ないと云つたやうな調子で言ひ添へた。

ワシーリイ公爵は眉をひそめて考へ込んだ。アンナ・ミハイロウナは、公爵が自分をペズウホフ伯爵の遺言に關して要求をもつてゐる競爭者として恐れてゐるのだと云ふことを覺つた。彼女は急いで彼を安心させやうとした。

「こんなことをお願ひするのも、心から伯父さまを愛し、尊敬してゐるからでございますの、」と彼女は言つたが、この『伯父さま』と云ふ言葉を特に平氣に、無雜作に口にした、「私、あの方のお人柄はよく存じてゐます――寛大で、正直な方です、けどお傍に被居るのは、公爵のお嬢さんたち許りでございませう……みなさんお年がお若かうございますからね……」彼女は頭を傾げて呟くやうに言ひ足した。「伯父さまは最後のお務めを遊ばしたでせうか、公爵？未期と云ふものは、ほんとに貴いものですからねえ！之れ以上惡いことはございますまいけれど、そんなに御危篤のやうでしたら、是非とも万一の用意をしてあげなくてはなりますまい。私ども女と云ふものは、」と彼女は優しく微笑した。「さう云ふ風な話の仕方をよく存じて居るものでございますよ、公爵。私は是非伯父さまにお目にかゝらなくてはなりません。隨分辛らいことですけれど、辛らいことには馴れて居りますから。」

公爵は、アンナ・パアウロウナの家でさう思つたやうに、今もアンナ・ミハイロウナを追ひ拂ふのは容易なことではないと明らかに思つたらしかつた。

「今會ふのは伯爵の爲めに惡いでせうよ、ねえ、アンナ・ミハイロウナ、」と彼は言つた。「曉迄待たうぢやありませんか。醫者達もその時分が危篤だと言つてましたからね。」

「ですけど、公爵、こんな時に待つわけにはまゐりません。さうでせう、ねえ、あの方の魂が救はれるか、否うかと

云ふ場合ですもの。あゝ怖ろしいものですわね、信者の義務と云ふものは。」

扉があいて、奥の部屋から伯爵の姪の一人が這入つてきた。顏は冷かで、氣六ケ敷く、長い脚は短い足とくらべて甚く釣合がとれてゐなかつた。

ワシーリイ公爵は、そちらへ振り向いた。「ねえ、どんなですかね？」

「矢張り同じことですわ。何うなるとお思ひですの、こんなに嚴々しくなすつて？」と公爵令嬢は、見知らぬ女だと云ふやうに、ジロ〳〵とアンナ・ミハイロウナを見ながら言つた。

「まア、あなた、すつかりお見それ申しました、」とアンナ・ミハイロウナは嬉しさうな微笑を浮べて言つた。そして伯爵の姪の方へ輕るく駈けよつた、「私は只今まゐつたところですの。御意のまゝに伯父さまの御看病のお手傳ひを致しますよ。何んなにか御心配でございませうね、お察し致しますわ。」と同情するやうに上目づかひをして言ひ足した。

伯爵の姪は何とも答へもしなければ、ニコリとさへもしないで、プイと出て行つた。アンナ・ミハイロウナは手袋をとつて、さながら、塹壕によつて包圍攻擊をするとでも云ふやうに、肘掛椅子に陣取つて、自分の側に坐るやうにとワシーリイ公爵に合圖をした。

「バリース、」と彼女は自分の息子に言つて、笑顏を向けた、「私は伯爵のところへ、氣の毒な伯父さまのところへ、お目にかゝりに行くから、お前はね、ピエールに會つてお出で。そして忘れずに、ラストフ家の招待の事を言ふんですよ。あすこで、あの方を晩餐に招待したいといふんですの。多分行かないでせうねえ？」と彼女は公爵に言つた。

「それ處ではありません、」と公爵は、如何にも持て餘したといふ樣子で言つた。「あの男を連れ出して下されば實に有難いですね。自分の部屋に閉ぢ籠つてゐます。伯爵は一度も、あれを傍へ呼んだことはありませんよ。」

彼は兩肩を縮めた。從僕は青年を階下に案内して、それから別の梯子段をあがつて、ピヨートル・キリーロウイツチ（ピエールの本名）の部屋に連れて行つた。

十四

ピエールは、ペテルブルグで自分の行くべき道を踏み外して、實際不品行のためにモスクワへ追放されたのであつた。ラストフ伯爵のところで出た話はほんたうであつた。ピエールは熊の脊中に警官を縛りつける手傳ひをしたのであつた。

彼は二三日前にモスクワへ來て、いつもの通り父の家に滯在してゐた。この話がモスクワぢうの評判になつてゐて、平常に彼を好まない、父の身邊にゐる婦人達が、之れを好い機會に父を焚きつけてゐるに違ひないと、豫想してはゐたけれど、彼は、到著したその日に父の居間の方へと出かけて行つた。

公爵令嬢たちの何時も坐つてゐた客間に這入ると、彼は居合はせた人たちに挨拶をした。そのうちの二人は刺繍臺に向つてゐたが、一人は聲高に書物を讀んでゐた。

そこには婦人が三人ゐた。キチンとした、胴の長い、氣六ケ敷い、一番年上の、アンナ・ミハイロウナのゐるところへ出てきた、あの令嬢が書物を讀んでゐたのである。若い二人の妹は、何方も薔薇色の、美しい、まるでよく似た顏をしてゐて、一人の唇の上に小さな黒子があるので、やつと見別けがつく位ゐであつた、その黒子はその令嬢を除

計に美しいものにしてゐた。彼等は二人ながら刺繍臺に向つて仕事をしてゐた。

ピエールは、まるで死人かペストにでも罹つてゐたものゝやうに迎へられた。一番年長の令嬢は一寸讀むのを止めて、仰天したやうな目付きをして默つて彼を見つめた。二番目の黒子のない令嬢も同じ表情をした。一番末の黒子のある、快活な、可笑がりやの令嬢は、これから面白い幕が初まると思つたからであらう、こみあげる笑ひを隱すために刺繍臺の上に身體を屈めた。彼女は刺繍の毛糸を下の方へ引張り出して、模樣でも調べるやうな風に屈みこんで、辛とのことで笑ひを抑へてゐた。

「御機嫌よう、」とピエールは言つた、「僕を御存じぢやないですか？」

「知り過ぎるほど知つてますわ、知り過ぎるほどにね。」

「伯爵のお加減はどうですか？　僕お目にかゝつても宜いか知ら？」とピエールは尋ねた。例によつて不器用な言ひ方であつたが、度を失つたやうなところはなかつた。

「伯爵は、肉體的にも、精神的にも苦しんで被居います、そして、その精神的の苦痛の大部分は、あなたが骨を折つて與へたやうなものですわね。」

「僕お目にかゝつてもいゝか知ら？」とピエールは繰り返へした。

「ふむ……あなたが若し伯爵を殺すおつもりなら、すつかり殺してしまふおつもりなら、會つてもいゝでせうよ。オルガ、伯父さまのスープが出來てゐるか見に行つて頂戴――もうそろ〳〵時刻だから。」と彼女は言ひ添へた。自分たちは忙しい、お前さんのお父さんを慰めるのに忙しい、それだのにお前さんは、たゞお父さんを不愉快にすることばかりに忙しいやうだと云ふことを思ひ知らせやうとしたのである。

オルガは出て行つた。ピエールは一寸の間じつと立つて、姉妹たちを見てゐたが、やがて頭を屈めながら言つた、

「ぢや僕は自分の部屋に行きます。お眼にかゝつても好い時が來たら知らして下さい。」彼はその部屋を出ると、黒子のある妹の、高くはないが、よく響く笑ひ聲を後ろに聞いた。

その翌日はワシーリイ公爵がやつてきて、伯爵の家に落ち着いた。彼は、ピエールを呼びよせて、かう言つた。

「ねえ、君、此所で、ペテルブルグでやつたやうなことをすると、君は愈々もう駄目なことになるよ。私が君に云ふ事はこれだけだ。伯爵の病氣は非常に、非常に惡い。君は會つてはいけない。」

その時以來誰れもピエールに構ふものはなかつた。彼は終日、二階の自分の部屋で只ひとり時を過した。

バリースが這入つて行つた時には、ピエールは部屋の中をあちこち歩いてゐた。折々隅々に立止つては、何か眼に見えない敵を槍で突き刺さうとでもするやうに、壁に向つて威嚇すやうな身振りをするかと思ふと、眼鏡越しに厳しく睨みつけ、それから又あちこち歩きまはりながら、肩を縮めたり、兩手を擴げたりして、譯けのわからぬことを呟いてゐた。

「L'Aangleterre a vécu.(イギリスの運命は盡きた)」と彼は顏をしかめて、何者かを指しながら、言つた。「M. Pitt. comme traître à la nation et au droit des gens, est condamné à……(國民及び公法の反逆者として、ピット氏《英國の政治家》は……に處せられる)」

その瞬間彼は自分がナポーレオンになつた氣で、危險なドヲヴアー海峽の横斷に成功し、一擧ロンドンを陷れて了つたつもりで、ピットの宣告をしやうとしてゐた。そこへ美しい、立派な青年士官が這入つてきた。

彼は、じつと立ち止つた。

ピエールは、バリースが十四歳の子供の時分に會つたきりなので、少しも覺えてゐなかつた。けれど、それにも拘らず彼は持ち前の性急な、懇ろな樣子をしてバリースの手をとつて、親しげな微笑を見せた。

「あなた僕を覺えてゐらつしやいますか?」とバリースは氣持の宜い微笑をうかべて、穏かに言つた。「僕は母と一緒に伯爵にお眼にかゝりに來たんですけれど、伯爵は餘程お惡いやうですね。」

「えゝ、惡いやうです。みんなに初終苦しめられてゐるんです。」とピエールは、この青年は一體誰れなのか、思ひ出さうと努めながら、答へた。

バリースは慥かにピエールが自分を覺えてゐないといふ事を感付いたけれど、名乘る必要もないと思つたので、少しも間誤つかずに、眞向に相手の顏を見つめた。

「ラストフ伯爵が今日あなたに晩餐に來て頂きたいと申して居りますよ、」と彼はピエールに取つては幾許か迷惑な、可成り長い沈默の後で言つた。

「あゝ、ラストフ伯爵、」とピエールは嬉しさうに叫んだ。「ぢや、あなたは伯爵の御子息のイリヤですね? どうです、僕は最初誰れだか分らなかつたんですよ。覺えてゐますか、よく僕等はジャッコー夫人と一緒に雀ケ丘へ遊びに行つたものですね……ずつと以前。」

「あなたは思ひ違ひをしてゐます、」とバリースは、大膽な、稍や皮肉な微笑を浮べて、ユル〳〵と言つた。「僕はアンナ・ミハイロウナ・ドルベツカーヤ公爵夫人の息子のバリースです。イリヤはラストフ家の父で、息子はニコライといふのです。僕はジャッコー夫人などゝいふ人は少しも知りません。」

ピエールは、蠅か蜂が集つてゞもきたかのやうに頭と手とを振つた。

「あゝ、どうしたんだらう！　僕は何も彼も混雜にしてゐた。モスクワには實に親類が多いもんですからねえ！　あなたはバリース……さうだ。成程、それではつきりしました。どうです、君はブローニュから出る遠征をどう思ひます？　ねえ君、もし、ナポーレオンが海峽を渡つたら、英國は由々しき大事でせう。僕は、この遠征は大丈夫可能であると信じてゐます。たゞヴイルヌウヴが下手をやりさへしなければね！」

バリースはブローニュ遠征に就ては全く何も知らなかつた。ヴイルヌウヴと云ふ名を聞いたのもこれが初めてであつた。

「モスクワでは、政治よりも晩餐會とか取沙汰とかいふものゝ方を餘計に面白がつてゐます。」とバリースは持ち前の沈着いた、皮肉な調子で言つた。「僕は其樣なことは知つてもゐないし、考へもしません。モスクワは何よりも取沙汰に夢中になつてゐるところです。」と彼は語を續けた。「それで今はみんな、あなたや伯爵の噂をしてゐます。」

ピエールは人の好い微笑を浮べた。自分で後悔するやうな事を言ひ出しはしないかと、相手のためにハラ〳〵してゐるやうな風であつた。けれど、バリースはピエールの顏を眞面に見ながら、きつぱりと明晰に、飾氣なく話した。

「モスクヲでは他人を取沙汰する外に何もすることはありません。」と彼は言葉を進めた。「誰も彼も、伯爵が誰れに財産を殘すかと云ふ問題に心を奪はれてゐるんです。そのくせ伯爵は、さういふ連中より却つて長生をなさるかも知れないんですのにね。私は心から然うありたいと思つてゐます。」

「成程、それは實に厭やなことですね、」とピエールは口を入れた。「實に厭やな事ですね。」ピエールは、此青年士官が自分から狼狽へるやうなことでも、覺えず喋るやうになりはしないかと、矢張りハラ〳〵してゐた。

「きつと、あなたには、こんな風に思はれるでせう、」とバリースは微かに頰を染めたが、言葉や態度は變へないで言

つた、「きつと、みんな伯爵から何か貰ふことより外何にも考へてゐないやうに思はれるでせう。」

「思つた通りだ、」とピエールは考へた。

「誤解のないやうに申し上げて置きたいと思ひますが、若し、あなたが僕や、僕の母をさう云ふ連中の仲間だとお考へになつたら、大變な間違ひです。僕等は非常に貧乏です。併し僕は――少くとも僕自身だけはですね。――あなたのお父さんがお金持ちで被居るだけに、僕は自分をあなたのお父さんの親戚だとは思ひません。それに僕にしても、僕の母にしても何一つ、あなたのお父さんに御無心しやうとも思はなければ、頂戴しやうとも思ひません。」

ピエールは暫くの間合點がいかなかつた。が、やつと譯けが分ると、長椅子から飛びあがつて、持ち前の性急な無器用な樣子でバリースの手をつかんだ。そしてバリースよりも、もつと赤い顏をして、羞しさと當惑との混り合つた氣持ちで話しだした。

「いや、これは不思議です！　なら僕が――全く、誰れがそんなことを思ふもんですか――僕はよく知つてゐます……」

けれど、バリースは再び、その言葉を遮つた。

「僕は何も彼も打ち明けてお話しして了つて愉快です。多分あなたには御不快でしたでせう。どうぞお許し下さい。」と彼は、自分がピエールから慰められる筈なのに却つて對手を慰めるやうに、かう言つた。「併し僕は、あなたの氣に障るやうなことは言はなかつたつもりです。何も彼も、あけすけに言ふのが僕の主義なのです……、それでは何う返辭を致しませうか？　あなたはラストフ家へ晩餐にいらつしやいますか？」

で、バリースは、厭やな義務を果し、間の惡い立場から脫れて、さもホッとしたらしく、自分以外の何人かを、さ

うした立場に置いて了つて、すつかり元のやうに快活になつた。

「いや、まあお聞きなさい、」ピエールは落着きを取り直しながら、言つた、「君は驚くべき人物です。君の今言はれたことは、實に立派なことです、實に立派なことです。君が僕を御存じないのは當然です、お目にかゝつたのは隨分昔のことですからね……子供の時分でした……君は僕のことを、いろ〳〵と想像なすつたかも知れないが……僕には君が解りました、すつかり解りました。僕には君のやうなことは、やれなかつたでせう、それだけの勇氣がなかつたでせう。だが、實に立派だ、君にお近付になつたのが嬉しい。あなたは、きつと妙な風に、」一寸言葉を切つて、ニコ〳〵しながら言ひ添へた。「僕を考へたのですね。」と、彼は笑つた。「だが、それが何んでせう？　僕等はお互ひに、もつとよく知り合はうぢやありませんか、ねえ！」彼はバリースの手を握りしめた、「僕は未だ一度も伯爵に會はないんですからね。僕を呼びによこして呉れないんです……僕はあの人を氣の毒だと思ひます、一個の人間としてね……だが何うにも仕様がありません。」

「所で、あなたは、ナポーレオンが軍隊を渡峡させる事が出來るとお思ひですか？」とバリースは微笑しながら訊ねた。

バリースが話題を變へやうとしてゐるのを覺つたので、彼はブローニュから出る遠征隊の利害を説明し出した。

從僕が、公爵夫人からだと言つて、バリースを呼びに來た。公爵夫人は歸らうとしてゐたのだつた。ピエールは、バリースと、もつと心安くなる爲めに晩餐に行く約束をした。そして別れ際には、眼鏡越しに優しくバリースの顏を窺き込みながら、親しげにその手を握つた。

バリースが行つてしまふと、ピエールは又暫くの間部屋の中を歩き廻つてゐたが、もう眼に見えない敵を突くのは止めて、あの可愛らしい、聰明な氣象のキツパリした青年の事を思ひ出して、微笑んでゐた。

若い人々、殊にそれが孤獨な位置にゐると、よくある通りに、ピエールは、この青年が譯もなく懷しかつた。それで何うしても友達にならうと決心した。

ワシーリイ公爵は、玄關まで公爵夫人を送つて行つた。公爵夫人はハンカチーフを眼に當ててゐた。頰には涙が流れてゐた。

「恐ろしいことですわね、ほんとに恐ろしいことでございますわ！」と彼女は言つた、「けれど、どんな目にあひましても、私は自分の義務を盡します。今晩は御看病にまゐりますよ。あの方を此の儘打捨つて置く譯にはまゐりません。一刻々々大切な場合ですからね。どうして姪御達が愚圖々々してゐらつしやるんでせうねえ。多分神樣が私を助けて下すつて、あの方に萬一の用意をさせる道を開いて下さいませう。Adieu, mon prince, que le bon Dieu vous sontienne.（左樣なら、公爵、神樣があなたをお守り下さいますやうに）」

「Adieu, ma bonne.（左樣なら、あなた）」くるりと夫人に眷を向けながらワシーリイ公爵は言つた。

「ほんとに伯爵は大變な御容體ですよ！」また馬車に乘り込んだ時、公爵夫人は息子に向つて言つた。「誰れの頭も大方見分けがつかなくなつてるの。」

「僕には解りませんが、お母さま、伯爵はピエールをどう思つてるんでせう？」と息子が尋ねた。

「それもみんな遺言狀を見れば分るでせうよ、ねえ、私たちの運命もそれで定まるんです……」

「ですが、お母さまは、伯爵が僕等に何かのこしてくれるだらうなんて、何うしてお考へになるんです？」

「あゝ、お前！　あの人はあんなに、お金持だのに私達はこんなに貧乏なんですもの。」

「さあ、それは餘り十分な理由にはなりませんよ、お母さま。」

「おゝ、神様、あの方は何んなにお惡いでせう、何んなにお惡いでせう！」と母親は叫んだ。

十五

アンナ・ミハイロウナがその息子をつれてペズウホフ伯爵家に出かけて行つた後、ラストフ伯爵夫人は、長いこと眼にハンカチーフを押當てた儘ひとりで坐つてゐた。やがて彼女はベルを鳴らした。

「ねえ、あなた、一體どうお爲なんです？」と、暫らく待たしてからやつて來た女中に向つて、腹立しげに言つた。

「私の用をするのがお厭なんですか？　若しさうなら、何處か他の奉公口を探して上げますよ。」

伯爵夫人は友の苦勞とその零落した狀態に、深く感動してしまつて、機嫌が惡かつた。機嫌が惡くなるといつも召使に向つてこんな風な物の言ひ方をするのであつた。

「どうも相濟みませんでした。」と、女中は言つた。

「伯爵に此處にお出でになるやうに申上げてお呉れ。」

伯爵は例によつて何處かおぢけたやうな顏付をして、よろ〳〵と妻の處にやつて來た。

「ね、奥さん！　山鳥のsauté au madère（マデイル葡萄酒を加へたスチュー）が出來るんだ！　私は一寸味を試してきた。タラスは千ルーブル出して雇つただけの甲斐があるよ。充分その價値がある。」

彼は妻の傍に腰を下して、呑氣さうに肘を膝の上に突きながら、白髮の頭髮を指でかき分けてゐた。「何の用だね、

奥さん？」

「實は、あなた――おや、此處のところのこの汚點はどうなさいましたの？」と、伯爵夫人は良人の胴衣を指しながら言つた。「これは乾度そのスチューなんでせう、」と、微笑みながら附け加へた。「實は、ねえ、あなた、私お金が頂きたいんです。」彼女の顏は悲しさうになつた。

「あゝ、奥さん！……」と伯爵はセカ〳〵しながら紙入れを取り出した。

「わたし澤山要るんですよ、あなた、五百ルーブル要るんです。」かう云つて彼女は、麻のハンカチーフを取出して、良人の胴衣を拭いてやつた。

「今直ぐ上げやう、今直ぐ上げやう。おい、誰か居ないか？」と、伯爵は叫んだ。それは、自分の召しに應じて、呼ばれた者が遽てゝ駈けつけて來るに相違ない、と確信してゐる人に限つてするやうな叫び方であつた。「ミーチエンカを私の所へ寄越して呉れ！」

貴族の產で、此の伯爵家で育てられて、今は伯爵家の會計の方を切りまはしてゐる若者のミーチエンカが、靜に部屋へ這入つて來た。

「ねえ、君、」と、伯爵は恭々しく這入つてきた青年に向つて言つた。「持つて來て呉れ給へ、」一寸考へて、「さう、七百ルーブル、さうだ。それから、よく氣をつけてこの前のやうな破けた汚ないのでなく、今度は綺麗なのをね、伯爵夫人に上げるんだから。」

「さうよ、ミーチエンカ、どうか綺麗なのをね、」と伯爵夫人は慇しつけられたやうな溜息をしながら言つた。

「御前、何時御入用なのでございますか？」とミーチエンカが云つた、「ご存知の通りに、その……いや、併し御心配

には及びません」と、彼は、伯爵の呼吸が重く急しくなり出して來たのに氣が付いて、(それは、何時も腹を立てる前兆であつた)、かう附け加へた。「私は忘れて居ました……只今直ぐに持つて參りますんでございますか?」

「さうだ、さうだ、その通りだ、直ぐ持つて來い。伯爵夫人に上げて呉れ。」

「あのミーチエンカは、何て重寶なんだらうね、」と、伯爵は、青年が出て行つた時、微笑しながら言ひ足した。「あの男には何でも不可能といふ事がない。出來ないなんてことは私には我慢がならん。何だつて可能るんだ。」

「あゝ、お金、ねえ、あなた、お金ですわね、これが世の中にどれだけ悲しみの種を撒くことでせう!」と、伯爵夫人は言つた。「あの金が私どうしても要るんです。」

「お前は恐ろしい浪費者だものね、奥さん、有名な、」と、言つて伯爵は妻の手を接吻して、また自分の部屋へ歸つて行つた。

アンナ・ミハイロウナがベズウホフ家から歸つて來た時、金は既に新しい札ばかり揃へて、伯爵夫人の小さなテーブルの上のハンカチーフの下に載せられてあつた。アンナ・ミハイロウナは伯爵夫人が何やらソワ〳〵してゐるのに氣がついた。

「どうでしたの、あなた?」と伯爵夫人が訊いた。

「あゝ、大變重い御容態ですよ! 一寸お眼にかゝつても解らないくらゐ、それは〳〵お悪いんですよ。全くお悪いんです。私はお傍に一寸ゐましたゞけで、二言とは口を利きませんでした。」

「アンネット、どうか御辭退なさらないで頂戴、」急に伯爵夫人は叫んで、ハンカチーフの下から金を取り出した。その年老いた、痩せた、威嚴のある顔は、見るも訝しなくらゐ眞赤になつた。

アンナ・ミハイロウナは直ぐにその意味を了解した。そして、いざといへば何時でも伯爵夫人を抱きしめられるやうにと、其方へ身を屈めてゐた。

「これは私からバリースに、仕度料として……」

アンナ・ミハイロウナは既う伯爵夫人を抱きかゝえて泣いてゐた、伯爵夫人も共に泣いた。二人は、自分達が互ひに友達であることや、優しい心を持つてゐることやを思うて泣いた、又、自分達、幼な友達の二人が金といふやうな卑しい事で心を惱まさなければならない事や、それから、自分達の青春がもう過ぎ去つて了つた事やを思うて泣いた。しかしその涙は快い涙であつた。

十六

ラストフ伯爵夫人は自分の娘達や多勢の客達と一緒に客間に坐つてゐた。伯爵は男客の連中を自分の書齋に連れて行つて、蒐めてためてある秘藏のトルコ烟管を見せてゐた。時々客間の方に出て來ては、「あの方は未だおいでにならないか?」と、訊いた。

人々は交際社會でle terrible dragon(恐ろしい龍)といふ綽名で知られてゐるマリヤ・ドミートリエウナ・アフラシーモフを待つてゐるのであつた。此の婦人は富や地位で有名なのではなく、その飾り氣のない氣象と、因襲的でない、おほつぴなら態度で有名であつた。彼女のことは皇室にまでも知られてゐた。モスクワでも、ペテルブルグでも、あ

らゆる者に知れ渡つてゐた。この兩都では、彼女を不思議に思ひ、審にその無作法を笑つたり、いろ〳〵と取沙汰したりしてはゐるものゝ、それでも、誰一人として此の女を畏れ敬はぬものはなかつた。

煙の一ぱい籠つた伯爵の書齋では、宣戰の布告された戰爭の事や、兵の召集の事などが話されてゐた。その宣戰の詔勅は未だ誰も讀んではゐなかつたが、それが發表された事は皆知つてゐた。

伯爵は、煙草を喫みながら話をしてゐる二人の客の間の、低い丸椅子に腰を下してゐた。自分では煙草も喫らなければ喫りもしなかつたが、頭を右へ傾げたり左へ傾げたりしながら、さも滿足さうに、煙草をのんでゐる人々を眺めたり、自分で種を蒔いて初めさせた、自分の傍の二人の客の議論に聞き入つてゐたりした。

この二人の一方は、膽汁質な、皺の多い、痩せたその顏を綺麗に剃つてゐた。まるで嬌飾家の若いもののやうな服裝をしてゐたが、中年を過ぎた男であつた。如何にも寛いだ樣子で、足を丸椅子の上へ載せて、琥珀のパイプを口の横つちよの方に啣へ、顏をしかめながら間歇的に煙を吐いてゐた。これは伯爵夫人の從兄にあたるシンシンといふ老獨身者で、モスクワの社交界で「毒舌家」として有名であつた。彼は相手に向つて、まるで眼下の者に對するやうな態度で喋つてゐた。

もう一人は生々とした血色のいゝ若い近衞士官で、キチンと帶革を締め、ボタンをかけ、頭を刈つてゐた。彼は口の眞ん中にパイプを啣へ、薔薇色の唇から靜かに煙を吸ひ込んでは、それを輪にして美しい口から吹き出してゐた。これはセミヨーノフスキイ聯隊附のペルグ中尉で、バリースはこの男と一緒に同じ隊に行く事になつてゐた。そしてナターシヤがあなたの戀人と呼んでヴエーラにからかつたのはこの男の事であつた。

伯爵は、この二人の間に坐つて、熱心にその話しに聞き入つてゐた。伯爵の此の上もない好きな事は、ボストン（カ

ルタ遊びの一種）の勝負をやることで、その次ぎには他人の會話の聽手になることであつた。かうした話し好きな二人に議論をさせるやうに巧く仕向け得た時に、取分けさうであつた。

「そこでだ、どうです、mon très honorable（わが最も尊敬すべき）アリフオンス・カールリツチ、」と、冷笑を浮べながらシンシンが言つた。こんなふうに最も碎けたロシアの俗語に、最も洗練されたフランスの熟語を混ぜて使ふのが、この男の會話の特色となつてゐた。「君の考では、君は、政府から金を貰ふ上に、更に又隊からも多少の收入を得ようといふのだね！」

「そんな事は少しも、ビヨートル・ニコライツチ、私は唯騎兵は歩兵に較べてずつと利益が少い、といふ事をお話し仕度かつたのです。まあ、私の位置を考へてみて下さい、ビヨートル、ニコライツチ。」

ペルグは何時も非常に正確に、穏かに、丁寧に喋るのであつた。彼の話すことは、何時も自分自身に關係したことであつた。自分に直接關係のない事が話題に上つてゐる時は、彼はいつも慎み深い沈默を守つてゐた。さうしてそんな風にして何時間でも、氣不味い思を自分にも感じなければ、人にも感じさせないで、坐つてゐる事が出來た。が、一旦その話が自分一個に關した事になつて來るや、彼は長々と、如何にも滿足さうに喋り出すのであつた。

「私の位置を考へてみて下さい、ビヨートル・ニコライツチ。若し私が騎兵隊にゐたら、四ケ月に二百ルーブル以上は貰へないんですよ、假令中尉になつてもですよ。處が今私は二百三十ルーブル貰つて居ります。」と、彼はシンシンと伯爵とを見ながら、愉快な、喜ばしさうな微笑を浮べてから云つた。それはまるで、自分の成功を自分以外の誰も彼もが常に願つてゐてくれるものと信じ切つてゐる、と言つたやうな調子であつた。

「それに、ビヨートル・ニコライツチ、」とペルグは云ひ續けた、「近衞に移つてから、私はそれだけ上に出た課です。

そして、近衛歩兵の方では缺員のあることがずうつと多いのです。それから、あなたは、その二百三十ルーブルでどんな風に私が暮らしを立てゝゐるか想像がつくでせう。だつて、私はそれで貯金もすれば、父へも多少仕送りしてゐるんですからね。」と、煙を輪に吹き出しながら、言ひ進めた。

「抜目がないね。獨逸人は手斧の頭で小麥を搗くつて諺があるね。」と、シンシンは、パイプを口の一方の隅から一方の隅へ移しながら言つて、伯爵に眼配せした。

伯爵は心から笑つた。他の客たちも、シンシンが喋つてゐるのを見て、それを聞きにやつてきた。ベルグはその人達が冷笑してゐるのにも、みんなが興味のない樣子をしてゐるのにも氣が附かずに、近衛に移つたので今や自分は、舊ゐた隊の古い同僚達より一歩先んじてゐるのだといふ事や、戰爭の際には中隊長は得て戰死するものだから、もし自分がその中隊での最高官として生殘つてゐたら、何の造作もなく中隊長になれるといふ事や、自分がゐる中隊ではみんな自分を好いてゐるといふ事や、自分の父は自分に滿足してゐるといふ事やを長々と說明した。ベルグは、かうした物語をするのが大變嬉しかつたのに相違なく、そして他の人にも各自それ〴〵の興味がある事などは念頭にも浮ばない樣子であつた。併し、彼のいふ事は何もかも非常に眞面目で氣持ちがよく、その子供らしい自我主義の無邪氣さが、如何にも明瞭だつたので、彼はその聽手をすつかり征服して了つた。

「いや、君、君は歩兵にゐても近衛にゐても、どつちだつてうまくゆきますよ。僕は保證して置きます。」と、シンシンは青年の肩を輕く叩きながら言つて、足を丸椅子から下した。伯爵は客人達を從へて、客間に這入つて行つた。

それは、集つた客〻、食堂へ案内されるのを今か〳〵と思つて、長くなる談話は始めやうとしなくなるが、その癖、

自分達は食卓に就くのを待遠しがつて居るではないといふ事を示る爲めに、彼方此方歩き廻つたり、默り込んで了つたりしてゐてはならないと思ふ、晩餐の始まる前の丁度さうした一時であつた。主人夫妻は絶えず、食堂の戸口を見詰め、そして時々互ひにチラ〳〵目交せした。客達は、二人のその眼付から、彼等の待つてゐるのは一體何だらう、定刻に來遲れてゐる大切な親族か、それとも用意の出來ない何かの料理のことか、などと占つて試たりするのである。

ビエールは食事の始まる直ぐ前にやつて來て、一番先に自分の眼に觸れた安樂椅子へと無雜作に腰を下ろした。それは丁度部屋の眞中で一同の通路の邪魔になつた。伯爵夫人は彼に何か話させやうとしたが、それには至極簡單な返事をした丈けで、彼は誰かを探し出さうとするかのやうに無邪氣な樣子をして、眼鏡越しに四圍を見廻してゐた。彼は著しく邪魔になつてゐたが、自分ではそれに氣がつかなかつた。彼の熊に關する一件を知つてゐる多數の客は、この太つた、身長の高い、温和しさうな青年を物珍らしさうに眺めてみたが、こんな活氣のない沈着いた青年に、どうしてそんな惡戯が出來たかと不審に思つた。

「あなたは、つひこの頃御歸朝になつたばかりでしたね？」と、伯爵夫人がビエールに訊いた。

「Oui, ma tante.（さうです、奥さん、）」と、彼は四圍を見廻しながら答へた。

「まだ良人にはお會ひになりませんでしたか？」

「Non, madame.（えゝ、奥さん、）」と、彼は適はしくない時にいつこりした。

「あなたは、つひ先達までパリーにゐらしつたんでしたね、さぞ面白いでせうねえ。」

「非常に面白うございます。」

伯爵夫人はアンナ・ミハイロウナとチラリと眼を交はした。アンナ・ミハイロウナは、此の青年の相手をして呉れ

ろと云はれたやうに思つたので、その側に坐つて、ピエールの父の事を話し出した、けれどもピエールは伯爵夫人に對したと同じやうに、ほんの簡單な返事をするだけであつた。他の客人達はみな幾つかに小さく塊り合つて、忙しさうに話し合つてゐた。「ラズーモフスキイ家……それは愉快でございました……あなたはほんとにご親切ね……アプラークシン伯爵夫人……」こんな言葉が方々からきれ〴〵に聞えた。伯爵夫人は立上つて玄關の廣間へ出て行つた。

「まあ、マリヤ・ドミートリエウナ?」こう訊いてゐる伯爵夫人の聲がそこから聞えた。

「え、わたし、」と、カサ〳〵した聲が答へてゐたが、間もなく、マリヤ・ドミートリエウナが客間へ入つてきた。令孃達をはじめ、夫人達に至るまで、ずうつと年寄つた人を除いて凡て起立つた、マリヤ・ドミートリエウナは扉口に立止つた。身長の高い、反身になつた五十歳位の婦人で、白髮頭を捲毛にしてゐた。振向いて衣服の袖を直すやうなふりをして、一座の人々をゆる〳〵と見まはした。マリヤ・ドミートリエウナはいつもロシア語で喋るのであつた。

「奥さんとお子さんに今日の名附日のお祝を申し上げます。」と、彼女は、他のあらゆる籌を壓して了ふやうな、大きな、太い聲で言つた。「おや、これは罪造りのお爺さん、」と、自分の手に接吻してゐる伯爵の方を振向いて言つた。「モスクワでは、もう倦き〳〵してゐらつしやる事とお察しします、――犬を連れてお出になる處がありませんからね。でも、まあ、どうなさるんです? あゝしてお子達が大きくなつてお行きなのに……」と、令孃達を指した。「厭でも應でも、この人たちに若い男を探してやらなければなりませんよ。」

「おや、うちのコザツクさん?」(マリヤ・ドミートリエウナは、ナターシヤを何時もかう呼んでゐた。)と、含羞む色もなく快活に手を接吻しに來たナターシヤの髮を撫でながら、言つた。「この娘はほんとに惡戲つ子だけれど、私は好

きです。」

大きな手提げ袋から一對の琥珀の耳輪を取り出して、樂しい名附日顏を眞赤にしたナターシヤに與へると、直ぐ振りかへつてピエールに話しかけた。

「さあ、さあ! あんた! 此處へおいでなさい、此處へ!」と態とらしく靜かな優しい聲で言つた。「此處へおいでなさい、あんた!」そして嚇すやうな調子で袖を一層高く捲し上げた。

ピエールは眼鏡越しに無邪氣に相手の顏を見ながら、側へ寄つて行つた。

「ずうつと此方へ、ずうつと此方へ、あんた! あんたのお父さんが羽振りの好かつた時分に、向きつけに眞實の事を言つて上げたのは私一人つきりだつたのです、だから、あなたにもさうして上げるのは私の神聖な義務なんですよ。」と言つて、彼女は一寸言葉を切つた。誰も、これはほんの前置きに過ぎないのだと思つたので、その後を默つて待ち受けてゐた。「立派な若者ですよ! ……お親父さんが現在危篤だといふのに、この人は熊の背中に巡査を縛りつけて嬉しがつてゐる! 恥かしい事です、ね、恥かしい事ですよ。いつそ、戰爭にでも行つた方がましなんだ。」

彼女は彼に背を向けて、笑ひを制へ切れなくなつてゐる伯爵に手を差し出した。

「あの、どうです、お食事になすつては、お仕度は出來てゐるんでせう、ね、」と、マリヤ・ドミートリエウナは言つた。

伯爵はマリヤ、ドミートリエウナを案内した、續いて伯爵夫人は驃騎兵大佐に伴はれて行つた。この人はニコライがその聯隊に加はる事になつてゐたので、今や大切なお客樣であつた。アンナ・ミハイロウァはシンシンと一緒に行

つた。ベルグはヴェーラに腕を貸し、ジュリイ・カラーギナはニコ〳〵しながらニコライと一緒に食卓に進んだ。その後から、その他の組が列を造つて廣間を横切つて行き、最後に、家庭教師や保姆に附添はれた子供達が、腕を組み合はせないで、ばら〳〵になつてそれに續いた。

給仕人達は忙しく立働き、椅子がガタ〳〵と引出され、奏樂席で音樂が初まり、客達はそれ〴〵席についた。伯爵家お抱への樂隊の奏樂の響は、間もなく、ナイフやフォークのカチカチいふ音や、客人達の話聲や、給仕人達の忙がしい足音などに掻き消されてしまつた。

食卓の一方の首席に伯爵夫人が坐り、その右にマリヤ・ドミートリエウナ、その左にアンナ・ミハイロウナ、それからその他の女客がずつと居並んだ。それと反對の端には伯爵が坐り、その右に驃騎兵大佐、その左にシンシン及びその他の男客が居並んだ。それから、も一つの長い食卓の片側には若い中でも稍々大人びた連中ベルグとヴェーラ、バリーヌとピエールが並んで坐つた。その向ひ側には家庭教師や保姆やと一緒に子供達が坐つた。

伯爵は、ズラリと並んだ酒瓶や菓物を盛つた皿やの間から、妻とその青いリボンの着いた先の尖つた帽子とを見遣りながら、熱心に隣席の人達に酒を注いでやつてゐたが、自分の分も忘れはしなかつた。伯爵夫人も亦、主婦として自分の義務には充分意を用ゐてゐながら、鳳梨の蔭から意味ありげな視線を良人に投げてゐた。良人の禿げた頭と顔の赤さが、その白髪に對照して特に目立つて見えた。

女客の席では絶えずべちや〳〵いふ話聲がしてゐた。が、男客の方では、話聲が次第々々に高くなつて行つた。その中でも大佐の聲が最も高く聞えてゐた。彼はだん〳〵赤くなつた、飽くまでも喰ひ且つ飲んだ。伯爵は彼を模範として他の客達に示さずにはゐられないほどであつた。ベルグは優しい微笑を浮べながら、戀愛は地上のものではなく、

天上の感情だなどゝヴェーラに語つてゐた。バリーヌは、新しい友人のピエールにそこにゐる客の名前を教へたりしながら、自分の向ひ側に坐つてゐるナターシャと視線を交はしてゐた。

ピエールは、初めて見る人々の顔を見廻しながら、あまり物を言はずに、頻りに食べてゐた。二種のスープの中ではa la tortue（龜の）を撰んだ、それを始めとして、魚肉饅頭から山鷄のスチューに至るまで、一皿として斷はらなかつた。膳部掛が、中身の知れないやうに白いナプキンで包んだ壜を、隣りの人の肩越しにさし出して、「ドライ、マデイラ」とか「ハンガリアン」とか「ライン葡萄酒」とか呟いて勧める酒を、一つとして辭さなかつた。何の客の前にも置いてあつた、伯爵の紋を鏤つてある四ツのガラス製の杯の中から、手當り次第に取上げて、さも美味さうに飲み干しては、滿足さうに客達を見廻はしてゐた。そして食事が進むにつれて段々可愛らしくなつて行つた。その向ひ側に坐つてゐるナターシャは、十三歳位の少女が、初めて接吻を交換した非常に戀ひし合つてゐる少年を見る時にのみするやうな眼附で、バリースを凝つと見詰めてゐた。この眼附は時々ピエールの方へさ迷つて行つた。その、をかしな、昂奮した少女の顔を見ると、ピエールは何故か知ら笑ひ出したいやうな氣持が頻りにして來るのであつた。

ニコライはソーニヤから遠く離れて、ジュリイ・カラーギナの側に坐つてゐたが、また例の思はず出て來る微笑を浮べながら、彼女に話しかけてゐた。ソーニヤも亦唇に微笑を浮べてゐたが、それは不自然なもので、内心嫉妬に苦しめられてゐるのは明かであつた。彼女は、蒼くなつたり、やがて又赤くなつたりして、その精力は、ニコライとジュリイとの話を聞く事に集注されてゐた。保姆は、誰か子供達に一寸でも無禮な事でもしたら、怒りつけてやらうとでもいふやうに、神經的に四圍を見まはしてゐた。獨逸人の家庭教師は、料理や、デサート（食後に出る菓子果物の類）や、酒などの總ての種類を、後になつて故國にゐる家人に細々と書き送つてやるために、それを暗記しやうと努めて

ゐた。そしてナプキンで包んだ酒瓶を持つてゐる膳部掛が、自分の處をヌキにして通り過ぎて了ふやうな事があると、彼は非常に憤慨した。その獨逸人は眉を顰め、そして、自分はそんな酒なんか貰はうとは思つてゐない、といふ樣子を示やうと努めた。併し、誰一人として、彼が酒を欲するのは、喉をうるほし度い爲めでも、意地が汚い爲めでもなく、それは只智識に對する正しい欲求からだといふことを了解してくれなかつたので、彼はそれが口惜しかつた。

十七

男たちの占めてゐるテーブルの一隅では會話がだん〳〵活氣附いて來てゐた。大佐はペテルブルグでは既に宣戰の詔勅が布告された事、自分は現にその日、總司令官のところへ急使に依つて送られたその模寫を見たことなど語つてゐた。

「一體、まあ何だつて、我々はボナパルトと戰爭を始めなければならないやうな羽目になつたんだろう？」とシンシンは言つた。「彼はアウストリアをすつかり參らして了つた。今度はこつちの番にならなきあいゝがと思つてゐたんだ。」

大佐は肥つた、脊の高い、多血質の獨逸人で、如何にも熱誠な軍人で、愛國者であつた。彼はシンシンの言つた事が氣に喰はなかつた。

「何故かといふ理由はですね、」と彼はドイツ訛で言つた。「それは陛下がよく御承知です。詔勅のなかには、ロシアに

切迫して來る危險、帝國の安全、その國威、及び同盟の神聖を危うくするのを平氣で放つて置くことは出來ないと、仰せられてあります。」彼は今體の要點がその一語に懸つてでもゐるかのやうに、『同盟』といふ言葉に特に力を入れて言つた。それから、彼は、公務生活で錬えた綿密な記憶力に依つて詔勅の冒頭の言葉を繰返へした……「(で、皇帝は、自分の企圖、自分の不斷不易の目的が、確乎たる基礎の上に歐羅巴の平和を建てやうとする所にあるが故に、國境を越えて軍隊の一部を進め、以てその所期の遂行に力を盡さうと決心した。)これが宣戰の理由です。」と結び、勿體ぶつた態度で酒を一杯ぐうつと飲み干して、賛同を求めるやうに伯爵の方を見た。

「あなたは（エレマ、エレマ、お前は家に引込んで自分の紡錘を廻してゐる方がましだよ）といふ俚諺をご存じですか？」と、シンシンは顔を顰めたり又にこ〳〵したりしながら言つた。「これが、ぴつたり我々に適合してゐるんです。スヴォーロフ（有名な露國元帥）でさへ散々に敗ぶれて了つたぢやありませんか、現代のスヴォーロフは何處にゐますかね？　それを伺ひたいものだ？」ロシア語かと思ふと今度はフランス語、と思ふと今度は復たロシア語と云つたふうに始終あつちこつちに取換へながら彼は言つた。

「我々は、我々の血の最後の一滴まで戰はなければならない、」と大佐はテーブルを叩いて言つた。「そして皇帝の爲めに死なゝければならない、それでいゝんです。そして出來るだけ、それに就いて議論をしない事です。」と再び伯爵の方に振向いて、「出來るだけ」といふ言葉を長く引張りながら、結論した。「我々老驃騎兵はこんなふうに考へる、その外に云ひやうがないんだ。で、君は何う思ふね、若い人間であり、そして若い驃騎兵である君は？」と、ニコライに話しかけた。ニコライは、そつちで議論してゐる事が今度の戰爭が今度の戰爭の事だと解ると、ジュリイとの會話を止めて、大佐を眤つと見詰めながら、熱心に耳傾けてゐた。

「全く同感です。」とニコライは、赫と赤くなつて、今現に自分が非常な危險な地位に置かれでもしたかのやうな懸命な、決心した顏附をして、自分の皿を捻り廻したり酒盃の位置を變へたりしながら、答へた。「我々ロシア人は勝つか、亡びるか、どつちかでなければならない、と私は信じてゐます。」と彼は言つた。が、彼自身も、さう言つた後では、他の人達と同じやうに、この場合あまりに熱狂的な誇張した喋り方だつたのに氣が付いたので、彼は妙に體裁が惡くなつた。

「あなたの今有仰つた事は、大變立派だつたわ、」と、傍にゐたジュリイは熱心に言つた。ソーニヤは、ニコライが物を云つてゐる間、身體ぢうが慄へ、耳、耳の後、それから頸から肩へかけてポーッと赤くなつた。ピエールは、聯隊長の言葉に聞き入つて、賛成するらしく頭を頷かせた。

「立派な考だ、」と、彼は言つた。

「君は眞の驃騎兵だ、」と、聯隊長は復たテーブルを叩いて叫んだ。

「そこであなた方は何でそんな騒ぎをしてゐるんです？」かう問ひかけたマリヤ・ドミートリエウナの濁聲が不意にテーブル越しに聞えた。「何だつてそんなにテーブルをドン〳〵叩くんです？」と、聯隊長に言つた。「誰れを對手に、そんなに噴然となつておいでなんです？　まるで、フランス人が自分の前にゐるやうに思つておいでのやうですね。」

「私の言ふのは眞實です。」と驃騎兵は微笑みながら言つた。

「みんな戰爭のはなしだ、」と伯爵はテーブル越しに叫んだ。「家の息子も出征するんです、ねえ、マリヤ・ドミートリエウナ、家の息子も出征するんです。」

「私の息子は四人軍隊にゐます、それでも私は悲しみません。一切の事は神樣のお手の裡にあるんですわね、寢床の

中にゐても死にます、戰場にだつて神樣のお助があります。」マリヤ・ドミートリエウナの太い聲は苦もなくテーブルの遙か向ふの端から響いて來た。

「それは左樣ですとも。」

そして、會話は再び二つの集團に分れてしまつた。テーブルの一隅を占めてゐる婦人達の間と、他の一隅に集つてゐる男達の間と。

「あなたに何うして訊けるもんですか！」と、小さい弟がナターシャに言つた。「きつと、訊けないよ！」

「いゝえ、私、訊くわ。」と、ナターシャは答へた。

ナターシャの顏は急に赤くなり、自棄半分な愉快さうな決心の色を浮べた。ピエールに聞いてゐらっしやいといふやうな目をして、立ちあがると母親に話しかけた。

「お母樣、」と、ナターシャの子供らしい鋭い聲が、テーブル一體に響き渡つた。

「何です？」と、伯爵夫人はビックリして尋ねた。が、娘の顏附で何か惡戯だなと悟ると、嚇かすやうに窘めるやうに頭を動かして、嚴格に手を振つてみせた。

あたりの會話が凡て止んだ。

「ねえ、お母樣！　どんなプッディング（菓子）が出るの？」と、ナターシャの小さな聲が、一層はつきりと落付いて響いた。

伯爵夫人は怖い顏をしやうとしたが、さうする事が出來なかつた。マリヤ、ドミートリエウナは彼女に向つて太い指を振つた。

「哥薩克兵！」と、彼女は嚇すやうに言つた。

客の大半は、この惡戯の譯が解らなかつたので、何れも老婦人達の顏を打守つた。

「そんな事を云ふと承知しませんよ。」と、伯爵夫人が言つた。

「お母樣！　どんなブツディングが出るの？」と、ナターシヤは、確に自分の惡戯は惡戯で通るに違ひないと思うて、大膽な無遠慮な愉快な調子で叫び出した。ソーニヤと肥つた小さなペエチヤ（ペトルーシヤの愛稱）とは、噴飯したいのを一生懸命に堪へて隱してゐた。「ね、私、訊いたわ。」と、ナターシヤは小さな弟と、ピエールとに私語いて、も一度ピエールの顏をチラと見た。

「アイス・ブツディングだよ、だけれど、お前には何も上げません、」と、マリヤ・ドミートリエウナが言つた。ナターシヤは何も恐い事はないと見てとつたので、マリヤ・ドミートリエウナをさへ恐がらなかつた。

「マリヤ・ドミートリエウナ！　どんなアイス・ブツディングなの？私、アイス・クリームは好かないわ。」

「カロツト（人參）・アイス。」

「いゝえ、どんなの？　マリヤ・ドミートリエウナ、どんなのよ？」と、ナターシヤは殆んど叫ぶやうに言つた。「敬へて頂戴。」マリヤ・ドミートリエウナも伯爵夫人も笑ひ出した。お客達一同もドツと笑ひ出した。それは、マリヤ・ドミートリエウナの返答を笑つたのではなく、彼女をこんな風に凹ます勇氣と頓才とを持つてゐるその小さな娘の[illegible]し難い大膽と氣轉とに笑はせられたのであつた。

ナターシヤは、パインアツプル・アイスだと聞かされるまでは叫び止めなかつた。氷の前に、シヤンパンが廻はされた。再び樂隊が初まつた。伯爵は夫人に接吻をした、すると、客はテーブルから起立して伯爵夫人を祝し、伯爵と、

その子供達とお互同士とがテーブル越しに、酒盃を打合はせた。再び給仕人が駈け廻り、椅子が床に軋り、そして前と同じ順序で、前よりも赤い顏をして、客達は客間や伯爵の書齋へと返つて行つた。

十八

骨牌テーブルが用意され、組々がボストンゲーム（カルタ遊びの一種）をやるやうに定められた。伯爵の客達は二ツの客間、喫烟室、圖書室へとそれ〴〵陣取つた。

伯爵は骨牌を扇形に廣げて持ちながら、習慣になつてゐる晩餐後の假睡をやつとのことで抑へながら、事々に笑つてゐた。若い人達は、伯爵夫人の發議で、クラビコオド（樂器の名）と竪琴との周圍に集つた。最初、ジユリイが一同に要請まれて、竪琴にヴアリエーション（一種の復唱）をつけて或る曲を彈いた。次に彼女は他の若い婦人達と一緒になつて、樂才があると認められてゐるナターシヤとニコライとに何か唄つて呉れと頼んだ。ナターシヤは皆から成人のやうに扱はれたので非常にそれが得意らしかつたが、同時に又、羞含みもした。

「何を唄ふの？」と、彼女は訊ねた。

「あの『泉』」と、ニコライは答へた。

「え、ぢや、急いでやりませうよ。バリースいらつしやいな、」と、ナターシヤは言つた。「だけど、ソーニヤは何處にゐるの？」と、あたりを見廻したが、自分の友達が部屋にゐないのが解ると、それを探がしに駈け出して行つ

た。

ソーニヤの部屋へ馳け込んだが、其所にも居ないので、ナターシヤは兒供部屋へと馳けて行つた。ソーニヤはそこにも居なかつた。

ナターシヤはソーニヤのゐるのは廊下の衣裳戸棚の上に違ひないと思つた。その廊下の衣裳戸棚といふのは、このラストフ家の若い女達がやつて來ては人知れず泣き泣きする場所であつた。思つた通り、ソーニヤはその戸棚の上でピンク色の紗の上衣を、年とつた乳母の汚れた縞の羽毛蒲團の上に壓しつけ、俯伏せに横はつてゐた。手で顏を隱して、歔欷り上げてゐた。その小さな露はな肩は波打つてゐた。終日嬉しさうに昂奮してゐた、いかにも誕生日らしいナターシヤの顏は俄に變つた、眼は据わり、太い頸は震へ、そして唇の兩端は歪んだ。

「ソーニヤ！　ねえ？……どうしたの？　あーあーあー！……」かう言つてナターシヤは、大きな口をあんぐり開き、ひどく醜い顏になつて、赤ん坊のやうにワアッと泣き出した。譯も解らず、たゞ、ソーニヤが泣いてゐるから泣いたのである。ソーニヤは頭を擡げやうとし、返事をしやうとしたが、出來なかつた。そして前よりも一層深く顏を埋めた。ナターシヤは、青い羽毛寢床の緣に坐り、友達を抱き締めながら泣いた。ソーニヤは、やうやうの事で起き上り、涙を拭きながら話し出した。

「ニコーレンカは一週間のうちに出發つのよ、あの方の……命令書が……來たの……自分で有仰つたわ……でも、わたし、それで泣く積りぢやなかつたのよ……」(ソーニヤは手に持つてゐた一枚の紙を示した、それにはニコライの詩が書かれてあつた。)「わたし、泣くんぢやなかつたわ。でも、あたたにだつて……誰にだつて解りやしないわ……なんて立派な心の方なんでせう。」

そして、復た、彼女はニコライの心がどんなに高尚であるかを思うて泣き崩れた。

「あなたは幸福だわ……私美みはしないわ……私あなたが好きなの、それからバリースも。」自分をいくらか落着かせて、彼女は言つた、「あの人はほんとに良い人ねえ……あなたの方は難かしい事はないことよ。だけど、ニコライは私の從兄でせう……大僧正のところへ直接に……でなければ、とても駄目だわ。で、もし、そんな事がお母様に知れたら、」(ソーニヤは伯爵夫人を自分の母親と頼依り、いつも母と呼んでゐた)「お母親は、私がニコライの出世の妨げをしてゐる、私には人情がない、恩知らずだと有仰るでせう、それでも本當は……神様に誓つて、」(ソーニヤは十字を切つた)「わたしお母様を大變に愛してゐるのよ、それから、あなた達みんな。たゞヴェーラだけはなぜでせうね？　わたしあの女に何をしたでせう？　わたし、あなた達の爲めならどんな物でも犧牲にしやうと思つてる程、あなた達を大切に思つてゐることよ、でも、わたし何にも持つてはゐないんですもの……」

ソーニヤはそれ以上言ふ事が出來なかつた。で、再び兩手で顏を蔽うて、羽毛寢床のなかへ突伏した。ナターシヤはそれを慰めやうとしたが、友達の心の悲しみが何んなに大きいか、よく了解してゐることは、その顏で知られた。

「ねえ、ソーニヤ。」と、從姉の悲しみの眞の原因を推察したとでもいふやうに、だしぬけに言つた、「きつと、晩餐の後でヴェーラが、あなたに何か言つたんでせう？　さう？」

「えゝ、この詩はニコライが自分で書いたんだわ、私は他のも寫したのよ、すると彼女が、それを私の机の上で發見けて、そしてお母様に示せると云ふの、私を恩知らずだとも云つたわ、それからお母様は、あの方が私と結婚することは許さない、あの方はきつとジュリイと結婚なさるつて言つたわ。あの方は今日は終日ジュリイの傍にばかりゐた

でせう……ねえ、ナターシャ！　何故でせうね？」

と言つて彼女は、復た一層痛ましく歔欷り上げた。ナターシャはソーニヤを起して、抱きしめ、そして涙の間からいつこりと笑ひながら慰め始めた。

「ソーニヤ、彼女の言ふ事なんか眞に受けるんぢやないことよ、ね、眞實にするんぢやないことよ。ニコライと談した事を覺えてゝ？　私達三人きりで、晩の食事の後で、あの喫烟室でね、覺えてゐて？　此の先何うすればいゝかすつかり決めたでせう。私は今、よくは覺えては居ないけど、あなた覺えてるでせう。何もかもが正しくそして何もかもが旨くゆく筈だつたわ。ね、シンシン叔父さんの弟は、自分の直接の從妹と結婚してゐるわ、私達の方は再徒兄妹なんでせう。バリースは、それはまるで何の雜作もなくやれるつて言つてたわ。ほら、わたしその事を全部話したでせう。あの人はほんとに怜悧な善い人ねえ、」と、ナターシャは言つた。……「泣かないで、ねえ、ソーニヤ、可愛い、大好きな、大切なソーニヤ、」と、笑ひながら接吻した。「ヴエーラは意地惡だわ、氣に懸けることないわ！　みんな好くなつてよ、それに彼女はお母樣に云ひ付けやしないわ。ニコーレンカは自身でお母樣にさう云ふでせうよ、それからあの人はジユリイの事なんか思つた事はありやしないことよ。」

かう言つて、ナターシャはソーニヤの頭に接吻した。ソーニヤは起き上つた。此子猫は再び元氣が好くなつた。その眼は輝き出し、今にも尾を振り、柔らかな前脚で跳びかゝり、本來の子猫らしい爲方で、玉に戯れ出しさうな樣子を見せた。

「あなたは左樣思ふの？　實際？　眞實に？」上衣と髪とを直しながら、ソーニヤは早口に言つた。

「え、實際、眞實によ、」と、友達の編髪からほつれてゐた荒らい一房の毛を直してやりながら、ナターシャは答へた

そして二人共笑つた。「さあ、一緒に行つて『泉』を唄ひませうよ。」

「行きませう、さあ、」

「で、あなたは、私の向ふ側に坐つてゐたあの肥つたピエールを知つてゝ？　お可笑な人よ。」とナターシャは立止つて、不意に言つた。「わたし、まつたく面白いわ。」かう言つて、彼女は廊下を立つて行つた。

上衣から羽毛屑を拂ひ落し、詩を胸衣の、小さい首と突き出た胸骨とのそばへ押し込んでソーニヤは顏を赤くし、輕い幸福な歩調で、ナターシャの後に隨いて休憩室へと廊下を走つて行つた。客達の所望で、若い人達は四部合唱『泉』を唄つた。それで誰も彼れも愉快になつた。それからニコライが、この頃覺えたばかりの歌を唄つた。

「月のやさしき光のもと、
秘かに己が心に囁きみむは、げに快きかな、
懐しき人今もなほ世にありて、
われをのみ憶ひ、われをのみ夢むと。
美しき指今宵も亦むかしのごとく、
黄金のハープを撥き鳴らし、
愛らしき、情熱の樂を奏でて、
己が身近にと我を呼び招く、
明日、やがてわがさひはひは近しと。

あゝ、されど、凡て皆過ぎ去りぬ！
彼の女今や世に在らず！」

ニコライがその最後の句を唄ひ終るか終らないうちに、若い人達は大廣間で舞踏をやり出す支度を初めた。で、樂人達は奏樂席で足踏みをし、咳拂ひし初めた。

ピエールは客間に坐つてゐた。シンシンが、外國から歸つたばかりの人には興味があらうと思うて、時事議を話してやつてゐたが、ピエールには少しも面白くなかつた。他に四五人の人がその談話に加つた。奏樂團が奏し出すと、ナターシャが客間へ入つてきて、ピエールの傍へツカ〳〵と進み寄り、顏を赤くして笑ひながら言つた。「お母樣が、あなたに踊つて頂けつて云ひました。」

「僕は皆の調子を狂はしさうで心配ですが、」と、ピエールは言つた。「だが、もし、あなたが私の先生になつて下さるんなら……」から言つて彼は相手と釣合ふやうにズツと腕を下げて、肥つた手を、細つそりした小さな娘に與へた。

踊手の組々が場所を定め、樂人達が調子を合はせてゐる間、ピエールは小さな自分の相手と並んで坐つてゐた。ナターシャはすつかり幸福になつてゐた。成人の人と、しかも外國から歸つて來たばかりの男と一緒に踊るのだといふので、誰の目にもつくやうな場所に坐つて、成人のやうに男と話してゐた。ナターシャは或る婦人が持つて居てくれると云つて預けた扇を手にしてゐた。そして恐ろしく氣取つた洒落れた態委をして（何處で、何時そんな事をおぼえたのか誰も知つてるものはない）自分を煽ぎながら、扇越しに笑みを湛へて、自分の踊相手と話してゐた。

「何といふ娘さんでせう！　まあご覽なさい、ご覽なさいよ！」と、老伯爵夫人は大廣間を横斷りながら、ナターシャを指差して言つた。ナターシャは赤くなつて笑つた。

「あら？　どうしてなの、お母樣？　何故お笑ひになるの？　何處がそんなにお可笑くつて？」

三番目のエコツセエズ（スコツトランド風の踊）の最中に、伯爵やマリヤ・ドミートリエウナやが加留多をしてゐた客間の方で、カタ〳〵と椅子を動かす音がした。そして他の重立つた客達や老人連の大部分は、長い間坐つてゐたので伸びをして、紙入や財布やをポケツトに納めて、大廣間の扉口へやつて來た。第一番にマリヤ・ドミートリエウナと伯爵とが、二人共晴やかな顏をして入つて來た。伯爵はバレエ舞踊の一種の踊子のやうな戯化た氣取つた容子でマリヤ・ドミートリエウナに、輪のやうに曲げた腕を與へてゐた。彼は伸び上つてゐた、その顏は一種特別な如才ない、若々しい微笑に輝いてゐた。そしてエコツセエズ最後の一節が終るや否や、奏樂席に向つて手を打ち鳴らし、第一ヴイオリンに叫びかけた。「おい、セミヨーン！『ダニエル・クウパア』を知つて居るかね？」

それは伯爵が若い時分に踊つたお氣に入りの舞踏であつた。（ダニエル・クウパアといふのはアングレエズ――英國風の踊――の一節であつた。）

「お父樣をご覽なさいよ！」と、ナターシャは部屋ぢゆうの人に叫んだ、（自分が成人の相手と踊つて居る事を全然忘れて）そして自分の捲髮の頭が殆んど膝に觸れるばかりに屈み込み屈み込みながら、廣間一杯に響き渡るやうな聲で笑ひ出した。事實、廣間にゐた人達は何れも、愉快なこの老紳士を面白さうな笑顏で見てゐた。彼は、自分よりは背

の高い、凛としたマリヤ・ドミートリエウナと並んで立ち、音樂の柏子に合はせて兩腕を環形に振り、肩を動かし、兩足を廻ほし、踵で輕く床を叩き、そして圓い顏にニタ〳〵した微笑みを擴げて行きながら、さあこれから始めますといふ容子を見物人に見せた。奏樂團が、輕快な國民的舞踏ツレパアカに何處か似たところのある、陽氣な、浮き立つやうなダニエル・クウパアを奏し始めると、大廣間に通ふ總ゆる扉口は、主人の浮かれてゐるのを見物にきた召使ひどもの——一方の側には男達、今一方の側には女達の——ニコ〳〵した顏で忽ち一杯になつた。

「まあ、家の可愛いお父樣だ！　あの方は鶯でゐらッしやる！」（鶯のやうに豪いの意）と、年老いた乳母が聲高かに言つた。

伯爵は上手に踊つた。それを自分でも知つてゐたが、彼の相手（マリヤ・ドミートリエウナ）はまるで踊ることが出來ず、それに善く踊らうなどと思つてもゐなかつた。彼女の肥滿した體軀は、遲しい腕をブラリと下げてスーッと立つてゐた。（合切袋は伯爵夫人に預けたのだ）踊つてゐたのは、彼女の身體中で、その嚴格な、しかも奇麗な顏だけであつた。伯爵がその圓々とした身體全體で現はした表情を、マリヤ・ドミートリエウナは段々輝いてゆく笑顏とヒク〳〵する鼻とで表はした。伯爵が益々秘術を盡して、しなやかな脚で人の思ひもよらない自在なビルウエット（趾頭で足をくる〳〵旋回する科）やケエパア（跳返へす科）やをやつて頻りに見物人をヤンヤと言はせてゐる間、マリヤ・ドミートリエウナは無雜作にちよい〳〵動かしたり、腕を環にしたりしながら、音樂に合はせて足で調子を取つて居るだけであつたが、それが、この婦人の肥大な身體つきと平常の嚴格な態度とに對照して尠からざる印象を人々に與へた。舞踏は次第に活氣づいて來た。他の踊手達は少しも見物人の注意を惹くことが出來なかつた、それに彼等はさうしやうともしなかつた。凡ての眼が伯爵とマリヤ・ドミートリエウナとの上に集められてゐた。ナターシヤは、自分の傍

にゐた皆の袖やガウンを引張り廻つて、自分の父を見るやうにと促してゐたが、人々はその注意を受けるまでもなく、この二人の踊手から眼を離さなかつた。舞踏の合間々々になると、伯爵はホッと息を吐き、手を振つて、音樂をもつと早くしろと叫んだ。だん〳〵速く、だん〳〵輕快に、今爪先で廻つてるかと思ふと、今度は踵で廻りながら、マリヤ・ドミートリエウナの周圍を踊りまはつた。最後に、踊り相手を元の位置へ向けて置いて、しなやかな脚を後方へ上げ、ぴつしより汗になつた頭、ニコ〳〵した顏を下げながら、喝采と笑聲——就中ナターシヤの笑聲が一番高い——の驟きの中に、右腕を大きく一廻轉させて最後の足取をした。踊手は二人とも重々しく息を吐きながら立ち止つて、麻のハンカチーフで顏を拭いた。

『私共の若かつた時分には、よくこんな風に踊つたものですよ、あなた。』と伯爵は言つた。

「（ダニエル・クウパア）萬歲！」と、マリヤ・ドミートリエウナは言つて、袖口をまくり上げ、深く息をした。

十九

かうしてラストフ家の舞踏室で、人々が第六番目のアングレエズを踊つてゐる時、元氣のなくなつた奏樂團が調子を亂し初め、疲れた召使達や料理人達が夜食の支度をしてゐる時、丁度同じ時刻に、ペズウホフ伯爵は六度目の發作に襲はれた。醫者達は、到底回復の望みはないと宣言した。病人は人事不省の間に贖罪式と聖餐とを受けた。臨終の塗油式を行ふ爲めにいろ〳〵な準備が行はれて、家の中はかう云ふ場合に何時もある混雜と不安とで一杯になつてゐ

た。屋外では、葬儀商共が門外に集つて、乘りつけて來る多くの馬車に氣附かれないやうに注意しながら、伯爵の葬式について何か善い注文を仰せ附からうと、熱心に待ちうけてゐた。副官をよこしては終始伯爵の容態を尋ねさせてゐたモスクワ總督は、このカザリン朝の權門、伯爵ベズウホフに最後の告別をする爲に、その晩自身でやつて來た。

そこの壯麗な應接室は人で一杯であつた。總督が、病人と二人つきりで半時間ばかりゐてから病室を出てくると、みんな恭々しく立ち上つた。人々の敬禮に對して、一寸會釋して、彼は、醫者、僧侶、親戚などの視線から出來るだけ早く逃れやうとした。最近の二三日頓に蒼白く痩せ細つたヲシーリイ公爵は總督を見送りに出て來て靜かな聲で何やら二三度繰返へして彼に言つた。

總督を送り出してから、ワシーリイ公爵は、唯一人廣間の椅子に凭つて、脚を高く組み重ね、膝に肱を突き、手で眼を蔽ふた。暫くの間さうしてゐた後、彼は立ち上つた。そして、平常より早い歩取りで、きよと〳〵した目をあたりに配りながら、長い廊下を横斷つて、一番年上の公爵令孃の部屋へと、家の奥の方へ行つた。

病室の隣りの、薄暗い灯のついてゐる客間に殘された人々は、途切れ〳〵な囁き聲で話し合ひ、やがて又靜まり、そして死にかゝつてゐる人のゐる部屋へ通ふ扉が、誰か出るか入るかして軋る度毎に氣遣はしげな、探るやうな眼でそつちを振り向いて見るのであつた。

「人間の壽命は、」と、何かの僧職にある、或る小造りの男が、自分の傍に坐つて自分の話を素直に聞いてゐた婦人に向つて言つた。「人の壽命は定つてゐるもので、その定り以上には決して出られるものではありません。」

「臨終の塗膏式がおそくなりはしないでせうかしら？」と、その婦人は相手を僧職の名で呼んで訊いた。そして、その事に就ては、自分は別に自分だけの說を持つてはゐないといふやうな風をした。

「それは大きな神秘なのです、」と、その僧侶は、少しばかり殘つてゐる半白の髪を丁寧に梳かしてある禿頭を、兩手で撫でながら答へた。

「さつきの方は誰方です？　あれが總督ですかね？」部屋の他の隅では、こんな事を尋ねてゐる人達があつた。「何で若く見える方なんでせう！」

「あれで、六十歲を越してるんです！……ねえ、伯爵はもう人の見分けがつかなくなつてゐらつしやるといふではありませんか？　臨終の塗膏式をするつもりなんでせうか？」

「私は、臨終の塗膏式を七度も受けた人を知つてゐます。」

二番目の公爵令孃が眼に涙をためて病室から出てきて、カザリンの肖像の下の所で、テーブルに肱を突いて溫雅な姿勢で坐つてゐるドクトル・ロルレエンの傍へ腰をおろした。

「大變結構なお天氣です、」と、醫者はフランス語で天氣の問ひに答へた。「大變結構なお天氣ですよ、お孃樣、それにモスクワにゐると、まるで田舍にでも居るやうですね。」

「ほんとに、さうでせうね、」と、公爵令孃は溜息しながら言つた。「何か飲む物をおあげしてもよろしいでせうか？」

ロルレエンは一寸の間考へた。

「藥はあがりましたね？」

「えゝ。」

醫者は自分の控帳を見た。

「お湯を一杯、それへ一摘み、」（華奢な指で一摘みがどれ程だかを示して）「酒石英をお入れなすつて。」

「之れまで無い事だ、」と、ドイツ人の醫者は副官に向つて滅茶なロシア語で言つた。「三度目の發作の後に回復するなんてことはね。」

「してみると、大變に强い體質の方に相違ない！」と、副官は言つて、「で、この大財産は誰のものになるんでせうね？」と、こそ〳〵と附け加へた。

「候補者が幾人か現はれるでせう、」と、獨逸人は微笑みながら答へた。

誰も彼れも再び扉口の方を振向いて見た。扉が軋つて、ロルレエンの指圖通りの飲料を調へた二番目の公爵令嬢が、それを病室へ持つて行つた。獨逸人の醫者はロルレエンの傍へ行つた。

「明朝まで保つでせうか？」と、ひどいフランス語で尋ねた。

ロルレエンは、唇をキツと結び、嚴格な顏附をし、否定の意味を示す爲めに鼻先きで指を動かした。

「今夜ですね、それよりは保たない、」と、彼は物靜かに言つた。そして、病人の容態を正確に診斷して、それを明言することの出來るといふ、得意な落着いた笑みを浮べて、出て行つた。

その間に、ワシーリイ公爵は公爵令嬢の部屋の扉を開けた。

部屋の中は薄暗かつた。ランプが二つ聖像の前にともつてゐるだけで、香と花の快い匂ひがしてゐた。部屋に儲へてあるものは何から何まで小形の道具ばかりであつた。小さな戸棚、小さな本箱、小さなテーブル。衝立の彼方には、高い羽毛蒲團の寢床の白い被褥が見えてゐた。一疋の小さな犬が吠え立てた。

「あゝ、あなたでしたの、mon cousin(從兄)？」

彼女は起ち上つて、髪の毛を撫でつけた。その髪の毛は、いつでも、——今でさへ——まるで頭と髪とが一つ塊から出來上つてゐて、ニスでも塗つてゐるかのやうに素晴らしく滑かであつた。

「何事か起りましたの？」と彼女は尋ねた。「わたし、もう心配で心配でなりませんわ。」

「いゝえ、何も變つたことはありません。私は少しばかりあなたにお話ししたい事があつて來たんです、カチーシ、」と、公爵は言つて、令嬢の立ちあがつたばかりの低い椅子に、さも疲れたやうに腰をおろして言つた。「でも、此所は何て暖かなんでせう、さあ、此所へお坐りなさい、お話ししませう。」

「何か起つたのかと思ひましたわ、」と、公爵令嬢は言つて、いつもの石のやうな嚴つい表情をして、公爵と差し向ひに坐つて、話しを聞く用意をした。「いくらか眠つて寢かうと思つてゐたんですけれどもねえ、駄目なんです。」

「ねえ、あなた、」と、ワシーリイ公爵は令嬢の手を取り、例の癖でそれを下の方へ曲げながら言つた。

この「ねえ、」が、言葉に出さずとも、互ひに解かり合つてゐる多くの事を指してゐるのは明かであつた。

不釣合ひに胴の長い、痩せた眞直ぐな姿勢の公爵令嬢は、突き出た灰色の眼に、少しの情味をも見せずに、まともに公爵を見た。それから彼女は、頭を振り、そして溜息しながら、聖畫の方を見た。その容子は、悲しみと献身の表情ともとられゝば、疲勞と速くのがれ度いといふ望みの表情ともとられるのであつた。ワシーリイ公爵は、それを疲れてゐるのだと、とつた。

「あなたより私の方が幾らか樂だとでも思つてゐるんですか？」と、公爵は言つた。「私は驛場馬のやうに疲れ果てゝゐるんです。でも私はあなたと是非少しばかりお話ししなければならないんです、カチーシ、それは極めて眞面目な事なんですよ。」

ワシーリー公爵は言ひ淀んだ。両方の頬が交る〳〵神經的にピク〳〵しだして、この人が何處の客間でも、そこにゐる間背て見せた事のないやうな不愉快な顔附をした。眼も平常とは違つてゐた。今不遜なふざけた樣子で見詰めるかと思へば、直ぐその次ぎにはコツ〳〵と四圍を見廻すのであつた。

公爵令嬢は痩せ、萎びた兩手で、膝へ犬を引上げて、ワシーリイ公爵の眼をヂット見詰めてゐた。併し、其儘朝まで默つて坐つてゐなければならなかつたとしても、公爵令嬢の方から口を切る氣遣ひのない事は明白であつた。

「ねえ、私の仲好しな從妹の公爵令嬢、カチエリーナ・セミョーノウナ、」と、ワシーリイ公爵は自分の言はうと思ふことを何とかして言つて了はうと噪つてゐるらしく、あとを言ひ續けた。「今のやうな、かういふ場合には、何もかもよく考へなければならない。將來の事や、あなたの事やを考へて置かなければなりません、……私はあなた方みんなを自分の子供のやうに心配してゐるんです。それは御承知でせうね。」

公爵令嬢は、前と同じやうな懶い、動かない眼で公爵を見た。

「最後には、私の家族の事をも考へなければならない、」と、公爵は彼女を見ずに、小さなテーブルを腹立たしげに突き遣つて、言ひ續けた。「ねえ、カチーシ、あなた方三人のマモントフ姉妹と私の妻と、――この四人がこの伯爵の直接の相續者なんです。こんな事を話しをしたり、考へたりすることは、あなた方には嘸ぞ辛いことでせう。それは分つてます。私にとつても同樣に辛いことです、併し、私はもう五十歳を越してゐるんですから、何んなことがあつても差し支へないやうにして置かなければなりません。私がピエールを呼びにやつた事、伯爵が、ピエールの肖像を指差して彼を呼んで呉れと言はれた事をあなたはご存知でせうね？」

ワシーリイ公爵は質すやうに公爵令嬢を見た。が、相手が果して自分の言つた事を考へてゐるのか、それとも唯何で

もなしに自分を見詰めてゐるだけなのか、判斷する事が出來なかつた。

「私は、唯この一つの事だけを始終神樣にお祈りしてゐますわ、」と公爵令嬢は答へた。「神樣があの方の上に憐みをお掛け下すつて、あの方の高尚な靈魂が天に昇ることのお出來になるやうに……」

「それは本當にさうです、」ワシーリイ公爵は、禿頭を撫で、そして、たつた今除けたばかりのテーブルを再び腹立たしげに自分の方へ引寄せながら、もどかしげに續けた。「しかし、實際……實際肝腎な點は、あなたもご承知の通り、去年の冬、伯爵が遺書を作つたことなんです。あれには、直接の相續人たる私達を捨て置いて、財產全部をピエールに讓るといふ事になつて居るんです。」

「伯父さまは、これまで、どんなに澤山遺書をお書きになつたか知れませんわ。」と、公爵令嬢は落着き拂つて言つた。

「でも、ピエールに讓るわけにはいかないんです。ピエールは庶子です。」

「ねえ、」とワシーリイ公爵は慌てゝ言つた。そしてテーブルを向ふへ押しやり、前よりも熱心に、更らに早口に話し出した。「だが、もし、書面が陛下に差上げてあつて、伯爵がピエールを正當の嗣子にするやうに請願して置かれたとしたら、如何です？　伯爵の勳功から見ると、その請願は伯爵の望み通り御裁可になるに相違ない、それは分つてお出でだらう……」

公爵令嬢は微笑んだ。それは話をしてゐる相手よりは自分の方が、もつとよく事情を知つてゐると信じてゐる人々のする微笑であつた。

「私は尙その上にかういふ事も知つてゐます、」と、公爵は彼女の手を握りながら續けた。「請願書はもう書かれて置いてある。だが、まだ差し出されてはゐない。そしてその事は陛下の上聞にも達してゐるのです。問題は唯だその請願

書が破棄されて了つたか、どうかと云ふ事なのです。若し破棄されてゐなければ、萬事型がつくと同時に、」と、その「萬事型がつく」と言ふ言葉の意味を充分相手にのみこませるために溜息をついた。「今に伯爵の書類が調べられる、請願書の添はつた遺書が陛下へ差上げられる、そして、その願ひの節が御裁可になる、ピエールは、正當な嗣子として何も彼も讓り渡されて了ふでせう。」

「だけれど私たちの分は？」と、公爵令嬢は、どんな事だつて起りかねないけれど、この事だけは、といふやうに、皮肉に微笑しながら言つた。

「だがねえ、カチーシ、それは白晝のやうに明らかなことです。さうなればあの男が財産全部に對する唯一の相續者になつて、あなた方は之れだけも貰へないでせうよ、ね。だから、ねえ、あなたは、遺書と請願書が書かれてあるか何うか、それを知らなくちやならぬ筈です。それから、もしそれを皆が何うかして忘れてゞもゐるものとすれば、あなたはその在所を知つて、見つけ出さなければなりませんよ、何故と云ふに……」

「それは餘りですわ！」と、公爵令嬢は苦々しさに微笑みながら、眼の表情を少しも變へずに彼を遮つた。「私は女です、それであなたは私たちをみんな馬鹿だと思つてゐらつしやるんです、ですが、私だつて庶子が財産相續の出來ない位な事は充分に知つて居ますよ、……Un bâtard(私生兒が、)」と、言ひ足した。彼女は此讃譽(佛語)によつて、公爵の說の取るに足らない事を十分に證明するつもりであつたのだ。

「何うしてこれがあなたに解らないのかねえ、カチーシ、ほんとに。あなたは大變よく物の解る人なんぢやありませか。もし、伯爵が陛下に書面を差上げて、ピエールを自分の正當な嗣子として認めて下さい、と請願したならば、その時はピエールは最早やピエールではなくなつて、伯爵ベズウホフになるでせう。さうなれば彼はその遺書に基いて

一切の物を讓り渡される、といふ事が何うしてあなたには解らないのでせう？それで、もし遺書とその書面とが破棄されてゐないとすれば、その場合にはあなたは、從順であつたと云ふことゝ、そのことから生ずる一切の慰藉以外に、は何一つ遺されはしませんよ。これは間違ひのないことです。」

「遺書の書かれた事は知つてゐます、ですが、私はそれが何の役にも立たないことをも知つてゐます。あなたは私をすつかり馬鹿者扱ひにしてゐらつしやるやうね、」と、公爵令嬢は言つた。何か氣の利いた、抉るやうなことを言つてゐる積りでゐる時に女がよく見せるやうな容子をして。

「ねえ、あなた、カチエリーナ・セミョーノウナ、」と、ワシーリイ公爵は急き込んで言ひ始めた、「私はあなたを怒らせる爲めに此所へやつて來たのではない。私はあなたを親身の者、善良な、親切な心の、眞實の親身の者と思つて、あなた自身の利害に就いて話しをしに來たのですよ。もうこれで十遍も云ふ事だが、ピエールの爲めに書いた陛下への請願書と遺書が、若し伯爵の書類の中にある場合には、あなたも、あなたの妹さん達も相續人ではありませんよ。もし私の云ふ事が信じられないなら、物事をわきまへてゐる人のいふ事を信用なさい、私はつひ今しがたドミートリイ・オスフリーチ(これはこの家の雇辯護士であつた)にその話しをしてきたが、あの男も私と同じ事を言つてゐましたよ。」

公爵令嬢の考へに、何か不意に變化が生じたやうであつた。薄い唇は白くなつた。(眼は變らなかつた)そして何か云ひ出すと、その聲は、自分でも思ひがけないやうな烈しい調子に變つた。

「結構ぢやありませんか、」と、公爵令嬢は言つた。「私は何にも欲しがつてはゐなつかたんですし、今だつて何にも欲しくはないんですもの。」と、彼女は犬を膝から投げおろして、スカートの襞を直した。

「彼の人の爲めに何もかも犧牲にした人達が、あの人から酬いられる返禮や感謝はそんなものです。」と、彼女は言つ

た。「ほんとに結構ですわ！　立派ですわ！　私は何にも欲しいとは思ひません、公爵。」

「え、ですが、あなたはお一人ではない、お妹さん達がおありです、」と、ワシーリイ公爵は答へた。しかし、公爵令嬢はそれには耳もかさなかつた。

「さうです、私はズウツと前から知つてゐたんです。でも、そんな事は忘れてゐましたわ、こゝの家ぢや、卑劣、虚偽、嫉み、たくらみの外、當になるものは何もないといふ事を、恩知らず、眞黒な恩知らずの外には……」

「その遺書のある所をご存じですか、それともご存じないんですか？」と、公爵は前よりも一層烈しく兩頰を痙攣せながら尋ねた。

「ほんとに、私は馬鹿だつたのですわ。私はやつぱり人を信じてゐて、その人たちを愛して、自分自身を犠牲にしました。併し、いつも成功するのは、卑劣な奸惡な人たちばかりです。これが誰の陰謀だか私は知つてゐる。」

公爵令嬢は立ち上らうとした、が、公爵はその手を抑へた。公爵令嬢は全體の人間と云ふものに對して急に信仰を失つて了つた人のやうな顔付になつた。彼女は毒々しく相手を眺めた。

「まだ間に合ひますよ、ねえ。カチーシ、これは、みんな立腹した際や氣分の惡かつた時に、前後の考へもなく決められた事で、その後忘られて了つてゐたんだと云ふ事を覺えてお出でなさい。ねえ、私達の義務は、伯爵の間違を匡正し、そんな不公平な事をさせないやうにしてあの人の臨終を安らかにし、人々を不幸に陷れたといふ後悔無しに死なせてやることです……。」

「あの方の爲めにあらゆる物を犠牲にした人々をね。」と、公爵令嬢は、彼の言葉を遮つた。そして再び突と立ち上らうとした。が、公爵がさうはさせなかつた。「あの方は犠牲の有難さを知らなかつたのですね。何にもなりやしません。」

と、彼女は溜息をして附け足した、「私はよく憶えて置きますわ、この世の中では應報を當てにする事は出來ない、この世の世の中には廉恥も無ければ、正義も無いと云ふ事をね。この世の中では狡猾で奸惡でなくちゃいけないのです。」

「さあ、ねえ、落着きなさいよ、あなたの心の高潔な事はよく解つてゐます。」

「いゝえ、私の心は邪です。」

「あなたの心持ちは解つてゐます、」と、公爵は繰返へして、「そして私はあなたが親密にしてくれるのを嬉しく思つてゐるのです。だから、私はあなたが私と同意見を持つてくれるやうにと願ふのです。心を落着けて、時間のあるうちに——まだ二十四時間あるかも知れないし、或は一時間しか無いかも知れないが、——折目のついた事を話さうぢやありませんか。遺書の事であなたの知つてゐることを全部私に話して下さい、それに最も大切なことは、それが何處にあるかといふ事です。あなたは、それを探さなくては可けません。私達は今直ぐにそれを持つて行つて伯爵に見せなければなりません。伯爵は遺書の事なんか忘れちやつてゐるに相違ないのです。左樣すれは伯爵はきつと破棄するでせうから。私の唯一の願ひは伯爵の意志を神聖に遂げさしてあげたいと云ふ事なのです。それはあなたにも分つてゐるでせう。私が此處へ來たのもその爲めですよ。私が此所に來てゐるのは、伯爵の利益、あなたの利益になるやうにと思ふからばかりなんです。」

「それで、すつかり解りました。誰の策略なんだか私はわかつてゐます。私は知つてゐます、」と、公爵令嬢は言ひ初めた。

「そんなことは何うでも宜いぢやありませんか、ねえ。」

「それはみんな、あなたのprotégée(被保護者)、あなたの大事な公爵夫人アンナ・ミハイロウナの業なんだわ、あんな

女、私なら女中にだつて使つてやる氣はないわ、ほんとに厭な奴！」

「そんな事を云つてる場合ぢやありませんよ。」と、公爵はフランス語で言つた。

「あゝ、私に何も云はないで下さい！　去年の冬、あの女が此家へ乘り込んで來て、私達全體を、それはひどく口汚く伯爵に告げ口したわ、特にソフイの事を――お話しにも何にもならない程――その爲めに伯爵は氣持ちを惡くなすつて、二週間ばかり私達に逢はうともなさらなかつたわ。その時分だつたのです、私は知つてゐます、伯爵があの憎らしい不名譽な遺書をお書きになつたのは。しかし、私、それは何の役にも立たないものだと思つてゐたんです。」

「問題はそれです。なぜ、あなたはその事をもつと前に話さなかつたのです？」

「伯爵が何時も枕の下に入れて置く象嵌のある書類挾みの中にあるんです。今初めて私は解つた。」と、問には答へず

に、公爵令孃は言つた。「さう、もしも私が、自分の靈魂に何か罪があるとすれば、その一番大きな罪は私があの破廉恥な女に對して持つてゐる憎惡です。」と、公爵令孃は血相を變へて叫び出さんばかりに言つた。「そして、あの女が何故こゝへ推しかけて來たのか。私は自分の思つてる事をすつかりあの女に言つてやります。見てゐるがいゝ！」

二十

かうした種々な會話が客間や公爵令孃の部屋で取交はされてゐる間に、ピエール（使ひをよこされた）とアンナ・ミハイロウナ（ピエールと一緒に當然行くべきだと考へたことを乘せた馬車が、ペズウホフ伯爵邸の庭へのりつけられた。

馬車の轍が窓々の下に撒き散らされた藁の上を音もなく軌る時、アンナ・ミハイロウナは、慰めの言葉をかけながら同伴者の方へ振り向いたが、見ると、馬車の隅の方で睡入つてゐたので、呼び起した。ピエールは目を覺してアンナ・ミハイロウナの後について馬車を下りた。そこで初めて、自分を待つてゐる危篤の父に會ひに行くのだといふことが思はれ出した。彼は、自分達が、正面の入口へ乘附けたのではなくて、裏の入口へやつて來てゐるのに氣がついた。馬車の踏み段を下りた時、商人體の服裝をした男が二人、入口から壁の蔭へ慌てゝ跳び退いた。ピエールは、立つて待つてゐる間に、同じやうな男が他にも幾人か兩側の家の蔭に立つてゐるのに氣が付いた。が、アンナ・ミハイロウナも從僕も馭者も、それを見たに相違ないのだが、別に何とも思つてゐない容子であつた。それならそれで何の差支もないのだと定めて、ピエールはアンナ・ミハイロウナに隨いて行つた。アンナ・ミハイロウナは、遲れ勝ちなピエールを急き立てながら、薄暗い狹い石の階段を急ぎ足で上つて行つた、ピエールは自分が何故伯爵の處へ行かなければならないのかといふ理由を知らなかつた。それに又何故自分達が裏の階段から行かなければならないのかといふ理由に至つては更に一層譯が解らなかつた、が、アンナ・ミハイロウナの萬事心得たやうな急き込んだ容子に勵まされて、さうするのが確かに自分に必要なことであると獨りで定めてしまつた。階段を半分程のぼつたところで、二人は、大きな長靴を音高く踏鳴らしながら、てん〳〵に水桶を持つて駈け降りて來た二三人の男に、すんでの事で突き落されるところであつた。その人達は、ピエールとアンナ・ミハイロウナとを通らせる爲めにピタリと壁に寄り添つた。が、二人を見ても少しも、びつくりした容子は見せなかつた。

「此方は公爵令孃のお部屋のある方ですか？」と、アンナ・ミハイロウナは、その内の一人に尋ねた。

「はい、さうです、」と、從僕は、こんな時には何んな事をしても構はないといふやうに、無遠慮に、大聲で答へた。

「左の扉ですよ、奥様、」

「事によると、伯爵が僕を呼び寄せたのではないのかも知れない、」と、ピエールは、階段を昇り切つた時言つた、「僕は自分の部屋へ歸つた方が宜いでせうよ。」

アンナ・ミハイロウナは立止つて、ピエールが自分に追ひ付くのを待ち合はせた。

「あゝ、もし、」と彼女は、その朝自分の息子にしたと丁度同じ格好で、ピエールの腕に手を置いて言つた。「よどざんすか、私はあなたに劣らず氣を揉んでゐるんですよ。固りしてゐて下さい。」

「ほんとうに、僕は自分の部屋へ行く方が宜くはないんですか？」と、ピエールは彼女を眼鏡越しに見ながら、やさしく尋ねた。

「あゝ、もし、これまで、あなたが受けた酷いあつかひなどは忘れてお了ひなさい、伯爵があなたの父様だといふ事をお思ひなさい、そして事によると、もう臨終の苦しみをなすつて被居るかも知れません……」と、彼女は溜息を吐いた。「私は最初からあなたを自分の子供のやうに可愛く思つてゐたんですよ。私に委せてお置きなさい、ピエール。私はあなたの利益を忘れはしませんよ。」

ピエールは何の事だか少しも分らなかつた。が、總てかうした事は當然かうあるべきものなのだ、と云ふ感じが、前よりも又一層强くなつた。で、もう扉をあけてゐるアンナ・ミハイロウナに柔和しく隨いて行つた。扉は裏階段の控室に通うてゐた。その隅の所に、公爵令孃の老僕が靴足袋を編んでゐた。ピエールは此家のこちらの方へは來たこともなければ、こんな部屋々々のある事など夢にも知らなかつた。酒瓶を載せた盆を持つた女中が一人、二人に追ひ付くと、アンナ・ミハイロウナは（その女に「ねえ」だの、「好い嬢さん」だのと言つて）公爵令孃たちの安否を尋ねてから、

石床の廊下を、ピエールを引張つて進んで行つた。左手にある最初の扉は、廊下から公爵令孃たちの居間へ通つて居た。瓶を持つたその女中は取り急いでゐたので（その時は、この家では萬事が大急ぎでなされてゐるやうであつた）後を閉めなかつた。ピエールとアンナ・ミハイロウナとは通りすがりに我れにもなく、ちらりとその部屋の中を見た、と、そこでは公爵令孃とワシーリイ公爵とがぴつたり寄り添うて何か話し合つてゐた。二人の通る姿を認めると直ぐ、ワシーリイ公爵は性急な身振りで體をそらした。公爵令孃は跳びあがつて、絶望したやうな手付で精一杯な力を出して叩きつけるやうに扉を閉めた。その擧動は令孃の平素の沈着にひどく似つかはしくなかつたし、ワシーリイ公爵の顏に表はれてゐたぎよつとした容子も彼の勿體振つた所とひどく不釣合だつたので、ピエールは立止まつて、不審さうに、案内者のアンナ・ミハイロウナを眼鏡越しに眺めた。アンナ・ミハイロウナは、少しもびつくりした容子は見せなかつた。何もかも豫期してゐたところだと知らせやうとするかのやうに、一寸微笑んで、溜息をしただけであつた。

「しつかりして居て下さいよ、ねえ、私はあなたの利益を思うてゐるんです。」アンナ・ミハイロウナは、ピエールの不審さうな顏付にかう答へた、そして前より一層足早やに廊下を進んで行つた。

ピエールには、何ういふ事態なのか少しも解らなかつた。そして、自分の利益を思つてくれてゐるといふのは何ういふ意味なのか、その譯が解らなかつた。併し、とにかく一切の事がさうなくてはならないのだと思つた。二人は廊下を通つて、伯爵の應接室に續いてゐる薄暗い廣間へ入つて行つた。これはピエールのよく知つてゐる、客用の階段からの通路になつてゐる、寒い、立派な裝飾の施してある部屋であつた。が、この部屋さへ、床の眞中に空つぽな浴槽が置かれてあつて、水が敷物の上にこぼれてゐた。二人は此所で、一人の家僕と、それから香爐を持つた一人の僧とが爪先きで歩るいて來るのに出會つた、だが、先方は二人には目もくれなかつた。二人は冬向きの庭園に面してゐる

應接間へ入つて行つた。其處はピエールのよく知つてゐる部屋で、伊太利風の窓が二つあり、カザリン女王の大きな胸像と等身畫とが掛かれてあつた。その應接室では、さつきと同じ人達がさつきと同じ位置に坐つて囁き合つてゐた。一同はひたと會話を止めて、涙染みた蒼白い顏をして入つて行つたアンナ・ミハイロウナと、頭を垂れてその後から柔順しく隨いて行つたピエールの大きい肥つた姿とを、振り向いて見た。

アンナ・ミハイロウナの顏付には、大切な時が來たと云ふ自覺の色が讀まれた。如何にも世馴れたペテルブルグ婦人らしい樣子をして、ピエールを自分の傍に連れて、今朝より一層大膽に部屋の中へ入つて行つた。自分は今、死に瀕してゐる人が會ひたがつてゐる人間を伴れて行くのだから、自分が迎へられるのは確かであると彼女は感じてゐた。ちらと一目見ただけで、部屋中の人々を悉く觀察しつくし、伯爵の宗教上の顧問(司祭)のゐるのがわかると、ちやんと、お辭儀はしなかつたが、急に身丈が縮まつたといふやうな態をして、その傍へチョコ〳〵と歩み寄つた。そして信心深い態度で、先づ一人の僧からの祝福を受け、それから、今一人の僧からの祝福を受けた。

「神樣のおかけで、間に合ひました、」と、司祭に言つた。「私共、親族一同は非常に心配して居ました。この若い人は伯爵の息子さんです、」と、やゝ聲を低めて言ひ添へた。「恐ろしい時になりました。」

さう言つて、彼女は醫者の傍へ近寄つて行つた。

「Cher docteur, ce jeune homme est le fils du Comte. y-a-t-il de l'espoir ? (ねえ、先生、この若い人は伯爵の息子さんです。まだ望みはありますでせうか?)」と醫者に言つた。

醫者は物を言はず、たゞ不意に肩を搖すつて、眼を上へ外らすばかりであつた。それとちつとも違はない樣子で、アンナ・ミハイロウナも肩と眼とを動かし、兩方の眼瞼を閉ぢんばかりにし、溜息をついて、そして醫者のところから

ピエールの方へ行つた。彼女は特に丁重に思ひやりのある沈んだ調子で、ピエールに言ひかけた。

「神樣のお慈悲にお頼りなさいよ、」と言つて、そして、坐つて待つてゐるやうにと長椅子を指し示して置いて、自分は足音を忍ばせて人々の注視してゐた扉口へ行き、殆んど音をさせずに扉を開けて、その向ふへ消えて了つた。

何事にも指揮者であるアンナ・ミハイロウナの云ふなりにしやうと決め込んで、ピエールは、指し示めされた長椅子の方へとあるいて行つた。彼は、アンナ・ミハイロウナが居なくなると同時に、部屋中の人々の眼が一齊に、好奇心と、か同情とかいふもの以上の何物かを含んだ眼付で、自分の上に据ゑられてゐるのに氣が付いた。人々が畏懼とも、卑屈とさへも思はれるやうな樣子で自分の方を眺めながら囁き合つてゐるのに氣が付いた。彼等は、彼に對してこれまでに一度も見せた事のないやうな敬意を表した。司祭と何か話してゐたピエールの見知らない一人の婦人が、起ち上つて席を彼に讓つた。ある副官は、ピエールが落した手袋を拾つてくれた。醫者たちは、その傍を彼が通る時、謹しみぶかく會話を止めて、路を讓る爲めに、脇へよつた。最初、ピエールはその婦人を煩らはさないやうに、どこか他の處へ腰掛けやうと思つた。自分自身で手袋を拾ひ、實際少しも通行の邪魔にはなつてゐない醫者達の所をも避けて通るつもりであつた。ところが、彼は不意に、さうするのは穩當でないやうに感じた。自分はその夜、みんなから待ち設けられてゐる或る恐ろしい儀式を果さなくてはならない人間である事を思ひ、それだから自分は、誰から何んな事をして貰つても構はないのだと云ふやうな氣がした。それで彼は、副官から手袋を貰つて受取り、その婦人の席に腰を下ろし、膝の上に肥つた兩手を置き、エジプト塑像のやうな素直なキチンとした姿勢で坐つてゐた。そして心の裡では、もう何でもかんでも、こんな風にしてゐなければならないのだ、頭の調子が狂つて何か飛んでもない事を仕出かさないやうにするには、その夜だけは自分自身の思慮で行らないで、萬事自分を指導してくれる人達の思ひ通

りになつてゐなくてはならぬ、と覺悟を定めてゐた。

二分と經たぬうちに、ワシーリイ公爵は、勳章を三つ附けた上衣を着け、頭を高くあげて、いかめしく部屋へ這入つて來た。彼は今朝よりも、痩せたやうに見えた。部屋の中をチラリと見廻し、そしてピエールを見付け出した時の彼の眼は平常よりも大きいやうに思はれた。ピエールのそばへ行つてその手を執り、(これまでは一度もそんな事はなかつた)そして、相手の力を試めしでもしやうとするかのやうに、それを下の方へ引張つた。

「固りしてゐ給へ、固りしてゐ給へ、ねえ、君。伯爵は君に會ひたいと言はれた、それは結構な事だ……」なほ言ひ續けやうとした、が、ピエールは、かう尋ねるのが當然だと思つて、それを遮つた。「御容體は？……」そして彼は躊躇つた。今臨終にあるその人を「伯爵」と呼んでいゝものか何うか解らなかつた。かと云つて「父」と呼ぶのは氣耻かしく感じられた。

「半時間前に又一度打擊が來たんだよ。しつかりしてゐ給へ、ねえ、君。」

ピエールは頭がひどく混亂してゐたので、その打擊といふ言葉を聞くと、重い物體で打つといふやうなことを想像した。彼は思ひ惑ふやうにワシーリイ公爵を眺めたが、暫くして漸く、打擊と云つたのは病氣の發作の事だといふ事が解つた。ワシーリイ公爵は通りすがりにロルレエンに二言三言云つて、そして爪先立つて扉口へ行つた。彼は、爪先立つてはうまく歩くことが出來なかつたので、無態に身體全體を上下にピク〳〵させた。それに續いて、一番年上の公爵令孃、それから聽悔僧や其他の僧たちが、行つた。二三人の家僕もその扉口を這入つて行つた。その扉越しに、裡の混雜が聞きとられた。やがて、アンナ・ミハイロウナが、自分の爲なければならない事を成し遂げようといふ、矢張り蒼ざめてはゐたが斷乎とした顏付をして、駈け出して來てピエールの腕に觸りながら言つた。

「La bonté divine est inepuisable. Cést la Ceremonie de l'extreme onction qui va commencer. venez (天のお惠みは無限でございます。今臨終の塗膏式を始める所なんですよ。さあ、いらつしやい)」

ピエールは柔らかな絨氈を踏んで這入つて行つた、すると例の副官や見知らない婦人や三四人の家僕達までがみんな今はその部屋へ這入るのに、許可を得る必要はないと云つたやうに、自分に續いて這入つて來るのに氣が付いた。

二十一

ピエールは、その宏大な部屋をよく知つてゐた、それは幾つかの圓柱と一ツのアーチで區劃され、ペルシヤ絨氈で敷きつめられてあつた。部屋の、圓柱の後の部分には、一方の側に絹の帷のある桃花心木製の高い寢臺が置いてあり、も一方の側には、聖像を納めた大きな龕があつたが、そのあたりは、教會堂で夕べの新禱をする時のやうに、キラキラと輝かしく照らされてゐた。その龕の燦爛たる裝飾の下には、病人用の長い椅子があつた。その椅子の上に、雪のやうに白い、皺のない、新らしい取り變へられた許りの枕をして、派手な綠色の蒲團を腰までかけて、彼の父ベズウホフ伯爵は横倒つてゐた。廣い額には獅子の鬣のやうな白髮の房があり、奇麗な赤黃色い顏には、飽くまでも貴族的な深い皺が刻まれてゐた。彼は丁度聖畫の直下に寢てゐた。大きな肥つた兩腕は、夜具の上に置かれてあつた。掌を下向にしたその右の手には、拇指と人差指との間に一本の蠟燭が挾まれてあり、一人の老僕がその椅子に被ひかぶさるやうにして夫れを支へてゐた。椅子の周圍には、僧侶達が、ピカ〳〵する法衣をつけ、その上へ長い髮を垂ら

して、立つてゐた。彼等は手に手に、點した蠟燭を持つて徐々と嚴かに儀式を行つてゐた。その少し後方に、若い方の二人の公爵令孃が眼にハンカチーフを當てゝ立つて居り、その前に一番年上の公爵令孃カチーシが立つてゐた。彼女は聖像から少しも目を離さないで、邪險なキツトした樣子をして立つてゐた。もし自分が傍目をするやうなことがあつても、それは自分の知つたことぢやない、と一同に申し渡してゞもゐるかのやうであつた。アンナ・ミハイロウナは何所となし悲しさうな、何事をも許すやうな顏付をして、例の見知らない婦人と並んで扉口のところに立つてゐた。ワシーリイ公爵は、その扉口の別な方の側に、病人の椅子の傍近く立つてゐた。彼は、彫刻のしてある天鵞絨の椅子を自分の方へ引寄せ、蠟燭を持つてゐる左の手をその背に凭せて、顏へ指を付ける度に眼を上の方へ向けながら、右の手で十字を切つてゐた。彼の顏は、物靜かな信心と、神の意志に對する服從の情を表はしてゐた。「もし、あなた方が、かういふ感情が解らないといふのなら、夫れだけ、あなた方の利益にならないのだ、」と、彼の顏が言つてゐるやうに見えた。

ワシーリイ公爵の背後には、副官と、醫者達と、從僕達が立ち並んでゐた。こんなふうに男女は、恰も教會に於けると同じやうに、別々に分れて列んだ。一同默つて十字を切つてゐた。經文を讀む聲、抑へつけたやうな底聲きのする低音の唄の外、何の音もなかつた。たゞ沈默の合間々々に、人々の吐く溜息と輕く動かす足の音とが聞えるばかりであつた。自分は何をするのか、それは心得てゐる、と云ふことを他人に知らせるやうな、心ありげな、顏附きをしてアンナ・ミハイロウナは部屋を横切つて眞直ぐにピエールのところへ行つて、彼に一本の蠟燭を與へた。彼はそれに火を點した、そして周圍の人達を見廻はすのに氣を取られ、遂ひウツカリして、蠟燭を持つた手で十字を切つた。黑子のある、薔薇色の顏の、笑ひ好きな、一番年下の公爵令孃ソフイは、ピエールを眺めてゐた。彼はニツと笑つて、ハンカ

チーフで顏を隱した、そして長いことその儘にしてゐた。が、再びピエールを見て、再び笑ひ出した。彼女はピエールを見ると笑はずにはゐられないくせに、矢張り見ないではゐられないらしかつた。で、その誘惑から逃れる爲めに、ソツと圓柱の蔭に身を寄せた。儀式の最中に、牧師達の聲が不意に止んだ、そして彼等は互ひに何やら囁き合つた。伯爵の手を支へてゐた老僕は、立ち上つて婦人達の方へ振り向いた。アンナ・ミハイロウナは前へ進み寄り、病人の上へ屈みこみながら、自分の背後へ手をまはして醫者のロルレエンを麾いた。このフランス人の醫者は、蠟燭を持たずに圓柱に倚りかゝつてゐたが、如何にも外國人らしい愼み深い態度をしてゐた。宗教が異ふに拘はらず、その儀式の嚴肅な意味をすつかり了解してゐる上に、それに贊同さへしてゐる事を示してゐた。彼は、屈强な男の、足音のしない歩み方で、病人の傍へ歩いて行つた。しなやかな、白い指で、病人の何も持つてゐない方の手を蒲團から取り上げ、傍を向いて、一心に脈搏を診はじめた。病人には何か水藥が與へられた。病人の周圍は少しばかりざわ〳〵としたが、やがて一同は各々の席に復つた。劇行が續けられた。この儀式の切れの間に、ワシーリイ公爵が椅子の背から離れて、(自分は自分の爲る事を充分わきまへてゐる、もし他の人達にそれが解らないなら、それだけ其人達の利益にならないのだ)と云ふやうな前と同じ顏付をして、病人の所へは行かないで、その側を通りぬけて、一番年上の公爵令孃と一緒になつたのにピエールは氣が付いた。それから、二人は一緒に、部屋のずうつと隅の、絹の天蓋の下にある高い寢臺のところへ行つた。やがて又その寢臺のところを離れたと思ふと、公爵も公爵令孃も共に、その向ふの扉口を通つて姿を隱してしまつた、が、儀式の終らないうちに、二人は前後して、各々の席へ戻つて來た。ピエールは、かうしたり出來事にも他の事同樣に何等の注意を拂はなかつた。その晩の出來事は何も彼も一切、何うしても然うなければならないことなのだ、と、キツパリ腹をきめてゐたからである。

讃美歌の響が止むと、この神秘な式を受け了つた事を病人に向つて祝する首座僧の聲が聞えた。臨終の人は、前と同じやうに、生命のないものゝやうに少しも動かず臥横つてゐた。みんなその周圍を動いてゐた。足音と囁き聲とが、がや〳〵してゐたが、アンナ・ミハイロウナの囁聲が一際高く聞えてゐた。

ピエールは、アンナ・ミハイロウナが、「無論あの人を寢床へ移してあげなければ可けません。此處ではどうすることも出來ません……」と言つて居るのを聞いた。

病人は、醫者達や公僧令嬢や從僕達にすつかり取り圍まれてゐたので、ピエールはよし他の人達にも注目してゐたにしろ、儀式の間ちつと片時も目を離さなかつた白髮の鬣のある赤黄色い顏を、もう二度と見る事が出來なかつた。ピエールは、椅子の周圍の人達の用心深い擧動から、彼等が瀕死の人を抱き起こして、それを他所へ移さうとしてゐるところだといふ事を推察した。

「私の腕につかまりなさい、そんな事をしちや、落してしまひますよ、」と、一人の從僕が、ぴつ〳〵りしたやうに囁くのをピエールは聞いた。「もつと下へ……もう一人此方へ、」といふ聲がした。そして人々の苦しさうな息使ひと急ぎ足の樣子とで見ると、彼等の運んでゆく荷物が彼等には重過ぎるといふやうに思はれた。

人々が――アンナ・ミハイロウナもその中にゐた――自分の傍を通つて行く時、ピエールは、その背や、頸越しに、病人の筋骨逞しい露はな胸や、白髮の渦卷いてゐる獅子のやうな頭や、腋の下から支へられてゐるので、高くあがつてゐる頑丈な肩やを瞥見することが出來た。素晴らしく廣い額と頰骨、肉感的な美しい口、傲然とした冷やかな眼を備へてゐる彼の顏面は、死が近づいてゐるにも拘はらず、醜くはなつてゐなかつた。それは、ピエールが、今から三ケ月前、ペテルブルグへ遣られた時に見たのと、そつくり同じであつた。併し、その頭は、擔ぎ手達のチョカ〳〵

した歩調につれて、頷りなげに搖れた、そして、生氣のない無感覺な兩眼は何を見てゐるといふ事もなかつた。

暫時の間、高い寢床の周圍はザワ〳〵してゐた、が、やがて、伯爵を運んで行つた人達はチリ〴〵になつた。アンナ・ミハイロウナはピエールの腕に手を觸れて、「Venez(いらつしやい)。」と言つた。

アンナ・ミハイロウナと一緒にピエールは寢床に近づいて行つた。病人は、つひ今しがた終つたばかりの神聖な儀式に相應しい嚴かな姿勢で、そこに横たへられてあつた。頭は高く枕に支へられ、手は掌を下向きに容良く揃へて綠色の絹布の蒲團の上に置かれてゐた。ピエールが傍へ行つた時、伯爵は眞向に彼を見詰めた、が、その眼の意味は誰にも解き難いものであつた。その眼は、何事をも物語らず、唯單に眼である以上何か見てゐなければならないといふだけで見てゐたのか、それとも又言はうとすることが餘り多くて言へないのか、何方かであつた。ピエールは、何うして宜いのか解らなかつたので、突立つたまゝ、問ひかけるやうな顏付をして自分の指揮者を眺めた。アンナ・ミハイロウナは病人の手を指差し、自分の唇で、その手へ接吻する眞似をしながら、ピエールにチラリと大急ぎで目眴せをした。ピエールは指揮された通りにした。蒲團に觸らぬやうに、よく氣を注けて頸を延ばして、骨太の逞ましい手に接吻した。その手には極めて幽かな微動もなく、顏の筋一つ動かなかつた。ピエールは次ぎに爲すべき事を敎へて貰らはうと、復も問ひかけるやうな顏付きをしてアンナ・ミハイロウナを見た。アンナ・ミハイロウナは、寢床の傍にあつた肱掛椅子の方をチラリと見た。ピエールは言ひつけられた通り柔順に其所へ行つて腰を下ろしたが、その眼は矢張り、それで宜かつたかどうかを尋ねてゐた。アンナ・ミハイロウナは、それで宜いと云ふやうに點頭いた。ピエールは、自分の馬鹿げて大きな圖體があまりに澤山場所を塞げ過ぎるのを氣にして、成るべく小さくならうと一生懸命になつて、再びエジプト塑像のやうに素直な、均整した姿勢になりすました。彼は伯爵を見た。伯爵は今も矢張り、ピエールが

立つてゐた時ピエールの顔のあつた、その場所を見詰めてゐた。アンナ・ミハイロウナの容子は、父と子のこの最後の對面の悲痛な嚴肅な心持ちをよく意識してゐることを表はしてゐた。二分間ばかりのことであつたが、ピエールには一時間にも思はれた。と不意に、戰慄が伯爵の顏の太い筋肉と鬚の上を過ぎた。それは、だんだん甚くなつて行つた、美しい口は歪められた(それで漸つと、ピエールは父がどれ程死に近づいてゐるかを知つた)そして、その歪んだ口から、かすれた幽かな音が洩れて來た。アンナ・ミハイロウナは病人の眼を一心に見詰めてゐたが、病人の欲しがつてゐるものを當てやうとして、先づピエールを指差し、それから飲料を指差し、それから伺ふやうな囁聲でワシーリイ公爵の名を言つて見、それから蒲團を指差した。病人の眼と顏とは、もどかしさうな色を見せた。伯爵は、自分の枕許を離れずに、ずーつと付添うてゐた從僕の方へ目眴せしやうと躁つてゐた。

「閣下は寢反りをなさりたいのです、」と、從僕は囁いた。そして、伯爵の重い身軀を壁の方へ向き變はらせやうと立ち上つた。

ピエールは、從僕を手傳つてやらうと席を立つた。

伯爵が寢反りをさせられてゐる間に、その一方の腕がグタリと後の方へずれた。と、伯爵はそれを元へ戻さうとして一生懸命に骨折つて見たが、それは徒勞であつた。その活氣のない腕を見てピエールが面に現はした恐怖の色に氣がついたのか、それとも何か他の思ひが、その死にかゝつた頭の中を閃めき過ぎたのか、兎に角伯爵は、自分の意の如くならぬ腕を眺め、それからピエールのギヨツとした顏を眺め、そして再び自分の手に目を返へした。すると、唇の上には、容貌とは不似合な、殉教者のそれのやうな、弱々しい微笑が漾ふた。それは自分の無力なのを嘲つてゐるやうに思はれた。その微笑を見ると、ピエールは急に、喉頭に何か塊りが出來たやうな、鼻の中が擽つたいやうな

氣持がした。そして涙が眼を曇らせた。病人は壁の方へ向けられた。ピエールは溜息を吐いた。

「お眠みになつたやうです、」アンナ・ミハイロウナは、寢床の番の交代にきた公爵令嬢を見て、かう言つた。「參りませう。」

ピエールは部屋を出て行つた。

二十二

應接間には、もうワシーリイ公爵と一番年上の公爵令嬢との外誰れもゐなかつた。二人はカザリンの肖像の下に腰をかけて熱心に話し合つてゐた。彼等はピエールと、その同伴者とを見るや否や直ぐに默つて了つた。そして、公爵令嬢は何やら物を隱して、(ピエールにはそんな風に思はれた)口ごもりながら言つた。「私、あの女を見るのも厭やですわ。」

「カチーシが、小さい客間の方でお茶を點れさせて置きましたから、」と、ワシーリイ公爵はアンナ・ミハイロウナに言つた。「彼方へいらしつて何か召上つたら好いでせう、アンナ・ミハイロウナ、でないと、身體が保ちませんよ。」

ピエールには何にも言はなかつた。たゞ如何にも同情に堪へないと云つた風でその腕を握つたばかりであつた。ピエールとアンナ・ミハイロウナとは小さい客間の方へと出て行つた。

「徹夜の後では、斯んな上等なロシア茶を一杯やる程元氣の恢復するものはありませんな。」小さな圓形の客間のなか

て、茶の道具や、冷たい夜食の料理などの載つてゐるテーブルの傍に立つて、ロルレエンは取柄のない、華奢な支那製の茶碗からお茶を啜りながら、謹しみ深い快活な風で言つた。その夜ベズウホフ伯爵家に居た人達は　元氣をつけやうといふ考から、何れもそのテーブルの周圍へ集つてゐた。ピエールは、委見や小さなテーブルの幾つもある、その小さな圓形の客間をよく記憶えてゐた。この家で舞踏會があつた時、踊りの出來ないピエールは委見の澤山あるこの小さな部屋に坐つてゐて、舞踏服をきて、露はな肩の上に眞珠やダイヤモンドやを飾つた婦人達が、部屋を横切りながら、幾度も〳〵も反影する晴々と明るい委見に映る自分の姿を眺めるのを見てゐるのが好きであつた。その同じ部屋が、今は二つの蠟燭で朧ろに照らされてゐた。そしてこの眞夜中に、一つの小さなテーブルの上には茶道具や夜食の皿が亂雜に置いてあつて、思ひ思ひの平服を着けた人達がそのテーブルを取り圍んで一言一行にも、現に寢室で起つてゐること、之から起らうとしてゐることを忘れてはゐないと云ふ風を見せながら、囁き合つてゐた。ピエールは、非常に喰ひ度かつたけれど、何も食べなかつた。彼は何うしたものかと伺ふやうに、自分の指揮者の方を振り向いた、が、その人は、ワシーリイ公爵と一番年上の公爵令孃とが居殘つてゐた客間の方へ、復た爪先立ちになつて出て行くところであつた。ピエールは、これも矢張り、さうせずには濟まされない類の事なのだと想ひ、一寸たつてから、その後を追うて行つた。アンナ・ミハイロウナは公爵令孃の傍に突立つてゐた、兩方とも昂奮した調子で、同時に物を言ひ合つてゐた。

「奥樣、私のすべき事と爲て惡るい事とを決めるのは、私の勝手にさせて置いてください。」と、公爵令孃が言つた。

この時も令孃は、さつき、居間の扉を叩き付けて閉めた時と同じやうな激昂した氣分でゐたらしかつた。

「ですが、お孃樣、」と、アンナ・ミハイロウナは寢室へ通ずる道に立塞り、公爵令孃を通らせないやうにしながら、穏

かに說き聞かせるやうに言つてゐた。「平靜にしてゐなくてはならない、かういふ大切な時に、お可憐相に、伯父さんにとつて、それは餘り苦し過ぎる事ではありませんでせうか？　こんな時に、この俗世界の用件をお聞かせするなんて、今にもあの方の靈魂は天國へ昇らうとして被居るのに……」

ワシーリイ公爵は高々と足を組み合はせた平常の姿勢で、安樂椅子に腰を下ろしてゐた。兩方の頰がはげしく痙攣してゐた、そして、それが納まると、下の方が何時もより、だらけたやうに見えた。けれど二人の婦人の言ひ爭には何の興味も持たない人のやうな風をしてゐた。

「いや、アンナ・ミハイロウナ、カチーシの勝手にさせてお置きなさい。あなたも知つてらつしやる通り、伯爵はこの方を大變に可愛がつてゐらつしやるのですから。」

「この書類の中に何が書いてあるのか、それさへ私は知つてゐないんですわ、」と、公爵令孃は手に持つてゐる象牙の書類挾みを指差しながら、ワシーリイ公爵に向つて言つた。「私は書類箪笥の中にあるのが眞正の遺書で、これは伯父さんが置き忘れてゐた書類だといふことしか、知らないんです……」

公爵令孃はアンナ・ミハイロウナの傍を廻つて出て行かうとしたが、アンナ・ミハイロウナは又一寸走り出て、再びその行手を塞いだ。

「わかつてゐますよ、ねえ、お孃さん、」と、アンナ・ミハイロウナはその書類挾みを、もう二度と離すことでないと云うやうに、熱心に捉まへながら言つた。「ね、お孃さん、お願ひです、お賴みいたします、どうぞ伯父さんをソーツとさして置いて上げて下さい。後生ですから。」

公爵令孃は何とも言はなかつた。書類挾みを引張り合ふ音が聞えるばかりであつた。若し公爵令孃が何か言へば、

それは勿論アンナ・ミハイロウナにとつて愛想の宜い言葉ではなかつたらう。アンナ・ミハイロウナは緊乎と掴み續けてゐた、しかし、聲だけは平常の優しい落着と柔らかさとを、そつくり保つてゐた。

「ピエール、こゝへいらつしやいよ。あの人は親族會議に加つたつて、餘計な人ではないでせう。ねえ、公爵?」

「何故何にも有仰らないんです、ねえ?」と、公爵令嬢は不意に、客間にまでも聞えて、そこにゐた人達を吃驚させた程の高聲で叫んだ。「あなたは何故何にも有仰らないんです? おせつかいな他人がこんな餘計な干渉をして、危篤な病人の病室の敷居際で、亂暴をしてゐるのに。惡黨。」と、憎々しげに呟き、そして精一杯な力を出して書類挾をぐつと引張つた。が、アンナ・ミハイロウナはそれを離さないやうに、それに隨つて二歩三歩進み出て、別な手で持ち替へた。

「あゝ、」と、ワシーリイ公爵は愕いて、たしなめるやうに言つた、そして立ち止つた。「見苦しい。さあ、お放しなさい。ねえ。」で、公爵令嬢はそれを放した。

「あなたも、」

アンナ、ミハイロウナは知らん顔をしてゐた。

「お放しなさい、さあ。私にまかせて貰ひませう。私が行つて公爵に訊きます。私が……お放しなさい。」

「ですが、公爵、」と、アンナ・ミハイロウナは言つた、「かうした莊嚴なお儀式のあつた後なのですから、一寸の間、靜かにさせて置いておあげなさい。ねえ、ピエール、あなたの考は如何なの?」と、傍へ來てゐた若者の方を振り向いた。ピエールは、さつきから、禮儀作法の假面を脱ぎ去つた公爵令嬢の自棄になつた顏と、ワシーリイ公爵のピク〳〵痙攣する頰とを、呆れた顏をして眺めてゐた。

「ようございますか、かういふ事の責はみんなあなた方が負ふべきものですよ、」と、ワシーリイ公爵は荒々しく言つた。「自分のしてゐる事が何んな事なのか、あなた方はそれがお分りにならない。」

「恥知らず!」と喚いて、公爵令嬢は不意にアンナ・ミハイロウナに跳びかゝり、書類挾みを奪ひ取つてしまつた。ワシーリイ公爵は頭を下げて兩手をきつと上げた。

その途端に、戸が――ピエールが長いこと見詰めてゐた、そしていつも靜かに開け立てせられてゐた恐ろしい扉が、壁へ突きあたる程烈しく、騷々しく押し開かれて、そこへ二番目の公爵令嬢が、自分の兩手を絞るやうにしながら駈けこんできた。

「あなた方は何をしてらつしやるんです?」と、がつかりして言つた。「Il s'en va, et vous me laissez seule (もう御臨終だといふのに、あなたがたは、私一人ツきりにして置いて、)」

一番年上の公爵令嬢は、書類挾みを落した。すると、アンナ・ミハイロウナは素早くかゞんで、その言ひ爭ひの目的物を拾ひあげるや否や、寢室へと駈け込んで行つた。一番年上の公爵令嬢とワシーリイ公爵とは我に歸つてその後を追ふた。二三分間して、一番年上の公爵令嬢は下唇を噛みながら、蒼い、艶のぬけた顏をして戻つてきた。ピエールを見ると、彼女の顏は堪へ切れない憎惡の情を表はした。

「さあ、もう、あなたは何んなにでも威張れるんです、」と、彼女は言つた、「あなたの願ひ通りになつたんですから。」そして泣き出しながら、ハンカチーフで顏を蔽うて部屋を駈け出た。

次に出て來たのはワシーリイ公爵であつた。彼は、ピエールが座つてゐる長椅子へよろけて來て、それへ身を埋めて、手で眼を蔽ふた。ピエールは、公爵の眞蒼な顏と、そしてその下顎が搖にでもかゝつたやうにブル〳〵震へてゐるの

とに氣が付いた。

「あゝ、ねえ、君、」と、公爵はピエールの眦の所を捉まへて言つた――その聲には、ピエールがこれまでに一度も氣付いた事のない、公爵としては實に珍らしい眞摯さと弱々しさとがあつた――「我々はよく罪を犯したり、虚言を言つたりする、して、それは何の爲めだらう？　私はもう五十歳を越してゐる、ねえ、君、……私も、……みんな一度は死ぬんだ。死は恐ろしいものだ。」公爵は涙を流して泣いた。

最後に、アンナ・ミハイロウナが出て來た。靜かな、ゆつたりした歩調でピエールに近寄つて行つた。「ピエール、」と、言つた。ピエールは物を尋ねるやうな顔付をして彼女を見た。彼女は若者の額の所を接吻し、涙で彼を潤した。彼女は暫くの間何にも物を言はなかつた。

「Il n'est plus（もう、お逝去になりました）……」

ピエールは眼鏡越しに彼女を見詰めた。

「Allons, je vous retondurai, tâchez de pleurer. Rien ne soulage comme les larmes.（さ、私が連れて行つてあげませう。お泣きなさい。涙ほど慰藉になるものはありません）」

アンナ・ミハイロウナはピエールを暗い客間へ連れて行つた。ピエールは誰も顔を見るものゝゐないのを嬉しく思つた。アンナ・ミハイロウナは彼を殘して出て行つた。そして戻つて來てみると、ピエールは手枕をしてグツスリ眠つてゐた。

翌朝、アンナ・ミハイロウナはピエールに言つた。「ねえ、こん度の事は私達一同にとつて大變な損失です。私はあなたの事を言ふのぢやありませんよ。ですが、神樣は、あなたを守つて下さるでせう、あなたはまだお年が若いし、それ

にあなたは、もう莫大な財産の持主におなりでせうよ。遺書はまだ開けられはしません。あなたは、その爲めに氣が狂つたやうになる人でないことは、よく解つてゐますが、自然あなたの身の上にはいろ〳〵な義務が懸つて來るでせうから、固りなさらなくてはいけませんよ。」

ピエールは何とも言はなかつた。

「後になつたら、又話してお聞かせしませうが、とにかく、若し私が彼所に居なかつたら、どんな事になつたか分りませんよ。伯父さんはつひ一昨日、バリースのことを忘れないと私に約束して下さいましたの。ですが、もう間に合はなかつたんです。ですからねえ、あなたはお父樣の思ひを果して下さいましよ。」

ピエールは何が何だか少しも解らなかつた。體裁惡るさうに赤くなつて、無言でアンナ・ミハイロウナを眺めた。ピエールに話をした後で、アンナ・ミハイロウナは、馬車に乘つてラストフ家へ歸へり、そして、寢床に這入つた。朝になつて起きると直ぐに、ベズウホフ伯爵の死の顚末を、ラストフ家の人々や知人達に物語つた。伯爵の臨終は自分もあんな風に死ねたらと思ふ程立派な最後であり、それは唯單に悲哀であつたばかりでなく、敎化的でもあつた、と彼女は言つた。父と息子との最後の對面は、憶ひ出すだに涙のこぼれる程いたましいものであつた、そして、あの恐ろしい瞬間に、父と子とは何方を何方とも言ひ難いほど立派に振舞つてゐた、父は、最後まで何も彼も、誰れをも彼れをもよく覺えてゐて、吾が子に向つて哀れ深い言葉をかけた、ピエールが、すつかり落膽してゐながらも、臨終の父を心配させまいとして自分の悲しみを蔽ひ隱さうと努めてゐるさまは見るさへ胸が潰れるやうであつた、とも言つた。

「C'est pénible, mais cela fait du bien; ca eléve l'âme de voir des hommes le vieux Comte et son digne fils.（それは傷ましい事です、が、利益になります。あの老伯爵やあの立派な息子のやうな人々を見ると魂が高尙になりま

す」と言つた。それから又、公爵令嬢とワシーリイ公爵の事をも人々に物語つた、但しそれは非常に秘密に、低聲で、そして非難するやうに。

二十三

ニコライ・アンドレーキッチ・バルコンスキイ公爵の領地、ルイシーヤ・ゴオルイでは、若公爵アンドレー夫妻の到着を毎日待暮らしてゐた。併し、それが爲めに老公爵家の日々の定まつた生活法は亂されはしなかつた。曾ては總司令官であり、交際社會で「プロシヤ王」といふ綽名で通つてゐたニコライ・アンドレーキッチ公爵はポール帝の御代に自身の領地へ追放され、それ以來ずうつと、公爵令嬢マリヤやその相手友達のブリアンヌ嬢などと一緒にこのルイシーヤ・ゴオルイで暮らしてゐるのであつた。新帝の代になつてからも、都へかへることを許されたのだけれど、彼は、誰でも自分に會ひたい者は、モスクワからこのルイシーヤ・ゴオルイまで百五十ウエルスト（一ウエルストは我が十町弱）の旅をして來ればいゝぢやないか、自分は、何人にも何物をも會ひたくも欲しくもないと言ひ〳〵して、一度も田舍の家を出なかつた。彼は常日頃、人間の不德は凡て懶惰と迷信――この二つが因となつて生ずるものであり、又、人間には唯二つの德――即ち精進と聰明としかないといふ說を持してゐた。彼は自分自ら娘の敎育を引き受けた。これ等の重要な素質を發達させるために、彼は、娘が二十歲になるまで、續けて代數と幾何學とを敎へてゐた、そして始終何かしら爲て居るやうに娘の全生活を割り振つて了つた。彼自身は、何時も感想を書いたり、高等數學の問題を解

いたり、轆轤で嗅煙草函を造つたり、花園へ出て働いたり、領地の何處かしらで絕えず建築させてゐる農事の建物の見廻りをしたりして、暮らしてゐた。何事によらず事を爲遂げるのに大切なことは、秩序正しくする、と言ふことだといふところから、彼は、自分の暮し方の秩序を極度に正確にした。自分の食事は、定りきつた一定の樣式で備へられ、何時どころでなく、何時何分に、と云ふことまで定つてゐた。娘から下男に至るまで周圍の人々に對しては、非常に嚴格で、何時も假借と云ふものがなかつた。從つて殘忍なことはしないでも、最も殘忍な人間すら、容易に得ることの出來ないやうな尊敬と畏怖とを起させた。今は退職者であり、政治界に何等の權力も有してゐないに拘はらず、公爵の領地の在る地方の高官達は何れも、公爵を訪問しなければならぬやうに思つてゐた、そして、まるで雇ひの建築師や庭師や、もしくは令嬢マリヤと同じ樣に、公爵が出て來る何時もの定つた時間まで、客間で待つてゐるのであつた。書齋の際立つて高い扉が開いて、萎びた小さい手の、顏を顰める度に鋭い若々しく見える眼の光を隱す胡麻鹽の押つかぶさるやうな眉の、化裝粉をつけた鬘をかぶつた老人の小さな姿が現はれると、客間にゐる人達は、みんな一樣に尊敬はもとより畏怖をさへ覺えるのであつた。

若い人達が到着する筈であつた日、公爵令嬢マリヤは、朝の定つた時間に平常の通り、父に朝の挨拶を言ひに控室へ行つた、そしてオド〳〵と十字を切り、心の內で祈禱の文句を繰返へした。毎日こんな風にして彼女は父のところへ行つた。そして何時も、父とのその日の對面がうまくゆくやうにと祈るのであつた。化粧粉をつけた年老いた從僕が、客間の自分の席から靜かに立ちあがつて「お入りなさいまし。」と、囁いた。

扉越しに轆轤の規則正し〳〵廻る音が聞えてきた。公爵令嬢はスーつと輕く開いた扉をビク〳〵ものでおさへたまゝ、チツと扉口に立ち止つた。公爵は、轆轤に向つて仕事をしてゐたが、チラリと振り向いただけで、又仕事を續けた。

廣い部屋は、始終使用つてるらしい道具類で一ぱいになてゐた。いろ〳〵の圖案や書類の載せてある大きなテーブルや、ガラス戸張りの背の高い書籍箱や、古い雜記帳の開いたまゝで載せてある、公爵が立つたまゝで物を書く高いテーブルや、周りに細工道具が列んで、鉋屑のちらかつてゐる指物用の轆轤や、さうした凡てのものが、絶間のない、何時も變らぬ、秩序正しい活動を物語つてゐた。鞴型風の銀の刺繍をした靴を穿いた公爵の小さい足の運び方、筋ばつた小さい手の確乎した握り方が、今になつてもまだ意志の強い、敏捷な、壯健な老年の力を示してゐた。二三度廻した後、公爵は轆轤の踏板から足を離し、鉋を拭き、盤に結び附けてある革袋の中へそれを投げ込み、そしてテーブルの所へ行つて娘を呼んだ。公爵は自分の子供達に決して紋切形の祝福を與へなかつた。今日はまだ剃刀を當てない毛だらけな頰をさし出したばかりで、嚴格だけれど、同時にひどく情愛のこもつた眼附をして娘を見ながら、「達者かな？……よろしい、では、お坐り。」と言つた。彼は自分で書いた幾何の問題帳を取り、自分の椅子を足で引寄せた。

「明日のだ、」と、ページを繰つて、或る一節から他の節へと、硬い爪で印を付けながら口早に言つた。公爵令嬢はテーブルに乗りかゝるやうにして問題帳の方へ顔を寄せた。「待てよ、お前のところへ手紙が來てゐる、」と、老人は思ひ出したやうに言つて、テーブルに縛りつけてある袋の中から、女文字の手紙を一通取り出して、テーブルの上に置いた。

その手紙を見ると、公爵令嬢の顔は斑らに赤くなつた。彼女は急いでそれを取上げて、その上へかゞみ込んだ。

「エロアズからかい？」と、公爵は、まだ强健な黃色い齒を見せて、冷やかに微笑みながら訊ねた。

「え、ジュリイから、」公爵令嬢はおづ〳〵と公爵を見あげ、おづ〳〵微笑みながら言つた。

「あと二通はその儘お前に渡すが、三本目のは私が讀む、」と、公爵は嚴格に言つた。「お前は下らない事ばかり書いてやしないかな。三本目は私が讀む。」

「これもお讀みなさいまし、お父樣。」と、公爵令嬢は益々顔を赤くして、手紙を父親の前へ差出しながら答へた。

「三本目のだ、三本目のをだよ、」と、公爵は言葉短かに叫んで、手紙を押し返へし、テーブルに肱をもたせて、幾何の圖のある帳面を自分の傍へ引寄せた。

「さて、」と言つて、老人は娘の傍へよつて書物の上へかゞみ込み、片腕を娘の坐つてゐる椅子の背に置きながら始めた。すると、公爵令嬢は、年寄臭い、そして烟草臭い一種特殊な毒々しい匂ひに取圍まれたのを感じた、それはズツと長いこと父親に附隨物のやうに思ひ慣れて居たものであつた。「さあ、いゝかい、是等の三角形は何れも相等しい。よく御覽、角ＡＢＣ……」公爵令嬢は、自分の顔の直ぐ近くで光つてゐる父親の眼を、おど〳〵しながらチラリと見た。赤い斑點が、顔ぢうに擴つた。勿論一言も解らぬらしかつた。餘りの恐さに、おど〳〵して了つて、續いて父のしてくれる說明が何んなに明瞭であつても、少しも呑み込めなかつた。

教へる方が惡いのか、それとも教へられる人の方が惡いのか、とにかく毎日からした同じ事が繰り返へされるのであつた。公爵令嬢は眼が變になつて、何も見る事が出來ず、何も聞くことも出來なかつた。彼女の感ずるものは唯、嚴格な父親の干涸びた顔、その呼吸、その臭氣ばかりであつた。そして、何うかしてその書齋から一時も早く逃げ出し、自分の部室で氣儘に問題を解きたいものだと、それぱかり考へてゐた。老人はよく機嫌を損じた。騷々しい音をさせて、自分の腰かけてゐた椅子を後へ押しやつたり、復たそれを前の方へ引摺り出したりして、怒り出さないやうにと一生懸命に自分を抑制するのだが、何時も大抵は怒り出し、叱り飛ばし、そして何うかすると帳面を床へ擲り付けるのであつた。

公爵令嬢は間違つた答をした。

「まあ、お前は何といふ頓間だ！」と公爵は怒鳴つて、帳面を傍へ突きやり、プイツと脊中を向けた。が、直ぐと立ち上り、あちこちと歩き廻はり、公爵令嬢の髪の毛の上に手を置き、そして再び腰をかけた。彼はテーブルに摺り寄つて説明を續けた。

「こんなことぢや不可ない、駄目だ、」令嬢が問題帳を取り上げ、それを閉ぢながら部屋を出やうとした時、公爵は言つた、「數學は大切なものだ。ねえ、私は何うしてもお前を世間の平凡な馬鹿な女共のやうにならせたくないのだ。辛棒しなさい、今にこれが好きになるよ。」彼は娘の頬を輕く叩いた。「數學はお前の頭の裡から馬鹿をすつかり追ひ拂つてくれる。」

令嬢は去らうとした、が、公爵は手眞似でそれを止めた、そして高いテーブルから絲の切つてない新らしい書物を取つた。

「こゝに書物がある、これもエロアズがお前の所へ送つてよこしたのだ、「神祕の鍵」と云つたやうな、宗教書だ。しかし、私は誰の信仰にも干渉はしない。……私はそれを見た。持つておいで、さあ、行つた、行つた。」

公爵令嬢マリヤは沈んだ、おど〳〵した表情をして自分の室へ歸つて行つた。この表情は彼女の顏から滅多に消えたことはなく、不器量な病身らしい顏を一層不器量にしてゐた。彼女は、小形の肖像が幾個も列べてあつたり、手帳や書物の散らばつてゐる書卓に向つて腰を下ろした。公爵令嬢は、父親がキチンとしてゐたと同じ程度にダラシがなかつた。彼女は幾何の問題帳を下に置いて、そしてもどかし相に手紙を開いた。手紙は自分の一番親密な、子

供の時からの友達から來たのであつた。友達といふのは誰でもない、ラストフ家の命名日の夜會にきてゐたジュリイ・カラアギナであつた。

手紙はフランス語で、次のやうに書かれてあつた。

「Chère et excellente amie:（親愛な、善良な友）——離れて居ることはほんとに苦しい厭なものねえ！　私はいつも心の中で言つてるのよ、私の存在と私の幸福の半分はあなたに在るんだつて。それから、どんなに二人が遠く離れてゐても、心と心は目に見えない絲で結び付けられてゐるんだつて、ことをね。でも、私の心は運命に謀反をするのよ、いろ〳〵愉快なことや氣をまぎらすやうなものはあつても、お別れしてからこのかた私の心の奥に潜んでゐる或る悲哀を征服する事は出來ませんの。私たち二人は何故この夏のやうに、あなたのお家のあの大きな書齋で、あの青い長椅子——Le canapé à confidences（あの秘密の長椅子）の上に一緒に居られないんでせう？　何故私は、三月前のやうに、あなたの優しい、物靜かな、物を見徹すやうな眼から道德上の生々とした力を與へて頂くことが出來ないのでせう？　ほんとに懐しいあなたの眼、それは、この手紙を書いてゐる間にも私の眼の前にちら付くやうに思はれますわ。

こゝまで讀んで來ると、公爵令嬢マリヤは溜息をして、自分の右手にあつた姿見鏡の方を見返つた。鏡は、形のよくない弱々しい姿と、疲せた顏とを映し返へした。何時も〳〵陰鬱なその眼は、今、鏡の裡の自分を、殊のほか失望した表情をして眺めてゐた。お世辭なのだわと、公爵令嬢は思つて、向き直つて又讀み續けた。併し、ジュリイは、

自分の友達にお世辭を言つたのではなかつた、彼女の眼は――大きく、深く、そして輝いて、(暖かな光線が、何うかするとそこから流れるやうに射出すかと思はれた)實際美しかつた。で、顏全體が平凡であつたに拘はらず、彼女の眼は往々にして美人よりも、ズツト人を惹付ける位ゐであつた。けれど公爵令嬢は、自分の眼の美しい表情を自分で見た事はなかつた、さういふ表情は彼女が自分自身のことを思つてゐない時に現はれるのであつた。誰でもさうだが、彼女も鏡に向ふと直ぐに、その顏は氣取つた、不自然な醜い表情になつた。

彼女は手紙を讀み續けた、――

モスクワぢうが、戰爭の話で持ち切つてゐます。私の二人の兄のうち一人は、もう出征ました、も一人は近衛にゐますが、やがて國境へ進軍するといふんですの。聖上陛下もペテルブルグをお發ちになりました。戰線に玉體をお曝らしになるんですつて。どうか神樣の思召しで、歐羅巴の平和を破壞しつつある、あのコルシカの怪物が、神が元首として私共にお使はし下つた天使に依つて滅ぼされるやうにしたいものねえ。

兄さん達の事は別にしても、この戰爭で私の一番大切な一番親密な人を奪られて了ひました、それは、あの若いニコライ・ラストフのことなの。あの人は熱誠な質なので、凝つとして居られなくなつて、大學をやめて軍隊に投じたんです。ねえ、マリヤ、私はあなたに白狀しますがね、あの人がまだ、あんなに若いのに軍隊に這入つて行つてしまつたのは、私にとつては大變な悲しみなんですの。この夏、あなたにお話ししたあの若い人は、二十歳で老爺さんになつて了ふ人の多い世の中には、ほんとに珍らしいほど氣位が高くて、若々しいんですのよ。それに、何よりも、大變に卒直で、情深いんです。大變に純潔で詩的な人なものですから、二人の交際は淺いの

だけれど、いろ〳〵辛い目に會つて來た私の不幸な心には、この上もなく懷かしい忘れ難いものになつてゐるんですの、何日か私、二人の訣別のことや、別れる時にお互ひにし合つた事や、みんなあなたにお話ししますわ。今はね、まだ事があんまり新らし過ぎるんでお話しが出來ませんの。

あゝ、chère amie!(親愛なる友よ!)こんなに強い苦痛や喜びを知らないあなたは幸運ね。ほんとにあなたはお仕合せよ、何故つて、いつだつて苦痛の方が喜びよりは強いものですからね。ニコライ伯爵は私と友達以上のものになるには、まだ若過ぎるつてことは、よく知つてゐます、だけど、この甘い友情、この詩的な純潔な二人の交際は、私の心の要求を滿足させたんです。この話は、もう止しませう。

モスクワぢうの大評判になつてゐるこの頃の珍聞と云へば、ベズウホフ老伯爵の逝去られた事と、その遺産のことです。まあ、奇怪しいでせう、三人の公爵令嬢の手にはまるで何にも入らず、ワシーリイ公爵には何一つ遺されず、何もかも全部ピエールさんが相續して了つたんです。それに、あの人は正當の息子と認められたんですから、今はベズウホフ伯爵として、ロシア一等の幸運兒になつて了つたんですわ。何でも、ワシーリイ公爵は今度の事件では大變拙劣いことがあつたとかで、すつかり悄げ込んで、ペテルブルグへ引返へして了つたとか云ふことです。

私には遺産だの、遺言狀だのつてことは、さつぱり解りはしませんが、それは面白いの、私達が、何でもない唯のピエールさんとして知つて來たあの若い人がベズウホフ伯爵になつて、ロシア中での大富豪の一人となつてからといふものは、年頃の娘を持つて苦勞してゐる奥さん達や、それからさういふ娘さん達御自身までが、ピエール――私にはこれまで何時も貧弱な人間にばかり思はれてゐた、といふに憚らない人――に對する調子や態度

がガラリと變つて了つたんですよ。世間では、この二年以來、私の知りもしない人を私の良人に擬らつて面白がつてゐたんですが、今度は、モスクワの結婚の取沙汰では、一般に私をベズウホフ伯爵夫人にしてゐるんですの。だけど、あなたは、私にそんな氣の無いことを認めて下さるわね。

時に、結婚といへば、あの la tante en général.（みんなの小母さん）アンナ・ミハイロウナが、極く秘密なんですがねつて仰有つて、あなたの爲めに企謀んでゐる緣談を打明けてくれましてよ。誰れでもない、あのワシーリイ公爵の息子さんのアナトールなの、何でも身持ちを直させる爲めに、お金持ちで身分の高い人と結婚させやうといふので、親類中の選擇があなたの上に落ちた譯けなの、この事をあなたは何うお考へですか、私には解らないけれど、豫めお知らせして置くのが私の義務だと思つたんです。アナトールは大變奇麗で、ひどい不身持ちなんだつてことです。あの人に就いて私の聞き出せたことはそれだけです。

ですが、噂はもうこの位ゐにして置きませうね。もう二枚目の紙がお了ひになるところです、それに、母がアブラークシンの所へ晩餐に行くんだつて私を呼びによこしたとろですから。宗教書をお送りしましたからお讀み下さい、それは當方で今大變に評判になつてゐるものです。この書物のなかには人間の弱い意思では容易に達せられないこともありますが、大變に結構な書物ですの。これを讀むと心が和らぎ、高尚になります。左樣ならお父樣によろしく、ブリアンヌさんにくれ〴〵もよろしく、私は心からあなたを抱擁します。

ジュリイ。

追伸――あなたのお兄樣とお兄樣のお美しい奥樣のことを聞かせて下さいな。

公爵令嬢は、物思はしなげな微笑みを浮べながら考へこんだ。（彼女の顏は、輝く眼の爲めに晴々として平常とはま

るで變つてゐた）やがて、つと起立つて、彼女は重々しく歩みながらテーブルのところへ行つた。彼女は紙を取出した、手はその上をはしこく動き初めた。彼女は次のやうな返事を書いた。――

「Chère et excellente amie:（親愛な、善良な友よ）――十三日のお手紙は大變嬉しく拜見いたしました。あなたは今でもやつぱり私を愛してゐて下さるのね、私の優さしいジュリイ、あなたは、遠く別れてゐることを、大變に辛い事だと仰有るけれど、それが爲めにあなたのお心の變るやうな事はなかつたのね。あなたは別れてゐるといふ事を歎いていらつしやる――そんな事を言つたら、私なんか何うすればいゝのでせう。だつて、自分の懷しい親しい方とは悉皆遠く離れてゐるんですものねえ。あゝ、若し私共に宗教の慰藉がなかつたら、人生は何んなに悲しいものでせう。

あの若い人に對する、あなたの愛情をお話しなさるのに、何んで、あなたは私に氣兼ねなどなさるの。さう云ふことでは、私は自分自身に對しての外は誰れにだつて寛大です。私は他人のさうした心持ちは察しられますわ自分では一度もさうした經驗がないから、贊成することは出來ないかも知れませんが、決して批難はしませんわたゞ、隣人を愛し、敵を愛するところの基督教の愛の方が、若い男の美しい眼によつて、あなたのやうな詩人的な優しい乙女の胸に釀される愛よりは、もつと貴く、もつと快く、そして、もつと美しいと、そんな風に私には思はれるだけです。

ベズウホフ伯爵の逝去られた報知は、あなたのお手紙よりも前に私共へ參りました。それを見て、父は大變氣に病んでゐるんです。伯爵は、この、'grand siècle'（偉大なる世紀）を代表する最後の一人だつた。今度は自

分の番だ、だが、自分は出來るだけ長命をするやうにするんだなんて言つてゐます。そんな不幸のないやうに神様にお祈りしてゐます。

ピエールに就ては、あなたと御意見を共にすることが出來ません。私はあの人を、子供の時分に知つてゐました。あの人は大變に優しい心を持つてゐるやうに私には思はれました。人間に一番大切なのはこの性質だと思ひますわ。ピエールの遺産相續と、それに就いてのワシーリイ公爵の行動は、双方の爲めに大變に悲しいことですあゝ、親愛なる友よ。富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し、と言はれた神聖なる救世主のお言葉は實に恐ろしい眞實です。私はワシーリイ公爵を憐れみ、ピエールの爲めには尙ほ更ら氣の毒に思ひます。あんなに若くつて、そして、あんなに澤山な財産を背負はせられたのですもの、様々な誘惑に逢はなければならないに定つてゐますわ。もし私がこの世の中で一番の願ひはと尋ねられゝば、私は、乞食の中の一番哀れな者よりも、なほ一層貧乏でありたいと答へるでせう。

Chère amie,(親愛なる友よ) モスクワで大評判だと言つて送つて下すつた書物は本當に〳〵有難う。ですが、あなたのお言葉によると善い事が澤山書かれてあるが、其中にはわれ〳〵弱い人間の理解力では解らない事があると言ふことですから、私にはそんな解らないものを讀んで時間を費すのは、隨分無駄なことのやうに思はれますわ、だつて、その解らないと云ふ理由一つだけで、何の利益も與へてくれないのは分つてゐますもの、世間には、唯徒らに人の心に疑惑を起させ、人の想像心を煽り立て、キリスト教の純一とは全然反對な誇張を吹き込むばかりな奇怪な書物に讀み耽つて、自分達の頭を混亂させて了ふ人がよくありますが、私にはそんな方の心持ちがどうしても分りませんのよ。私達は使徒行傳や福音書を讀みませう。かうした書物の中にある神秘なことを解かうと

して穿鑿するやうな事はしないやうにしませう。

我々と永遠の神様との間の超えることの出來ない幕となつてゐるこの肉の衣を着てゐる以上、我々のやうな哀れな罪人に、神の恐ろしい神聖な秘密を會得しやうとしたつて、出來るわけはありませんから。我々の神聖な救世主がこの世での我々の案内として、我々に遺して下すつた様々な崇高な法則を學ぶだけに止めて置く方がいゝんです、私達はその法則に從ひ、それを守つてゆくやうに努めやうではありませんか。われ〳〵弱い人間の理解力を頼みにしなければしないほど、神様の御心に協ふのだといふ信仰を固くしやうではありませんか、神様はご自分から出ない知識をお排けになります。神様が我々に知らせない方が宜いとして隱しておいでになるやうな物を、無理に知らうとさへしなければ、しないほど、却つて早く神様は尊い靈の力に依つてそれを我々に啓示して下さるものだといふ信仰を固くしやうではありませんか。

父は、緣談を申し込んで來た人の事は私には何とも話しません、唯だ手紙の來たこと、それからワシーリイ公爵が訪ねていらつしやるのを待つてゐるといふ事を云つて聞かせたばかりですわ。私の緣談に就いては私は、結婚は、私共が從はねばならぬ神聖な制度であると信じてゐる事を、親愛な、善良な友達のあなたに申上げて置きます。どれほど私に取つて苦しくとも、苦し全能の神様が、妻となり母となる義務を私に負はせることがあるならば、神様が良人として私にお授けなさる人が、自分の性に適ふだらうか、何うだらうかなどと思ひ惑ふことなく、私は出來るだけ忠實に自分の義務を盡すやうに努力いたしませう。

私は兄から手紙を受取りました、兄は義姉といつしよにルイシーヤ・ゴオルイへ來ると言つてゐます。併し、この悦びは長くは續きますまい。だつて、兄は、唯理由も分らずに、われ〳〵一同が捲込まれてゐる、今度の不

幸な戰爭に參加する爲めに、私達を後にして出掛けて行くことになつてゐるのですから。戰爭の話しで持切つてゐるのは事務と交際の中心であるあなた方のほうばかりでなく、都會の人達が一般に想像するやうな、野良仕事や、自然の靜寂のなかにも、やはり、戰爭の噂さが傷ましく聞かれ、傷ましく感じられてゐます。父は前進とか退却とか、そんな私などには毫しも解らないことばかり言つてゐますわ。そして一昨日のこと、私が平常の通り村の通りを散歩してゐると、測らず胸も張り裂けるやうな光景に出つくわしました——それはこの地方で召集されて、軍隊に送られる補充兵の一隊でした。別れ行く人々の母、妻、子供達の有樣をあなたにお見せしたかつたわ。その人達の獻歌げる聲をあなたにお聞かせしたかつたわ。愛と、罪を宥すこととを敎へて下すつた救世主の捻を人間が忘れてしまつて、お互ひに殺し合ふ技術を何よりも尊いものとしてゐるやうな思ひがされました。

Adieu. (左樣なら) 親愛なる、そして善良なる友よ、我々の神聖なる救世主及び聖母の尊い、そして力あるお惠みがお身の上にあらむことを。

マリイ

「Ah, vous expédiez ce courier, princesse; moi j'ai déjà expédié le mien. J'ai écrit à ma pauvre mere.(おや、あなたも手紙をお出しになるんですのね、私はもう自分のを出して了ひましたわ。私は可哀相な母に宛てゝ書きました の)」と、何時もニコ〳〵してゐるブリアンヌ嬢が、Rを轉がすやうに發音しながら、氣持ちのいゝ沾ひのある聲で口早に言つた。彼女は、公爵令嬢マリヤの沈みこんだ、憂鬱な零圍氣の中へ、陽氣な、氣輕な、そして滿足してゐるやうな、別の世界をもたらした。

「お嬢樣、お氣をつけにならないといけませんよ、」と、聲をひそめて、言ひ足した、「公爵は口論をなさいましたの、」

と、Rを妙に轉がして發音し、自分の聲に聞き惚れてゐるやうなふうで言つた。「ミハイル・イワーノフと口論をなさいましたの。大變御機嫌が惡くつてひどく氣むづかしい顏をしてゐらつしやるわ。ご用心なさいな、よろしうございますか。」

「あら、chère amie.(あなた)」と、公爵令嬢マリヤは答へた、「わたし、お父樣がどんな御機嫌でゐらつしやらうと、そんな事は決して私に言つて下さるなつて、お願ひしてあるぢやありませんか。私はお父樣の事を彼此れ言ひはしません、そして他の人にもそんな事をして頂きたくありませんわ。」

公爵令嬢は、ちよつと懷中時計を見た、すると、クラヴイコオド(一種の有鍵樂器)の稽古をするに定めてある平常の時間にもう五分間遲れてゐたので、吃驚したやうな顏付をして休憩室へと行つた。一日を割り振つた規則に從つて、十二時から二時までの間、公爵は晝寢をし、公爵令嬢はクラヴイコオドの稽古をするのであつた。

二十四

白髮頭の從僕は、莊大な書齋から聞えて來る公爵の鼾聲に耳を傾けながら、うと〳〵と控室に坐つてゐた。ずーッと離れた部屋から、閉め切つた扉を洩れて、デュセックのソナタの難かしい歌節が響いて來た。それは二十度も繰り返へされた。

その時、馬車と荷馬車が上り段へ乘りつけられた。そして馬車からはアンドレー公爵が下り、自分の小さな妻を扶

け下ろし、自分の先に立たせて家の方へ進ませた。鬘をかぶつた白髪頭のチホンは、控室の扉口からヒヨイと頭を出して、低聲で、公爵は今晝寢中だと告げ、そして急いで扉を閉めた。どんな非常な事があつても、よし息子の來着でも日々の定まつた規則を破ぶつてはならない事をチホンは知つてゐた。アンドレー公爵もチホンと同樣によくそれを知つてゐるらしかつた。彼は、暫らく會はずにゐた間に、父の習慣が變はつたか何うかを確かめでもするやうに、一寸時計を見た。そして變つてゐないことが解ると、妻の方へ振り向いた。

「二十分すると起きられる。マリヤの所へ行かう、」と、言つた。

小さな公爵夫人は此頃肥つた、が、微笑と薄い口鬚とを持つた、その短かい上唇は、物を言ふ度に、今も相變らず陽氣らしく可愛らしく上へあがるのであつた。

「Mais c'est un palais!(まあ、まるで宮殿ね)」と、彼女は、世間の人が舞踏會の席上で、その家の主人にお世辭を言ふのと同じやうな表情をして、あたりを見廻しながら、良人に言つた。「まゐりませう、早く、早く」! 周圍を見廻しながら彼女はチホンに向つて、良人に向つて、それから案内をしてゐる從僕に向つて微笑んだ。

「マリヤはお稽古なんですね。そーッと行つて、吃驚させてやりませうよ。」

アンドレー公爵は靜肅な、併し氣のない表情をして妻の後に隨いて行つた。

「お前は老けたね、チホン、」と、彼は、傍を通つた時、自分の手に接吻した老人に言つた。

三人がクラヴイコオドの音の洩れて來る部屋のところまでゆくと、可愛らしい、金髪のフランス女が脇扉から出て來た。ブリアンヌ嬢は、嬉しくて耐らないやうな樣子であつた。

「Ah, quel bonheur pour la princesse!(まあ、お嬢樣がどんなにお喜びでございませう)」と、彼女は叫んだ。「と

う〳〵おいでになりましたのね。行つてお知らせしなくつちや。」

「いゝえ、いゝえ、どうぞ不可いんですよ。あなたはブリアンヌさんね、義妹の仲好しだといふんで、疾から、あなたの事は存じてゐましたわ。」と、公爵夫人は彼女を接吻しながら言つた。「彼の女は、私達が今日來やうとは思つてゐないんでせう?」

彼等は休憩室の扉口へ行つた。内からは又しても繰り返へされてゐる例の歌節がきこえた。アンドレー公爵は、何か不愉快なことを豫期してゐるかのやうに、顏を顰めてヂッと立ち止まつた。

小さな公爵夫人は這入つて行つた。音樂は中途で途切れた、叫び聲とマリヤの重々しい足音と接吻の響とを公爵は耳にした。公爵が入つて行くと、公爵の婚禮の時にほんの一寸の間顏を合はせた切りの二人の婦人は、互ひに抱き付き合つて、さも懷しさうに、互ひの唇を、最初觸れた場所へ固く押しつけてゐた。ブリアンヌ嬢は兩手を胸に押しつけて、二人の側に立つてゐたが、神の惠みを感謝してゐるやうなその笑顏は、笑ひ出しさうでもあり泣き出しさうでもあつた。アンドレー公爵は、音樂の愛好者が、調子外れの音を聞いた時のやうに肩を搖り、そして顏を顰めた。二人の婦人は離れた。が、二人とも愚圖々々してはゐられないとでも云ふやうに、大急ぎで、も一度固く抱き合つて、互ひに腕を接吻し合ひ、引張り合ひ、やがてまた互ひに顏を接吻し始めた。それから二人は突然泣き出し、またも接吻し始めて、すつかりアンドレー公爵を驚かした。ブリアンヌ嬢も泣いた。アンドレー公爵は紛れもなく氣になるやうであつた。けれど二人の婦人にとつては、自分たちが泣くのは如何にも自然なことに思はれた、顏を合せて涙を出さずにゐられやうとは夢にも思つてゐないやうであつた。

「あゝ、あなた!」「あゝ、マリイ!」と二人は同時に話し出した、そして笑つた。「昨夜、私あなたのことを夢に見た

わ。　ぢやあなたは、私たちが今日來やうとは思つてゐなかつたの？　あら、マリイ、あなたお痛せなすつたわねえ。そして、あなたは大變お太りなすつたわ。」

「j'ai tout de suite reconnu madame la princesse,」（私は直ぐに奥様だと判りましたの。）と、ブリアンヌ嬢が口を挿れた。

「Et moi, qui ne me doutais pas,（わたし、思ひも寄らなかつたんですの。）おや、アンドレー、私ちつとも氣が付かなかつたわ。」と、マリヤは叫んだ。

アンドレー公爵兄妹は互ひの手に接吻し合つた、そして公爵は妹に、お前は相變らず泣蟲だねと言つた、マリヤは兄の方へ振り向いて、涙の隙から、この刹那美しくなつた大きな涼しい眼で、アンドレー公爵の顏を、やさしく、さも懷しさうに見詰めた。

小さい公爵夫人は間斷なしに話し續けてゐた。薄い柔毛のある短い上唇は、絶えず下へさがつて薔薇色の下唇に觸れ、そしてまた、きら〳〵する齒と眼との微笑に伴れて離れるのであつた。公爵夫人は、自分の今の身體には大變なことになり相であつた、スパアスカヤ山で起つた椿事を物語つた。そして、直ぐその後から今度は、着物をすつかりペテルブルグへ置いて來たから、此所では何んな風をして歩くか知れないといふ事や、アンドレーが全く變つて了つたといふ事やキッチイ・アディインツオヲが或る年寄の人に緣付いた事や、マリヤに立派な花婿の候補者が出來たが、その話は後でしやうといふ事やを話した、マリヤは矢張り默つて兄を見詰めてゐた。その美しい眼は情愛と憂鬱とに滿ちてゐた。彼女の思ひは明らかに、義姉のお喋舌には少しも關係のない、自分だけの道を辿つてゐたのだ。公爵夫人が、ペテルブルグでの最後の祭日の談話をしてゐる最中に、マリヤは兄に話しかけた。

「ぢや、何うしても戰爭に出る事になつてゐらつしやるの、アンドレー？」と言つて、溜息をついた。リイザも同じやうに溜息をついた。

「あゝ、明日にも出發しなければならないんだ、」と、兄は答へた。

「Il m'abandonne ici, et Dieu sait pourquoi, quand il aurait pu avoir de l'avancement,（この人は此所に私を棄てゝ行くんですの、凝つとしてゐれば昇進するんだのに、何故だか理由が分りませんのよ）」

公爵令嬢マリヤは、それを終ひまで聞かず、自分の思ひの糸を追うてゐたが、義姉の方を振り向いて、愛情のこもつた眼で義姉のお腹のところをぢつと見た。

「確かにさうなの？」と言つた。

義姉の顏附は變つた。そして、溜息した。

「えゝ、ほんとですのよ、」と彼女は言つた、「あゝ、恐ろしい……」

リイザの上唇は垂れ下がつた。義妹の顏のそばへ自分の顏を擦り寄せて、そして復ただしぬけに泣き出した。

「憩まなくちやいけない、」と、アンドレー公爵は顏を顰めて言つた。「さうしちや何うだ、リイザ？　これをお前の部屋へ伴れてつてお呉れ、その間に私はお父様のところへ行つて來るから。どうだね、お父様は相變らずかい？」

「そつくり、ちつとも變らないわ。尤もあなたには何んなに見えるか知れませんけれど、」と、公爵令嬢マリヤは嬉しさうに答へた。

「時間をキチンとすること、並木道の散歩、それから轆轤もかね？」と、アンドレー公爵は、父親に對して十分な愛情と尊敬とを持つてゐるに拘はらず又、その弱點をも知つてゐると云つたやうな、極めて微な微笑を浮べて尋ねた。

「時間をキチンとすることも、それから轆轤も、數學もよ、それから私の幾何のお稽古も、」と、公爵令嬢マリヤは、幾何學を敎へて貰ふのが自分の生活で一番悦ばしい事の一つだと云はぬばかりに、如何にも愉快さうに答へた。

二十分が經つて、老公爵の起きる時間が來ると、チホンが、父に會ひに行くやうにと若公爵を呼びに來た。老公爵は息子の爲めに特に何日の常規を破つた。食事前に、自分が着換をしてゐるところへ入つて來るやうにと言つた、老公爵は何時もカフタン（飾帶長袖のある下衣）を着たり、髪粉を使つたりして昔風の服裝をした。アンドレー公爵が――交際社會へ出入する時のやうな横柄な顏附や身體附でなしに、ピエールと話した時のやうな生き生きした顏付で――父親の部屋へ入つて行つた時、老紳士は自分の化粧室で化粧着を着て、廣い、モロッコ皮の椅子に腰かけて、自分の頭をチホンの手に委せてゐた。

「やあ、勇士！　では、いよ〳〵ボナパルトと戰ふ氣か？」と、老公爵はチホンの手で編まれてゐる垂髪の許すかぎり、髪粉をつけた頭を、振りながら言つた。

「斷じて彼奴には用心せえ、でないと、奴いまに我々を臣下の名簿へ書き込むぞ。どうだ氣嫌は好いか。」

かう言つて、彼は自分の頰を息子の方へ差し出した。

老紳士は午食前の晝寢の後とて、大變上機嫌であつた。（彼は午食後の晝寢は銀で、午食前の晝寢は黄金だと何時も言つてゐた）蓋ひ被さつた濃い眉の下から、息子の顏を悦ばしさうに横眼でマヂ〳〵眺めてゐた。アンドレー公爵は近寄つて行つて、指定された所へ接吻した。彼は父親の一番好きな話題――現代の軍人、特にボナパルトに就いてのふざけた嘲弄には何の返事もしなかつた。

「えゝ、お父樣、私は姙娠の妻を伴れて參りました。」と、アンドレー公爵は、熱心な恭々しい眼附きで、父の顏の何

んな些少な運動をも見逃さないやうにしながら言つた。「お身體はいかがです？」

「不健康なのは、痴者か放蕩者だけだ。お前も知つてる通り、私は朝から晩まで働らいて、おまけに攝生をしてゐるだから言ふまでもなく健康だ。」

「神樣のお蔭で、」と、息子は微笑みながら言つた。

「神なんかあんまり關係はないよ。さあ、きかせて呉れ。」と、老人は自分の好きな方へ話題を戻して、言ひ續けた。

「ボナパルトと戰ふ爲にドイツ人共が敎へた新しい科學的方法――用兵學とか言つたね――は何んなもんかね？」

アンドレー公爵は微笑した。

「まあ、一寸落ち着かせて下さい、お父樣、」と、彼は、父にどんな缺點があつても、それが爲めに父に對する自分の敬愛の念は少しも變らない、と云つたやうな笑顏をして言つた。「だつて、私は今着いたばつかりなんです。」

「馬鹿なことを言ふな、馬鹿なことを、」と老人は、固り組まれてゐるか否かを試る爲めに編み下げた髪を振りながら叫んだ、そして息子の手を執つた。「お前の奥さんの部屋はちやんと用意が出來てゐる。マリヤが案内して見せてやるだらう。それから二人で腹一杯喋り散らすだらう、女つて、そんなもんだ。あれが來てくれて私は嬉しい。さあ、腰を下ろして話しなさい。ミヘリソンの隊、これは解つた、トルストイの隊も……同時の襲撃だ……だが、南軍は何うしやうとしてゐるんだ？　プロシヤは、中立だ、……それは私も知つてゐる。だが、アウストリアは何うか？」から言つて、椅子から立つて部屋を歩き出したので、チホンはその後を追ひかけながら服裝の品々を渡してやつた。「スエーデンは何うするだらうね？　どういふ案配にポメラニヤを越えるだらうね？」

アンドレー公爵は、父の質問を逃れ難く思つたので、これから開始されやうとしてゐる會戰の作戰を說明し出した

最初は何となく氣乘りのしない樣子であつたが、やがて、だん〳〵と調子づいてきた、そして、何時もの癖で、知らず識らず、ロシア語からフランス語に移つてゐた。中立を破ぶつて戰爭に參加するやうに、九萬の軍隊がプロシヤを威嚇しやうとしてゐることや、この軍隊の一部はスツラアルスンドでスエーデン軍と合する筈になつてることや、二十二萬のアウストリア軍が十萬のロシア軍と聯合して、イタリーとライン地方で活動する筈になつてゐることや、五萬のロシア軍と五萬のイギリス軍がネエプルスに上陸する筈になつてゐることや、それから、總計五十萬の軍勢が各方面から同時にフランス軍を襲ふ筈になつてゐるといふ事やを話した。老公爵は息子の話してゐることには一向興味を感じてゐないやうであつた。耳を貸してもゐない樣子で、歩き廻りながら、着換へをした、そして、三度までも不意に息子の話の腰を折つた。一度は、話しを一寸押止めて、「白いのだ！　白いのだ！」と叫んだ。

それは、チホンが、彼の着やうと思つたのと違つたチョッキを渡したからであつた。もう一度は、彼は立止つて尋ねた、「で、お產は直ぐかな？」そして批難するやうな風に頭を振つて、「それはいかんな！——先を續けた、先を續けた、」と言つた。

三度目は、アンドレー公爵が、丁度說明を終らうといふところであつた。老人は年寄ぢみた假聲で鼻唄をうたつた、

Malbroug s'en va-t-en guerre.

Dieu sait quand reviendra.

（マルブルウは戰爭に出て行く、何時になつたら戻ることやら。）

彼の息子はたゞ微笑んだ。

「これが私の意に適つた作戰だと、言ふのではありませんが、」と、息子は言つた「たゞ有りの儘の狀態をお話しした

までです。勿論、ナポーレオンは今頃はこれに劣らない作戰を立てゝゐるでせう。」

「いや、お前の話した事は、別に少しも耳新らしいことぢやない。」と言つて、老人は、考へ込んだ調子で、口の中で遠口に繰り返へすのであつた。「Dieu sait quand reviendra.（何時になつたら戻ることやら。）——さあ、食堂へ行きなさい。」

二十五

公爵は、髮粉をつけ、顏を剃つて、定めの時刻に食堂へ這入つて行つた。そこには、嫁と、公爵令孃マリヤと、ブリアンヌ孃と、抱への建築技師とが待ち受けてゐた。技師は社會上の地位から云へば極めて低い身分の人なので、かうした待遇は通常ならば受けられる筈はないのだが、老紳士の一風變つた氣まぐれから、同じテーブルで食事を許されることになつたのだ。老公爵は、平常は小やかましく階級の區別を守つて、地方官などはどんな高い地位の者でも滅多に自分の食卓に就かせなかつたのだが、今日は、何うした譯か、隅の方へ行つてはよく格子縞のハンケチで鼻汁をかみ〳〵する建築技師ミハイル・イワーノキッチを不意に選び出して萬人平等論の實例を示したのであつた。そして度々、娘に向つて、ミハイル・イワーノキッチも自分達と少しの違ひもない立派な人間なんだと言つて聞かせた。食事中も老公爵は、誰れよりも餘計にこの無口なミハイル・イワーノキッチに話しを仕かけた。

この家の他の部屋々々と同じやうに天井の非常に高い、この食堂では、家族の人達や從僕達が、各自椅子の後に立

つて老公爵の入つて來るのを待ち受けてゐた、腕にテーブル・ナプキンを掛けた膳部掛りは、テーブルの具合を見渡し、給仕共に目交せしながら、絶えず壁の時計と、公爵の入つて來る皆の扉口とをかはる〳〵不安らしく見較べてゐた。アンドレエー公爵は、壁にかゝつてゐる圖抜けて大きな金縁の額に眼をとめた。彼はこれまで一度もそれを見たことがなかつた。その額縁には、バルコンスキイ家の系圖が嵌つてゐた。それと向ひ合ひに、それと同じ位な大さの額がかゝつてゐて、それには、確か抱への畫家の手になつたものらしい、恐ろしく拙劣な、王冠を頂いてゐる或る王の肖像が入つてゐた。この王はリューリツクの後裔で、バルコンスキイ家の祖先だといふ事にされてゐた。アンドレー公爵は、頭を振りながらその系圖を眺めてゐたが、やがて、本人によく似た滑稽な肖像畫を見た者が笑ふやうな笑ひ方をした。

「お父様そつくりだね！」と、彼は自分のそばへやつて來た公爵令嬢マリヤに言つた。

公爵令嬢マリヤは、吃驚して兄を見た。彼女は兄が何で可笑しがつてゐるのか解らなかつた。彼女に取つては、父のすることは何事でも、それに就いて兎角の批評が出來ない程崇高いものに思はれて居たのであつた。

「どんな人にだつて弱點はあるものだね、」アンドレー公爵は言ひ續けた。「あんなに廣大な智力を持つておいでの癖にこんな愚にもつかない事をなさるなんて！」

公爵令嬢マリヤは、兄の思ひ切つたこの批評に賛成出來なかつたので、抗議を申込まうとしてゐると、丁度その時一同の待ち受けてゐた足音が書齋の方から聞えてきた。公爵は、自分の擧動の活々してゐるのを、この家の規定の窮屈なのと殊更ら對照させやうとしてでもゐるかのやうに、平常の通りの快活な迅い歩調で這入つてきた。と、その途端に、大きな懸時計が二時を打つた。すると客間でも他の時計が幽かな音を立てゝそれに應じた。公爵は立止つ

た。

おつかぶさつた濃い眉の下でギラ〳〵光る鋭い眼が、一座をズーツと見廻した後、若い公爵夫人の上に止つた。若い公爵夫人はその瞬間、宮内官達が聖上出御の際に感ずるやうな畏怖と崇敬の心持ちを覺えた。これは、この老人が傍へ寄る凡ての人に感じさせる心持ちであつた。公爵は若い公爵夫人の頭を撫で、それから、無器用な手附でその頸を輕く叩いた。

「ほんとに、よく來てくれましたね。」と言つて、公爵夫人の眼をヂーツと見詰めてから、そこを離れて自分の席へ着いた。

「お坐り、お坐り、ミハイル・イワーノウツチ、お坐りなさい。」

彼は、自分の次の席を嫁に指示した。從僕が彼女の爲めに椅子を後ろへずらした。

「ほう、ほう！」と、老人は嫁の丸くなつた姿を見て言つた。「出來ましたね、いけないぞ！」

彼は、何時の通り、眼を動かさずに唇だけで、潤のない、冷かな、不愉快な微笑を洩らした。「運動しなければいけない、運動を、出來るだけ餘計に、出來るだけ。」と、言つた。

公爵夫人は公爵の言つてる事が耳に入らなかつた、聞かうとも思はなかつたのである。彼女は默つて、きまりの悪る相な樣子をしてゐた。公爵が、夫人の父親のことを尋ねた時、彼女は始めて返事をして、微笑した。公爵が、双方とも知つてゐる人達の事を訊ねると、公爵夫人はだん〳〵元氣づいて、いろ〳〵の人からの傳言を公爵に傳へ、都の噂などを話し出した。

「La Comtesse Apraksine, la pauvre, a perdu son mari et elle a pleuré les larmes de ses yeux.（アプラスキン

伯爵夫人は、お可憐相に、御主人に失くなられて、泣いて泣いて眼を泣きはらしてゐらつしやいました。)」と、彼女はだん〳〵調子づいてきた。

彼女が元氣づくに隨つて、公爵はだん〳〵氣むつかしさうに、公爵夫人を眺めてゐたが、充分相手を見拔き、その人柄をすつかり呑み込んでしまつたとても云ふやうに、不意に、横を向いて、ミハイル・イワーノウツチに話しかけた。

「ねえ、おい、ミハイル・イワーノウツチ、ボナパルトの奴さん、形勢が惡くなつて來たぜ。アンドレー公爵、(自分の息子を、いつもこんな風に呼んだ)の話によると、奴に對して大した軍勢が準備されてると云ふ事だ。だがね、私と、あんたとは、いつも奴を詰らない奴だと言つてゐたものだ。」

ミハイル・イワーノウツチは、何時「私とあんた」とが、そんなボナパルトの事なんか話したのか、さつぱり見當がつかなかつた、けれど公爵が、好きな話題を持ち出すのに自分をダシに使つたのだと氣がつくと、それから何うなるのか分らないので、困つたやうな顏をしてチラリと若公爵を見た。

「この人は豪い戰術家なんだよ。」と、公爵は技師を指差しながら、息子に言つた。そして會話は、戰爭、ボナパルト、それから當代の諸將軍、政治家達の事に移つた。老公爵は、當代の公人は、どれもこれも、軍事及び政治のABCをも心得てゐない、ほんの赤坊のやうなものだ、と定めこんでゐるらしかつた。それにボナパルトにしたところが、彼れにしたがへば、實は愚にもつかない一フランス人に過ぎないのだが、唯だ彼に對抗するパチヨームキンやスウオーロフのやうな人物が一人もゐないばかりに成功したのだといふのであつた。歐羅巴には政治上の紛擾があるのでもなく、戰爭があるのでもない、唯、人形芝居のやうなものがあつて、それを今の人達が何か大變な仕事でもしてゐるやうな氣で、一生懸命でやつてゐるに過ぎないのだとさへ確信してゐた。アンドレー公爵は近代人に對する父の冷嘲を面

白がつた、そして、さも愉快さうに父をおだてゝ、その話しに聞入つた。

「昔のことは何によらず善く見えるものです。」と、彼は言つた、「ですが、そのスウオーロフ將軍はモローの罠にかゝつたぢやありませんか、そして、その罠から拔け出られなかつたぢやありませんか。」

「誰がお前にそんな事を話した？　誰がそんな風に言つた？」と、公爵は怒鳴つた。「スウオーロフ！」かう言つて彼は皿を投出した、が、チホンが巧く夫を受取つた。「スウオーロフ！……いゝか、アンドレー公爵。人物が二人あつた――フリードリツヒ、とスウオーロフと……モロー輩が！　スウオーロフの手が自由であつたら、モローなんか彼の捕虜になつたに相違ないんだ。ところが、彼の手は例の火酒・會議(ジユナツプスラウト)の意)で縛られてゐたのだ。全く、術の施しやうがなかつたのだ。お前もやがて、その Hofskreigswurstschnapsrath が、何んなものだか解かるだらう。スウオーロフでさへ持て餘したものを、ミハイル・クツウゾフなどが何うするものか。駄目なことだ。」と、なほ續けた、「お前やお前の將軍達はボナパルトをやつゝける事が出來ない。お前達はフランス人を連れて來なければならないんだ――盜人を捕まへる爲めに盜人を雇ふのだ！　ドイツ人のパアレンが、一フランス人のモローを迎へる爲めにアメリカのニューヨウクへ遣られた、」と、その年ロシア軍に加入するやうにとモローを招いたことを當てこすりながら言つた。「珍なことだ！　……一體、プチヨームキンや、スウオーロフや、オルロフやは、みんな、それはドイツ人なのかい？　いや、駄目だ、お前達が正氣を失つて了つたのか、それとも私が耄碌したのか、何方かだ。まあ、どうか巧くやつてくれ、私は見てゐようよ。ボナパルトが奴等の名將になつたんだ！　ふん！　……」

「あゝいふ作戰が悉く善いとは決して申しません。」と、アンドレー公爵は言つた「たゞ、あなたが、ボナパルトを何

うしてそんな風に考へておいでなさるのか、それが私には解らないのです。笑ふならお笑ひになるが好いです。ですが、とにかくボナパルトは偉大な將軍です。」

「ミハイル・イワーノウッチ！」と、老公爵は建築技師に向つて呼んだ、技師は炙肉に氣を取られながら、みんなが自分の事を忘れて了つて呉れゝば宜いがと思つてゐたところであつた。「私が、ボナパルトを偉大な作戰家だとあんたに言ひませんでしたかね？　ところが、この人もさう言つて居ますよ。」

「確に、閣下。」と、建築技師は答へた。

公爵はまた、例の冷やかな笑ひ方をした。

「ボナパルトは、自分のシャツを着て生れて來たのだ。（幸運に生れついたの意）彼は非常に精鋭な部下を持つてゐる。それに、うまい事に、彼は第一番にドイツを攻めた。ところで、ドイツ人をやつゝけ得ないのは怠け者だけだ。世界が始つて以來、獨逸人は何時も何時も敗られてゐる。そして、一度も他を敗つたといふ例がない。奴等は唯内輪同士で勝つてゐたゞけだ。彼奴はさういふドイツ人と戰つて名を成したのだ。」

かう言つて、公爵は戰爭や政治の上にまで及んで、ボナパルトのした事で失策だと自分に思はれる事柄を一々指摘し始めた。息子はそれを反駁はしなかつた、が、どんなに反對の議論を吐かれても、彼も老公爵と同じやうに、自分の說を曲げなかつた。アンドレー公爵は聞いてゐるだけで、返事を控へてゐた。そして只管、もう長い年月の間田舍へ引つ込んだ切りで世間へ出ずにゐるこの老人が、最近數年間の歐羅巴の軍事と政治上の出來事を、からまで詳しく、かうまで正確に知り、そして、それに一々自分だけの批判を下す事が、何うして出來たのかと、驚かない譯にはいかなかつた。

二十六

「お前たちは、私が老人だから事件の眞相が解らないと思つてゐるのだらう？」と、彼は言葉を結んだ。「ところが、私はそれに身を委ねてゐるのだ！　私は夜も眠りはしない。さあ、お前たちのその所謂偉大な將軍は、何處で自分の偉大なる所以を證明したかね？」

「その話はあまり長くて、ちよいと話せません。」と、息子は答へた。

「よし、では、ボナパルトの方へつくがいゝ。ブリアンヌ嬢、Voilà encore un admirateur de votre goût d'empereur.（此處にも一人、あなた方の下司な皇帝の崇拜者がゐますよ。）」と、老公爵は巧みなフランス語で言つた。

「私がボナパルト黨でない事は、あなたはご存じぢやありませんか。」

「Dieu sait quand reviendra,（何時になつたら戻ることやら。）」と、公爵は假聲で鼻唄をうたひ、もう一層假聲を出して笑つて、テーブルを離れた。

小さな公爵夫人は議論の間も、食事の間も始終默つて坐つて、心配さうに舅と義妹とを交る〴〵見てゐた。みんながテーブルを離れると、彼女は義妹の手を執つて、隣りの部屋へ伴れて行つた。

「あなたのお父樣は、何といふ賢い方でせう。」と、彼女は言つた、「それで私あの方が恐いんでせうね。」

「あら、お父樣は、それは親切よ。」と、公爵令嬢マリヤは言つた。

アンドレー公爵はその翌晩出發する事にしてゐた。老公爵はいつもの規定を破らないで、食事が濟むと自分の部屋へ行つてしまつた。小さい公爵夫人は義妹と一緒にゐた。着物を着更へて肩章のない旅外套を着たアンドレー公爵は、自分に當てがはれた部屋で從僕と二人で荷造りをしてゐた。自分自身で馬車や、馬車に積み込まれるトランクを檢分してから、馬をつけるやうにと命じた。部屋にはアンドレー公爵がいつも持ち歩くもの、旅行函とか、大きな銀の德利立とか、トルコ製の二挺のピストルとか、父がアツチヤーコフ戰役に持ち歸つて彼に與へたサーベルとか、さういふものゝ外何も殘つてゐなかつた。アンドレー公爵の旅仕度は、すつかり整へられた。何も彼もみんな新らしく清潔で、何れも毛織物の蔽ひを掛けて、念入りに平打の紐で縛つてあつた。

家を出て、新らしい生活に入らうとする瞬間には、自分の行爲を省察する習慣の人間は、兎角一種眞面目な心持になるのが常である。かう云ふ瞬間に人は過去を顧みて未來の計畫を立てるものである。アンドレー公爵は如何にも物思はしげな、憂はしい顏をしてゐた。兩手を後ろで握り合はせて、ぢつと前方を見詰め、物思はしげに頭を振りながら、部屋を隅から隅へと足早に行つたり來たりしてゐた。戰爭に行くのが恐ろしかつたのであらうか、或は妻を殘して行くのが悲しかつたのであらうか――恐らく兩方の氣持が幾らかづゝあつたことであらう。けれど、かうした氣持でゐるのを人に悟られ度くないらしく、入口の足音を聞くと、彼は急いで握つてゐた手を解いて、蔽ひを縛つてゞもゐるかのやうにテーブルのところへ立つた、そして顏にはいつもの穩かな見透す事の出來ないやうな表情を浮べた。それは公爵令嬢マリヤの重々しい足音であつた。

「もう馬をつけるやうにお言ひつけになつたんですつてね。」とマリヤは喘ぎながら言つた。「まさしく走つて來たのらしかつた。」「私、兄樣と二人きりで、もう少し話がしたいと思つたもんですから。又いつお眼にかゝれるか解らないんで

すもの。あなた私の來たのを怒りやしない？　あなたは本當にお變りなすつたわねえ。アンドリユーシヤ。」マリヤは質問を說明でもするやうに、かう言ひ足した。

「アンドリユーシヤ。」といふ言葉を口にしながらマリヤは微笑んだ。此いかつい、立派な男が、自分の子供時分の遊び仲間であつた、あの痞せた、遊び好きな少年アンドリユーシヤと同じ人だと思ふと、如何にも不思議な氣がするのらしかつた。

「で、リイザは何處にゐるね？」と、アンドレーは相手の問ひには唯微笑を報いたばかりで、かう尋ねた。

「お姉樣はたいへん疲れてしまつて、あたしの部屋の寢椅子で眠つてらしつてよ。おゝ、アンドレー、あなたは、ほんとに好い奧さんをお貰ひになつたのねえ！」と兄と向ひ合つて寢椅子に腰を下しながら彼女は言つた。「姉さんは全くの子供よ。ほんとに可愛い、愉快な子供よ、私あの女大好きですわ！」

アンドレー公爵は何とも答へなかつた。けれど、マリヤは兄の顏に皮肉な、人を馬鹿にしたやうな表情が浮んだのに氣がついた。

「でも、ちつと位の弱點は大目に見て上げなければいけませんわ。弱點のない人があるでせうか、アンドレー？　あの女が交際社會で育つて、そこで教育された、といふことを、忘れてはいけませんよ。それに、今の、あの女の位置は餘り芳ばしくはありませんわ。人といふものはあらゆる他人の位置に自分を置いて見なくてはいけないものよ。凡てのものを理解することは、凡てのものを宥すことですわ。あゝした生活をしてきた後で、良人に別れて、たつた一人、それもあんなお身體で、田舍に取り殘されるのは、お可哀さうなあの方にとつて何んなでせう。少しは考へてお上げなさいよ。ほんとに辛いことだわ。」

アンドレー公爵は、妹の顔をみて微笑した。それは吾々が胸の底まで見抜いてゐると思ふ人の話を聞く時にもらすやうな微笑であつた。

「お前は田舎に住んでゐながら、田舎の生活をそんなに恐ろしいと思ふのかい？」と、彼は言つた。

「わたし――それは別問題よ、何うして私の事なんか持ち出すんですの？　私はこれより他の生活を望みませんわ、また實際望む事も出來ませんわ、何故つて他の生活なんか何にも知らないんですもの。でも、アンドレー、當世の交際社會に慣れた若い女にとつて、たつた一人若い盛りを田舎に埋もれるのが何んなものか、考へて御覽なさいな、だつてお父さまは始終お忙しいし、私は……此の通り……上流の交際社會に慣れた女の愉快な友達ではありませんしね。ブリアンヌ一人つきりですわ……」

「僕はあの女は實に厭やだ、お前のブリアンヌは。」と、アンドレー公爵は言つた。

「まあ、何うしてそんな事仰有るの？　あのひとはそれは親切な、好い女よ、それに、大變可哀相な身の上よ。頼りになる者が一人もないの、一人も。ほんとの事言へば、私には何の用もない、却つて邪魔になる女ですわ。兄様の知つてる通り、私は、昔つから人間嫌ひの方でせう、そして今では前より一層さうなつてきましたの。私獨りぼつちでゐるのが好きなの……お父さまは、あの女を大變好いていらつしやるのよ。お父さまが親しく、そして機嫌よくなさるのは、あの女とミハイル・イワーノウッチだけですわ、それは、お父さまが此の二人の恩人だからなの。ステルヌも言つてるやうに、『我等は我等に善をなしたる人々よりも、我々が善をなし與へたる人々をより多く愛す、』ですわ。お父さまは、あの女が孤兒だつたのを町で拾ひ上げたのよ。でも、あの女はほんとに好い人なの。そしてお父さまはあの女の本の讀み方がお氣に召してらつしやるの。夜になると高い聲で、あの女はお父さまに本を讀んで上げるんで

す。それは〳〵上手に讀むことよ。」

「時に、打明けて言つてごらん、マリイ、お父さんは、あゝ云ふ御氣象だから、お前時々は非常に苦勞をするだらうね？」と、アンドレー公爵は不意に尋ねた。公爵令嬢マリヤは、かう尋ねられて、初めは吃驚したが、やがて呆氣にとられた。

「私？　……私？　……私が苦勞しますつて！」と、彼女は言つた。

「お父さんは一體やかましい人だつたが、近頃は段々小面倒臭くなつて行くやうぢやないか。」とアンドレー公爵は父の事を輕蔑するやうな調子で言つたが、心の中では妹を困らしてやるか、試してやるか、しようと思つて居るらしかつた。

「あなたは、どの點から云つても好い人ですけれどね、アンドレー、何だか頭の好いのを誇つてゐらつしやるやうね。」と、マリヤは會話の續きと云ふよりは、寧ろ自分の考への道筋を辿つてゐるらしく、かう言つた、「で、それは大きな罪ですわ。お父さまの批評をして宜いものと思つてらつしやるの？　たとひ宜いにしたつて、お父さまのやうな方に對しては、尊敬の情よりほか起りやうはありません。私は、お父さまと一緒にゐるのを滿足にも幸福にも思つてゐますわ。私はたゞ兄様達や皆が私のやうに幸福でゐらつしやるやうにと、それだけを願つてゐますわ。」

兄は信じられないと云つたやうに頭を振つた。

「たゞ一つ私に辛いことは、――ほんとの事を言ひますとね、アンドレー、――お父さまの宗教上の事柄に就ての考へ方です。あんなに廣大な知識を持つてゐらつしやる方が、何うして太陽のやうにはつきりした事がお解りにならないで、あんな邪道にお迷ひになるのか、私には合點が行きません。私を不幸に思はせるのはたつた一つ此事だけですの。でも、これさへ、近頃は少しは宜い方へ變つてきたらしいの。近頃ではお父さまの嘲弄も昔ほど酷くはなくなりまし

た、ある坊さんに會つて、長いこと話してらつしやることがありますわ。」

「だがね、お前、お前や、その坊さんは火藥と彈丸を冗費ひしてゐやあしないかね、」とアンドレー公爵は皮肉に、併し優しく言つた。

「あゝ、あなた！　私は唯神樣にお祈りして、私のお祈りを神樣が聞いて下さるのを信じてゐるだけですの。アンドレー、」一寸默つた後、で彼女はおづ〳〵と、から言つた。「私、兄さんに聞いて頂きたい、大變なお願ひがあるの。」

「何う云ふことかね？」

「いゝえ、まあ、必らず厭だと仰有らない約束をして頂戴。何にもあなたの迷惑になる事でも、あなたに取つて價値のない事でもないの。唯私の慰めになることなんですの。約束して頂戴、アンドリューシヤ。」さう言つて、マリヤは手提袋の中に手を突込んで、何か掴んだが、まだ、それを出しては見せなかつた。掴んでゐるものは願ひの目的物であるが、その願ひをきくと云ふ約束を得ないうちは、それを手提袋から出すことは出來ないと云ふやうな風であつた。彼女は、おづ〳〵と哀願するやうな目付きで兄を眺めてゐた。

「たとひ、どんなに迷惑な事にしたところで……。」と、アンドレー公爵は、その願ひが何であるかを察したやうな樣子で答へた。

「そのことは兄さんが御勝手に考へて下すつて宜いの。あなたはお父さま同樣ですもの。どんな風にお考へになつても宜いのよ、けど、私のためだと思つて、約束をして下さい。何うぞ、ねえ。お父さまのお父さま、私達の祖父樣が戰爭の時はいつでもこれを身につけてゐらつしやつたんですよ……。」彼女はまだ手提袋の中で掴んでゐるものを外には出さなかつた、「ぢや、お約束して下すつて？」

「勿論するとも。一體何んだね？」

「アンドレー、私、聖像であなたを祝福します。何んなことがあつても之れを取り外さないといふ約束を是非して下さい……約束して下すつて？」

「重さが一噸もあつて、首が千切れるのでさへなければね……お前が滿足するやうに、」アンドレー公爵は言つた。その途端、自分の冗談を聞いた妹の顏に惱しげな表情が浮んで來たのに氣が付いて、深く後悔した。「僕は非常に嬉しいんだよ、實際非常に嬉しいんだよ、お前。」と、彼は言ひ足した。

「あなたが何と思つてゐらつしやらうと、神樣はあなたを救ひ、あなたの上にお惠みを垂れて、あなたを御自分の方へお導き下さるでせう。何故つて、ひとり神樣にのみ眞理と平和とがあるのですから。」と、彼女は感動した顏へ聲で言つた、そして嚴肅な身振りをしながら、花車な細工の、銀鎖のついた、銀の枠の中で黑い顏をしてゐる、舊い型の、小さな、卵形の救世主の聖像を兄の前へ兩手で差し出した。彼女は十字を切り、聖像に接吻して、そして、それをアンドレーに與へた。

「何うぞ、アンドレー、私のために。」

優しい、おど〳〵した光りが、彼女の大きな眼から射した。その眼が、痩せた弱々しい顏全體を明るくして、美しく見せた。兄が聖像を取らうとすると、妹はそれを押し止めた。アンドレーは、氣がついて、十字を切り、聖像に接吻した。彼の顏は優しくもあり、（彼は感動したのである）同時に皮肉でもあつた。

「Merci, mon ami.（有がたう、お友達）」妹は兄の額に接吻して、再び寢椅子に腰を下した。二人とも默つてゐた。

「今もお話ししたやうに、アンドレー、あなた、これ迄のやうに親切に寛大にして下さいよ。リイザを餘り嚴しく批判